魔法少女リリカルなのは　†THE EXECUTER's SAGA†

黒衣を纏う執行者

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
魔法少女リリカルなのは　†ＴＨＥ　ＥＸＥＣＵＴＥＲ'ｓ　ＳＡＧＡ†

【Ｎコード】
Ｎ９８３３Ｏ

【作者名】
黒衣を纏う執行者

【あらすじ】
高町家に拾われ、名付けられた少年『高町純騎』の物語。
※感想・改善点の指摘などありましたら、是非メッセージや感想にご連絡を。
もし良ければ、レビューの方を書いて頂けると幸いです、作者の創作意欲の糧にもなります故、何卒よろしくお願いします（笑）。

序章　†変化と出会いは突然に†（前書き）

プロローグから中二病全開です。
嫌悪感を抱かれた方は直ぐに『戻る』を押してお戻りください。

序章　†変化と出会いは突然に†

人生の転機は偶然か必然か。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

「・・・・・・ったく・・・まだ追ってきやがる・・・！」

青年は生い茂る木々や草花の間を掻き分け、ひたすら前へと走っていた。

〈マスター、もう体力も魔力も限界です、これ以上は・・・〉

彼の上着のポケットに入った金属製の黒いカードが声を発する。

「だがここでお陀仏は勘弁だぞ『ネロ』！？」

〈分かってます、私に良い案があります！〉

「おわっとっ早く言ってくれネロっ！！」

後ろの追っ手が放ってくる攻撃を必死で避ける。

何事も後手に回っていると息が続かないものだ。

守る方が攻める方よりキツイというのが世の常である。

〈マスターの体を一時的に別の物へ変えて、近くの町に身を隠すんです！〉

「でも俺、変身魔法も転移魔法も使えないぞっととっ！？」

〈大丈夫です、私が術式を行使します、魔力はマスターがお願いします！〉

青年に選択の余地は無い、事実、追っ手は直ぐ其処まで迫ってきている。

このままではいずれにせよ、捕まって地獄行きが関の山だ。

まだ年若い青年としても、ある目的の為にも決して死ねないのだ。

「分かった、それじゃあ・・・・・・行くぞ！！」

青年が覚悟を決めた途端、彼の体を彼自身の黒い魔力が覆い始める。

彼の体を魔力が覆い尽くした時、漆黒の光芒が森の中を眩く照らす。

光が止んだ時、その場にいたのは追っ手であろう人影が二つだけだった。

「ゆうべ……」

此処はとある海岸沿いの町、名を『海鳴市』と言う。
夕暮れ時の高台からの帰り道、大きく息を吐く一人の少女がいた。
名を、『高町なのは』と言う。

〈Ｙｏｕ　ａｒｅ　ｖｅｒｙ　ｇｏｏｄ，Ｍｙ　ｍａｓｔａｒ！〉

「ありがとう、レイジングハート」

声の主は彼女の首に掛かっているペンダント『レイジングハート』。
彼女の『魔法』をサポートする、『デバイス』だ。

家への帰路へ着くと。

「・・・・・・・？」

玄関口の前に何やら黒い塊の様な物がある。

「・・・・・・あっ！？」

恐る恐る近寄ってみて、人が倒れていると確認して直ぐに駆け寄る。

少年は黒いジャージに身を包み、力無くぐったりと地べたに倒れ伏している。

「大変！！、おっお母さーん！！」

なのはは慌てて家にお母さんの桃子さんを呼びに入っていった。

・・・・・・何だ・・・・・・・・？

とても優しくて・・・・・・・・。

暖かい・・・・・・・・。

「・・・・・・・・・・ん」

目を覚ますと、俺はいつの間にか布団に横たわっていた。

俺確か・・・ネロの提案で転移魔法を使って・・・そのまま意識を・・・・・・。

「・・・あ、気がついた？」

起き上がって声のした方を見ると隣には綺麗な女の人が一人、エプロン姿で立っていた。

「・・・・・・此処は・・・？」

「ここは私の家です、家の前で倒れてたんです、なのはが見つけて知らせてくれたんですよ？」

「そう、ですか・・・・・」

体中がズキズキと痛む、それにとてもだるい。
慣れない魔法を使った所為かもしれない、尤も転移魔法と変身魔法を使ったのはネロだから、
普段滅多に使わない量の魔力を消費した弊害かも知れないな。

「あっお母さん、その子起きた？」

扉が開いて中に入ってきたのは茶色の髪をツインテールにした、大体小学校2・3年ぐらいの小さい少女だった。
・・・・・っつか『お母さん』！？
すっげぇ若く見えるんだけど・・・・・何歳なんだ一体・・・？

「ええ、ついさっきね？」

「えっとっ初めまして、高町なのはって言います！」

そう言ってなのはが自己紹介をしてくる。

・・・・・・・・・ってあれ、って事はもしかして・・・・？

「・・・あなたの名前は？」

「う・・・・・・俺は・・・・・・」

やっぱり、名乗ることになってしまった。

（参ったな・・・・・・どうしよう・・・・・・）

「どうしたの？」

「キミのお名前、何て言うのかしら？」

今度は女の人も交え、二人で名前を聞いてくる。

参った、本当に参った。

「えっと・・・・・・実は・・・その・・・・・・」

無いのだ、名前が。

記憶喪失とかではなく、本当の意味で『無い』のだ。

追われている過程で、『黒衣を纏う執行者』等と言う『通り名』は付いたが。

「・・・・・・無いんです」

「「？？」」

「その・・・名前・・・・・・無いんです」

嘘をつく事も考えたが、予想外の状況で頭は碌に回らなかった。
それに、この人達に嘘をつくのは何だかとても嫌だ、そう感じた。
仕方が無いので、正直に話すことにした。

「・・・そうなの・・・・・・・」

「まぁ・・・はい・・・そうです・・・」

（・・・・・・話さなきゃ良かったかもな）

俺が言ったことを理解した途端、二人の顔が直ぐに曇った。
空気が重くなったその時、予想もしなかった一言で、俺は面食らう事になった。

「キミ・・・・・・うちの子になる？」

「え・・・えぇっ！？」

「ふえぇぇっ！？、おっお母さん！？」

俺は余りの驚きの一言に驚き、なのはも非常に個性的な驚き方をした。

「えっ・・・あの・・・いいんですか？」

「ええ勿論、お父さんも飛び跳ねて喜ぶわよ？」

「でっでも大丈夫なのお母さん？」

「大丈夫よなのは、一人増えたって全く以ってバッチグーよ？」

えーとなのはのお母さん、『バッチグー』って・・・死語だよな・・・？

「ほ・・・本当に・・・良いんですか？」

「行く宛も無いんでしょ？、それに名前が無いんじゃ親の方も分からないし・・・」

俺としても願ってもない話だ。

暫く休んでいないと『追っ手』が来た時に対処が出来ない。

体力も魔力も消費した状態で外に出て『追っ手』にでも見つかったりしたら、

それこそ『Ｇａｍｅ　ｏｖｅｒ』、『Ｂａｄ　ｅｎｄ』だ。

「じゃあ・・・その・・・よろしくお願いします・・・」

「ええ、よろしくね？」

結局、俺はなのはのお母さんの気遣いにありがたく乗らせてもらうことにした。

背に腹は変えられない、そう言うことだ。

「さてっと・・・恭也の小さい頃の服を出してこなくちゃね？」

そう言ってなのはのお母さんは何処かへ行ってしまった。

リビングに残された俺となのはの間に、気まずい沈黙が流れる。

当然だ、行き倒れの俺がいきなり家族になったのだ。

何かしらの不満があってもおかしくない。

「ねぇねぇ」

「なっ何？」

突然なのはが話しかけてきた。

「よろしくね？」

・・・・・・そう言って、手を伸ばしてきた。

凄く可愛い笑顔で。

・・・正気を保てよ俺、ちっちゃい子どもに何ときめいてんだよ！？

「・・・なあ、なのはちゃん」

「呼び捨てで良いよ、もう家族だもん」

「・・・じゃあなのは、トイレって何処？」

第一声がこれなのは何ともヘンテコだが、とりあえず気分を晴らそう、

・・・・・・そして冷静になろう。

出すモン出してスッキリしてこよう・・・・・・。

「ふぅ・・・・・・」

トイレを済ませ、手を洗いに洗面所へと向かう。

大分平静さを取り戻せた気がする。

あと少しでロリコンの道へ足を踏み入れそうだったな、危ない危ない。

「・・・・・・あれ？」

洗面所に着き、いざ手を洗おうと鏡の前に立つと。

「・・・・・・なんじゃこりゃあああああああ！！！！！！」

鏡に映ったのは黒い髪をした、丁度８才くらいの少年だった。
試しに手を振ってみると、俺の動きとシンクロして手を振り返す。

〈すいませんマスター！、どうも術式に不具合があった様で・・・〉

「（まさか・・・・・ネロの使った魔法の所為か・・・？）」

頭にネロの声が響く、大っぴらに話すと怪しまれるので『念話』を使ったのだ。

〈そうなんですっしかも不安定な術式の所為で、元の姿に戻れないんですよ～！！〉

「（マジかよ・・・・・・）」

マジ泣きしたくなってきた・・・・・。

これから俺・・・・・・どうなるんだ！！？

少年の、波乱な人生が今、幕を開ける・・・・・・・・・・・・・？

オリジナルキャラ紹介（ストーリー進行に応じて随時更新）（前書き）

※紹介らしい紹介は出来ません、下の設定を見て下されば分かりますが。
あと中二病表現満載です。ご注意を。

オリジナルキャラ紹介（ストーリー進行に応じて随時更新）

～高町純騎～

性別：男

年齢：不明（１６～１７才程度）　→　８才（見た目のみ）

特技：剣術（御神流＋我流）

魔力ランク：ＥＸ＋（測定不可）

好きなこと：甘い物全般（特に翠屋のお菓子）

嫌いなこと：粘々したもの

高町家に拾われた、謎に包まれた青年。
Ａ（アブソーブ）・デバイス収集の途中で海鳴市に転移し、倒れていた所をなのはに助けられる。
デバイスである『ネロ』の失敗により、実質人生をやり直す形に。
『ネロ』のリミッターが掛かっているため、全力を出せない。
……
全力は出せないが、その戦闘力の高さは計り知れない。

バリアジャケットは通り名通りの漆黒の黒衣。
コミュニケーション能力の低さが著しく、話下手。
人との交わりを大事にしようと勤めている。
壮絶に甘い『リンディ茶』を飲む事の出来る、数少ない人物の一人でもある。

〜ネロ〜

規格：アブソーブ・デバイス

人格：１４〜１５歳の少女

形状：人型&カード型（黒い本体に青いコアが付いている）

純騎の所有しているデバイス、造られた経緯は不明。
普段はカード型となって青年の胸ポケットに仕舞われている。
人型になることが出来、人前で話をする時は必ず人の姿を取る。
青年がバリアジャケットを装着時、両端を伸張してベルトとなる。

計算能力に関するスペックが低く、術式の行使に失敗して青年を幼児化させてしまった。

愛想が良く、笑顔を絶やさない。
少々天然で、抜けた所もある（純騎はその所為で子供の姿になった・・・不憫なり）

『闇』の属性を司り、他のアブソーブデバイスの『抑止力』・『管制人格』である。

～ドラグナー～

規格：ベルカ式

形状：パイルバンカー

青年の所持しているアームドデバイス。
黒い篭手の様なものに真っ青なブレードを持った武器で、
敵にブレードを突き刺した後、篭手の内部で魔力を爆劫させてブレードを突き出す。
魔力の消費が激しいが、一撃必殺の威力を持つ。
普段はネロの中に収納されている。

～ヴォルフ～

規格：アブソーブデバイス

純騎が謎の男から取り戻した『水』系統に属する『氷』のデバイス。
人格は存在せず、『武器』としての運用に特化している。
闘争本能に働きかけ、身体・判断速度を飛躍的に高める。

内包する武器は『殴盾・ウルフェン』、片手剣の『王狼（フェンリル）の爪牙』

氷を用いた魔法で敵の動きを封じ、荒々しくも研ぎ澄まされた剣技で敵を斬り裂くその姿は、正に獲物を狩る『狼』そのもの。

時間的制約があり、制限時間を超過してしまうと野獣の本能に喰われ、只の獣へと成り果てる。

第1話　†守護騎士、襲来†

オッス、俺の名前は『高町純騎』！！

・・・・・・え、誰だか分からないって？

散々『青年』呼ばわりされてた奴だよ！！

デバイスの『ネロ』の失態でガキに逆戻っちまった哀れな奴だよっ！！

・・・・・・やべぇ、言ってて虚しくなってきた・・・・・・orz。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

青年が高町家の一員となって、早くも2週間が経った。

あれから青年は、『高町純騎』という名前を授かり、新たな生活を始めた。

キッチリとした一人部屋を貰い、なのはのお母さんを恥ずかしがらずにキチンと、

『お母さん』と呼べるようになり、兄の恭也の指導の下に剣術も習い始めた。

尤も、それは2週間たっぷりと休んですっかり鈍ってしまった体を解す為に始めたのだ。

体の鈍りさえ無くなれば、彼にとっては『お遊び』程度にしか感じられない物となった。

なので程々に練習をこなしながら、魔法の慣らしも彼は始めた。

こっちの慣らしは剣術の延長線上にあったため、ほんの2、3日で済んでしまった。

つまり・・・・・・・・。

「あぁ～・・・・・・・・・・暇だ～・・・・・・・・・・・・」

〈だらけてますねマスター〉

「当然だろ、追っ手も来る気配無しだ・・・・・・まぁ、勉強は楽しいけどな」

小学校の放課後、公園の奥まった所の草原に寝そべってネロと語らう。

この少ね・・・否、純騎は生まれてこの方まともに学校も行った事が無いと言う経歴を持つ。

勿論これは純騎が『青年』だった頃の話だ。

「さてと・・・・・・そろそろ帰るか」

〈そうですね、『カラスが鳴いたから帰る』です！〉

「まだカラスが鳴く時間じゃねぇよ」

只今の時刻、３時４０分である。

ボケをかましたネロに突っ込みを入れながら草原から体を起こす。

カードへと姿を変えたネロをポケットに押し込みながら、純騎は全く別の事を考えていた。

（そういやぁ・・・なのはも確か・・・・・・）

彼女から感じた大きな魔力、そして首に掛けられた丸く真っ赤な宝石のついたペンダント。

どこでデバイス（それ）を手に入れたかは知らないが、彼女も一介の魔法使いなのだろう。

ほんの８歳で、あの魔力量と才覚。

将来は魔法使いか、それとも翠屋を継ぐのか・・・・・・。

〈・・・・・・マスター？〉

「・・・ん、何でもない」

何だか取り留めの無い事まで考え始めていた純騎の意識は、

ネロの声によって現実へと引き戻されたのだった。

事件発生まで、あと3時間と４０分少々・・・。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

時刻は夜の7時４５分。

１２月ともなれば、この時間帯なら空には星を眺めることも出来ただろう。

だが生憎と、星空は真っ黒な雲で覆い隠されていた。
まるで、これから起こる出来事を予見するかの様に。
そしてそんな曇り空が広がる海鳴市の上空に、二つの影が浮かんでいた。

「・・・・・・どうだヴィータ、見つかりそうか？」

浮かんでいる影の内の、青い毛並みをした狼が、もう一人の赤い衣服を纏った少女に訊ねる。
問われた少女の方は町の方を向いて、何かを感じ取るためにじっと目を瞑っていた。
少女の右手には金属で出来た槌のような物が握られており、
反対側の手には茶色い表紙に金の十字が描かれた分厚い本を抱えていた。
この一人と一匹が、どれ程異質な存在なのかをハッキリと表していた。

「・・・いるような・・・・・・いないような・・・」

やがて少女から曖昧な返答が返ってくる。

「こないだっから時々出てくる妙に巨大な魔力反応・・・・・・・・アイツが捕まれば、
一気に２０ページくらいは埋まりそうなんだがなぁ・・・・・・・・」

「・・・分かれて探そう、『闇の書』は預ける」

「オッケーザフィーラ、アンタもしっかり探してよ？」

「・・・心得ている」

そう返事をしたかと思うと、『ザフィーラ』と呼ばれた狼は宙を蹴り、
獲物を探すべく夜の闇へと飛び込んでいった。

ザフィーラが行ったのを確認すると、少女は右手の槌を目の前に構える。

彼女の足元に赤い光を放つ三角形の魔法陣が出現する。

「封鎖領域・・・・・・展開」

〈Ｇｅｆ？ｎｇｎｉｓ　ｄｅｒ　Ｍａｇｉｅ．〉

槌が音声を発すると、空中に様々な色が奇妙に入り混じった球体が発生し、

海鳴市全体を飲み込み始める。

その途端に町から人が、車が、狙いとは関係無い物が姿を消していく。

少女は再び精神を集中させ、以前に察知した巨大な魔力反応を探し出す。

「・・・・・・・・・・・・・・！！」

そして、彼女は見つけた。

一際強大で、大きな力を持った反応（それ）を。

「魔力反応・・・・・・大物見っけ！！」

足元の魔法陣を消し、『闇の書』を腰帯に固定すると。

「行くよ・・・グラーフアイゼン」

〈Ｊａｗｏｈｌ．〉

自身の愛槌『グラーフアイゼン』を構え、赤い魔力の尾を引きながら向かう。

標的のいる方へ。

高町なのは、そして純騎の元へ。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

「・・・・・・・・・ん」

部屋で一通りの勉強を済ませて惰眠を貪っていた純騎は、周囲の雰囲気の変化を察知して目を覚ました。

下の階から士朗や桃子、恭也の気配が忽然と消えた。

窓から外を見ると、人が行き交っていた筈の町から人が消えていた。

「この感じ・・・・・・ベルカ式か」

「ですね・・・こっちに向かってきます」

カード形態からユニゾン形態へと姿を変えたネロがそう告げる。

（ベルカの騎士に狙われる理由は無いんだが・・・・・・）

「厄介事に巻き込まれちまったな」と面倒臭そうに頭を掻く。

彼の『駄目人間』な一面が垣間見えた場面だ。

とその時、隣の部屋からバタバタと足音が聞こえた。

隣の部屋、即ちなのはの部屋である。

「なのはの奴・・・・・・」

無茶だ、純騎は確信した。

幾ら才覚に溢れていようと、ベルカ式のデバイスとなのはのデバイ

スでは強度が雲泥の差程ある。

戦闘スタイルの観点から、近接戦闘（クロスレンジ）に持って行かれれば、なのはに勝ち目は無い。

「・・・・・・・・・」

もし今彼となのはが『赤の他人』だったとすれば、彼は間違い無く彼女を見捨てていただろう。

今までの彼の境遇なら『弱者は喰われ、強い者だけが生き残れる』という物の考え方で、

この状況を傍観していただろう。

だがしかし、だ。

「・・・・・・しょうがねぇ、か・・・・・・・」

「マスター・・・・・・？」

そう、今の彼は『高町純騎』、つまる所の『なのはの家族』なのだ。

血縁が無くとも、『家族』を知った彼にとって過去の境遇など意味を為さない。

今の彼は『高町純騎』であって『青年』ではない、そういう事だ。

「行くか・・・・・・兄妹(なのは)を助けに、面倒臭いけど、な？」

「はいっマスター、マスターの仰せの通りに！」

自らのデバイス『ネロ』を携え、純騎は先に行ってしまったなのはを追いかける。

「さぁてっと・・・久々の戦闘だ・・・・・・気合入れてくぜ！！」

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

その頃、海鳴市上空では激しい戦闘が繰り広げられていた。

赤い帽子の少女『ヴィータ』とその仲間達『ザフィーラ』・『シグナム』が、

なのはとその仲間である『フェイト』・『アルフ』・『ユーノ』達と交戦していた。

海鳴の空に赤と緑、紫と黄色の光が交錯し、激突しあっていた。

そしてそんな光景を、なのははユーノがビルの屋上に生成した防御結界の中で見ていた。

見ている事しか、出来なかった。

先のヴィータとの戦闘で大ダメージを負った上、自身のデバイスである

『レイジングハート』が中破し、至る所にヒビが入ってしまったのだ。

「助けなきゃ・・・・・・・っ！！」

それでも尚、少女は立ち上がる。

仲間が、『友達』がピンチだというのに、一人だけ安全地帯で見ている訳にはいかない。

体に走る激痛に顔を顰めながらも、壊れかけのレイジングハートで体を支えつつ、

一歩一歩、よろよろとよろけながらも足を動かす。

「私が・・・・・・皆を・・・・・・助けなきゃ・・・っ！！」

〈Ｍａｓｔａｒ．．．〉

そんななのはの強い思いに応えるかの様に、

レイジングハートの紅い宝玉が光を発する。

〈Ｓｈｏｏｔｉｎｇ　ｍｏｄｅ，Ａｃｃｅｌｅｒｅｔｉｏｎ〉

レイジングハートの発した音声と共に宝玉の光が強さを増し、

桃色の大きな翼が広がる。

「レイジング・・・ハート・・・？」

〈Ｌｅｔ' ｓ　ｓｈｏｏｔ　ｉｔ，　Ｓｔａｒｌｉｇｈｔ　Ｂｒｅａｋｅｒ〉

「そんなっ無理だよそんな状態じゃ・・・・・！」

スターライト・ブレイカー。
なのはの持つ攻撃魔法の中で最大最強の威力を誇る集束砲。
ただそれは使用者とデバイス、両方に負担を伴う諸刃の一撃。
只でさえ満身創痍のデバイスを使用しようものなら、
まずデバイスが破損し兼ねない。

だが。

〈Ｉ　ｃａｎ　ｂｅ　ｓｈｏｔ〉

レイジングハートは、自身の破損を恐れない。

機械（デバイス）だから、ではない。

純粋に使い手であるなのはの、『仲間を助けたい』という意志を尊重した。

その結果が、この発言である。

「あんな負担の掛かる魔法・・・・・・レイジングハートが壊れちゃうよ！！」

〈Ｉ　ｂｅｌｉｅｖｅ　ｍａｓｔｅｒ〉

「っ・・・・・・・・・」

決心の揺らぐ主人の背中を押すように、レイジングハートが煌めく。

〈Ｔｒｕｓｔ　ｍｅ，　ｍｙ　ｍａｓｔｅｒ〉

「っ・・・・・・・・・・・・！！」

レイジングハートの覚悟を悟ったのか、なのはの目に涙が溢れる。

『不屈の心（レイジングハート）』は、この胸に。

涙を堪え、なのはは握り締めた杖の先端をを遥か上空へと向ける。

それと同時に、ユーノの張った防御結界の魔法陣がフッと消えた。

狙うは、周囲に張り巡らされた謎の敵の結界。

「レイジングハートが私を信じてくれるなら・・・私も信じるよ・・・！」

淀んだ空へ向けたレイジングハートの先端を中心に、桃色の巨大な魔法陣が浮かぶ。

「（フェイトちゃん・・・ユーノ君・・・アルフさん・・・・・・、

私が結界を壊すから・・・タイミングを合わせて転送を・・・！！）
」

「（なのは・・・・・・）」

「（なのは・・・大丈夫なのかい？）」

「（・・・・・・・・・）」

上空で戦闘に臨んでいる3人の心配そうな声が、念話として頭の中に響くが。

「（大丈夫・・・スターライト・ブレイカーで撃ち抜くから！！）」

彼女は、高町なのはは、もう揺らいではいない。

仲間の為に活路を作る。

彼女の目に、先ほどの弱弱しい光は無かった。

「レイジングハート・・・カウントを！！」

〈Ａｌｌ　ｒｉｇｈｔ，ｃｏｕｎｔ　ｎｉｎｅ．．．ｅｉｇｈｔ．．．ｓｅｖｅｎ．．．〉

「・・・・・・！！」

「・・・ハァッ！！」

なのはの砲撃を阻止しようとシグナムが動くが、それをフェイトが。

「・・・っ！！」

それを見たヴィータにはユーノが立ち塞がり。

「ふぅっ！！」

「ぐおっ！！？」

なのはの方に気をとられている隙を突き、

アルフがザフィーラの横っ腹に頭突きを見舞う。

なのはの許へは行かせないという思いで、３人が其々の敵をしっかりと見据える。

〈Ｔｈｒｅｅ．．．ｔｈｒｅｅ．．．ｔｈｒｅｅ．．．〉

限界が近づいてきたのか、レイジングハートのカウントが３で止まってしまう。

「レイジングハート・・・大丈夫？」

〈・・・・・・・・・Ｎｏ　ｐｒｏｂｌｅｍ〉

なのはの呼びかけに応え、宝玉を弱弱しく明滅させながらも、

レイジングハートはカウントを再開させる。

〈Ｃｏｕｎｔ　ｔｈｒｅｅ・・・ｔｗｏ・・・〉

集束された魔力が巨大な珠を形作る。

レイジングハートを後ろへ振り被り、発射体勢を整える。

〈ｏｎｅ・・・・・・〉

レイジングハートが最後のカウントを取ろうとした、その時。

ドクンッッッ！！！！！

「っぁ・・・・・・・・・・・・」

構えた足が、動きを止めた。
ふらふらと体をよろけさせるなのは。
そんな彼女の胸の辺り。
そこには・・・・・・・・・・。

「あ・・・・・・あ・・・・・・」

腕だ。
何処からか出現した腕が、なのはの胸を貫いていた。

「うあ・・・あ・・・・・・あっ・・・・・・」

息が出来ないのか、それとも突然現れた腕の違和感の所為で動けなくなったのか。

振り被った腕が空中で動きを止め、なのはの目は恐怖と動揺で見開かれた。

腕が何かを探り出すかの様に蠢くと、再びなのはの胸を貫いて出てきた。

その手には、桃色の手の平大の大きさの魔力の珠が握られていた。

そしてその手が奇妙な光に包まれると同時に、珠はその大きさを徐々に縮めていく。

「ぅ・・・・・・くぅ・・・・・・！」

胸の違和感と襲い来る脱力感に苛まれながらも。

「うぅ・・・・・・っ！！」

なのはは倒れまいとして地面に踏ん張り、再びレイジングハートを

高く掲げる。

〈・・・・・・Ｃｏｕｎｔ，ｚｅｒｏ〉

「ス・・・スターライト・・・・・・・・・・ブレイカァァァァァァァ！！！！」

残された僅かな力を左腕に込め。

集束された魔力球へと、撃ち下ろした！！

パリィィィィィイン！！

ズガガガガガァァァァアン！！！！！！

桃色の光芒が、淀んだ曇り空を貫いて満天の星空と満月を露出させる。

大音量の爆発音と結界の割れる破裂音が、その時なのはの耳に届いた最後の音だった。

（倒れられない・・・・・・皆を・・・・・・・みん・・・・な・・・・を・・・・・・）

自らの体に残った力の全てを使い果たし、なのはは前のめりに倒れてゆく。

――ポスッ。

（ん・・・・・・何だろう・・・・・・・？）

今にもバタリと倒れ伏してしまいそうになったその時。

不意になのはを受け止める誰かがいた。

（誰だろ・・・・・・ユーノ・・・・くん・・・・・・・？）

薄れる意識を繋ぎ止め、なのはは自分を受け止めてくれた誰かの顔を見た。

その顔は、つい最近自分の家に転がり込んできた、新しい家族の顔だった。

（じゅん・・・・・・・き・・・・・・・・く・・・・・・・・）

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

「・・・ったく、こんなんなるまで無茶して・・・・・・」

彼――――純騎の腕の中には、力を使い果たして気を失ったなのはの姿が。

すんでの所で助けられなかった事に、純騎は唇を噛む。

「封鎖結界・・・展開」

〈了解ですっマスター！〉

ネロが魔法陣を展開すると同時に、海鳴市を再び結界が覆う。

だが、先ほどまでの淀んだ色の奇妙な結界ではない。

夜の闇と同じ、真っ黒な結界が張り巡らされる。

結界が完成するのを確認すると、彼はなのはをその場に寝かせた。

「さて・・・こっからは・・・俺のターン(出番)だ！！！」

怒りの炎をその目に宿し。

荒ぶる力をその身に持つ。

彼の体から、膨大な量の魔力が一気に噴出す。

「うわあっ！？」

「なっ何だい！！？」

「っ・・・くうっ！？」

「な・・・何だアイツは！？」

「くっ・・・・・・・・！！」

「ぐおぉっ！！」

空に上がって戦闘をしていた7人と。

「きゃあああっ！！？」

ビルの後ろでコソコソと隠れていた人陰を吹き飛ばさんと、魔力の奔流が吹き荒れる。

「ネロ、来い！！」

〈はいですっ！〉

純騎が右手を揚げると同時にユニゾンデバイス状態だったネロが光

に包まれ、

彼の体を目まぐるしく旋回し始める。

彼の揚げた右手にネロが収まると光が消え、カード状態となったネロが純騎の右手に握られる。

「ネロ・・・・・・」

ネロを握った右手を自身の左へと持っていき。

「・・・セットアップ！！」

目の前の空間へと、体を捻って投げ放った。

〈Ｓｔａｎｄ　ｂｙ　ｒｅａｄｙ，Ｓｅｔ　ｕｐ！！〉

途端にネロの蒼い宝玉から魔力が噴出し、巨大な球を作り出す。

純騎は自身のいるビルの屋上から、その魔力球へと飛び込んでいった。

彼の体を黒色の魔力が覆い尽くし、防護服（バリアジャケット）を生成していく。

それと同時に小さかった彼の体が大きく成長し、『青年』だった頃の姿へと変わる。

腰には両端を伸張してベルトとなったデバイスのネロが装着された。

そして。

「っはあっ！！」

魔力球を薙ぎ払って出てきたのは。

「執行者・・・・・・只今見参っ！！！！」

夜闇に溶け込む漆黒の衣。

それを身に纏った『執行者』だった。

～To be continued～

第2話　†執行者、参る†（前書き）

Ｙｏｕｔｕｂｅで良さそうなＯＰ曲があったので、良かったら聞いてみて下さい！

ＯＰ：Ｔ．Ｍ．Ｒｅｖｏｌｕｔｉｏｎ【ｓｗｏｒｄ　ｓｕｍｍｉｔ】

第2話　†執行者、参る†

「も・・・・・・戻ってるぜっヒャッホゥ！！！！」

バリア漆黒の黒衣ジャケットを纏い終わって姿を確認するなり、純騎は歓喜の声を上げる。

「な・・・？？」

「・・・誰？？」

突然の事で、その場にいた全員が茫然と立ち尽くす。

〈マスターっマスター！〉

「ん、どうしたネロ？」

オロオロした様子のネロの声が着けているベルトから発せられ、
純騎が視線を下へ向ける。

〈実はその姿・・・・・・『変身制御』の魔法で変身してるだけで・・・、
実際に元の姿に戻っている訳じゃ・・・・・・〉

「・・・・・・・・マジか？」

〈はい、マジです〉

「・・・ｏｒｚ」

ネロの返答に、純騎はガックリと項垂れる。

当然だ、自身のデバイスの失敗で子供へと逆戻りした挙句、元に戻ったと思えば、

『実は変身してました』では落ち込むのも無理は無い。

「あの・・・どちら様で「あ〝ぁ〝ん？」ヒッ！？」

近づいてきたユーノが声をかけるが、苛立っている純騎はガンを飛ばす。

〈マっマスターっ！！、怒るのは一旦止めて下さいっそれ所じゃ・・・〉

「ラケーテン・・・ハンマァァアア！！！！」

そうこうしている内に、ヴィータがグラーフアイゼンを振り上げて迫ってくる。

「・・・ネロ、『ドラグナー』を出せ」

〈はっはいですっ！〉

慌ててネロが返事をすると、ベルトのバックル部分の宝玉が光を放つ。

純騎が目の前に右手を翳すと、右手に巨大な篭手の様な物が装着される。

だが只の篭手ではない、その先端からは真っ青な刃がほんの少し覗いていた。

「ドラグナー、カートリッジロード」

〈Ｅｘｐｌｏｓｉｏｎ！〉

ガシュッという装填音と共に、ドラグナーから白煙が吹き出る。

右手を振り上げて頭上を見据え、純騎はヴィータを向かい撃つ体勢を取る。

「うおりゃあああああ！！！！」

ヴィータのグラーフアイゼンの、鋭利な先端が純騎に迫る。

だが、純騎はそれを避ける素振りも、防御魔法を使う素振りも見せない。

純騎はただ空いている左手で。

ガシィッ！！！

「なっ！！？」

掴んだ。

高速で迫ってきたラケーテン・ハンマーを素手で。

しかもその手はぶれる事無くしっかりと、ハンマーの横を掴んでいた。

「一撃必殺、ウォール・・・・・・」

左手でアイゼンを受け止め、もう一方の右手のドラグナーを構える。

ヴィータが魔力を込めてロケットの勢いを強めるが、ビクともしない。

「・・・クラッシャァァアアッ！！！！」

無防備な状態のヴィータに、純騎の一撃が迫る。

「っアイゼンっ！！」

〈Ｐａｎｚｅｒｈｉｎｄｅｒｎｉｓ〉

ヴィータがグラーフアイゼンを使って咄嗟に強固な障壁を築く。

だが、そんな物はまるで意味を成さなかった。

バキィィィイン！！！

「なっがあっ！！？！」

展開された障壁をあっさり粉砕し、純騎の拳がヴィータの腹部に決まる。

そして、純騎の攻撃はまだあと一発残っていた。

ヴィータの腹部に入れた右手は戻されず、突き込まれたままの状態。

ヴィータが勘付いた時には、最早手遅れだった。

「クラッシュ・・・バースト！！！」

純騎がそう言い放った途端。

ガチンッ

ドゴォォォォォォオン！！！！！

「がああああああっ！？！！！」

篭手に仕込まれたブレードが飛び出し、ヴィータの体を爆炎が包み込んだ。

「・・・・・・ネロ」

〈何ですかマスター？〉

市街へ落ちていくヴィータをシグナムが寸での所で受け止める所を見下ろし、

右腕を気だるそうに回しながら純騎は、

「俺はさっきの奴をリンカーコアごと消し飛ばす積もりだったのに、何でそうなってないんだ？」

と、ジロリと腰のネロを睨む。

〈そっそれは・・・・・・その・・・・・・・〉

いきなりの問いかけに狼狽し始めるネロ。

〈えっと・・・・・・まだ私が本調子でないのと、リミッターの所為かと・・・〉

「はぁ・・・まぁいいか、どの道リンカーコアを潰したって復活すっからなアイツ等は」

純騎の頭の中では、あいつ等を生んだのがどういった物なのかの見当が既に付いていた。

（魔法生命体か・・・ったく・・・厄介事が絡んでそうだな・・・）

家を出た時までは久々の戦闘だと言って心躍らせていた純騎だが、

『自身の体がまだ元に戻っていない』と分かると、目に見えてテンションが落ちる。

そしてこの男、自分に『利益』が無いと見るなり、

「・・・結界解除」

今まで張り巡らせていた結界をアッサリと消してしまった。

その途端、四色の光の筋が四方へ飛び出していく。

その中の、弱弱しく揺れながら飛んでいったのは純騎の攻撃を喰らって重傷を負った、

紅い衣服のヴィータだろう。

それに寄り添うように、紫色の光が紅い光を支えていたのが見えた。

「ふぅ・・・・・・・・・・さてと」

光が地平線へ消えていくのを見届けると、純騎はなのはの許へと降り立つ。

其処には既に、先客がいた。

「あなたは・・・・・・」

なのはの傍には、先ほど純騎がガンを飛ばした少年ともう一人、金髪の髪をツインテールにした少女がいた。

「あなたは・・・一体・・・」

少女は咄嗟に手に持った武器であろうデバイスを構えようとするが、先の戦いで壊れていたのを思い出して直ぐに引っ込める。

「ん・・・・・・まぁ一応コイツの身内」

「え・・・・!?」

言われた内容に驚く少年を尻目に、純騎はネロを腰から外した。

純騎の体が光を放ち、見る間に元の小さい姿へと戻る。
コキコキと肩を回し、なのはの傍らに座り込んで様子を見る。
今は少年が治癒魔法をかけているようで、大分良くなってきたようだ。

「そういやぁ・・・さっきはガン飛ばして悪かったな」

「えっ・・・はぁ・・・」

一般常識に欠ける純騎も、ここでは素直に詫びを言うのであった。

◆

「・・・・・・・・・・・・・」

えーと俺はさっきの『フェイト』って女の子と一緒になのはを抱え、治癒術をかけていた『ユーノ』の転移魔法でアースラとか言う時空艦船の中に来ていた。

だけどなのはを応急処置室に運んだ途端、黒い服のチビが俺の腕を掴んだと思ったら、

俺は全く別の部屋に連れてこられた。

なんでも事情聴取だそうだ、良く見たらソイツは、時空管理局の執務官の制服を着ていた。

そして『取調室』で、俺は事情聴取を受けることになった。

の、だが・・・・・・・・・・。

「ズズズ～・・・・・・っ！！・・・・・・結構なお手前で」

「あらあら、ありがとね～純騎くん♪」

「まさか・・・母さんの味覚についていける人がいたなんて・・・・・・」

入った『取調室』は、何故だか純和風の茶室だった。

後から入ってきた『リンディ』さんに促されるまま、俺は点てられたお茶

（砂糖たっぷりミルク混入済）を飲んでいた。

初めは甘すぎやしないかとハラハラしていたが、口を付けてみたらそんな不安は何処へやら。

皆は飲めないと言うから驚きだ、こんなに甘くて美味いのに・・・・・・もったいない。

「――で、なのはが倒れた所で到着して、目の前の敵らしい奴に一発灸を据えたんです」

通称『リンディ茶』と名の付いたお茶を飲みながら、俺は事の経緯を話し終えた。

さっきの黒服のガキの頑なな感じと違って話が通じるようだ、俺と味の好みも合致するしな。

「・・・分かりました、今回はなのはさんを助けてくれて、ありがとう」

「礼なんて・・・・・・俺はただ、自分の兄妹を助けただけですか

ら」

リンディさんからお茶のおかわりを受け取りながらそう答えた。

昔なら、こんな風に他人と話そうだとかはしようともしなかったな・・・。

なのは達高町家の皆に出会ってからだな・・・・・・そんな事を思ったのも。

「それじゃあ・・・管理局の本部まで同行してね、クロノ執務官、彼を休憩室まで案内してあげて？」

「・・・・・・了解しました」

・・・・・・ジト目で俺を見つめながら、クロノが俺を外へと促す。

俺はそれに従って、取調室から外へとでた。

・・・何でかな、窓の無い取調室よりも外の方が閉塞感があるな。

多分茶室独特の『空気』の所為だろうな、きっと。

休憩室へと通されるまで、ずっとそんな事が頭の中でグルグルと渦を巻いていた。

第3話　†パニくり、そしてお引越し†（前書き）

原作の要所要所を端折っています。

第3話　†パニくり、そしてお引越し†

俺が気付いた時には、休憩室に置かれていた時計は８時半を指していた。

管理局本局の建物に降り立った俺を待っていたのは、一通りの事情聴取と身体検査だった。

事情聴取の方は、リンディさんとクロノの証言で事なきを得ることが出来た。

・・・尤も、クロノの方はかなり渋った顔をしていたけどな。

因みに身体検査は医師のメディカルチェックだけだった。

只、カルテを見た白衣のオッサンが目を白黒させてたのはど～も気になるな。

・・・まぁ、気にするだけ無駄ってモンか。

◆◆

「あ・・・・・・フェイト・・・・さん・・・・」

「じゅ、純騎くん・・・・・・・」

なのはの病室は何処かなぁとブラブラしていたら、バッタリとフェイトに出くわした。

包帯が巻かれた左手が、見ていて何とも痛々しかった。

「その・・・・怪我・・・・・・・」

何か励ましの声をかけようと口を開くが、言葉は全く出てこなかった。

今まで他人にそういう事をしたことが無かった、しようとさえ思わなかった。

・・・・・・自分の言葉のボキャブラリーの乏しさに、泣けてきた。

「あ、うん・・・・・・大丈夫」

「・・・そうか・・・・・・」

『・・・・・・・・・・・・』

気まずい、非常に気まずい。

フェイトは恐らく、割と引っ込み思案なとこがあるんだろう。

俺は、フェイトにかけるべき言葉が見つからない。
重い沈黙が、俺とフェイトを取り囲んでいた。

「・・・・・・む」

「・・・あ」

「あ・・・クロノ」

仏頂面を引っ提げてやってきたのは、俺の弁護を（渋々）やっていたクロノ・ハラオウン。
正直出くわしたくなかったが、今の状況なら、ぶっちゃけクロノでも構わなかった。
この気まずい空気をぶち壊してくれるのなら。

「怪我の方は・・・大した事はない様だな」

「あ、うん・・・ゴメンね、心配かけて」

「・・・キミとなのはでもう慣れた、気にするな」

「ふふ・・・・・・」

その言葉で、フェイトの顔に笑顔が戻った。

（さて、お邪魔虫は退散するかな・・・気まずい空気も無くなった訳だし）

そのまま二人に背を向け、テキトーに中を見学しようと歩みを進めようとしたが、

「・・・キミは何処へ行くんだ？」

フェイトとの話を一通り終えたクロノに呼び止められ、足を止める羽目になった。

「何処って・・・そこらをウロウロして、アイツ(なのは)が起きるまで時間潰しでも・・・」

「だったらなのはの病室まで付き合え、ついてやらなくてどうする」

「・・・分かった」

何時に無く真剣な表情のクロノに負け、俺はなのはのとこに行く事となった。

(何(いず)れ説明せざるを得ないとは言え、まさかこんなタイミングでそうなるとはなぁ・・・)

物凄く、気が重かった。

少々時間が経ち、場所は本局のデバイス整備室（ルーム）。

そこの大きな台座の上に浮かぶ、二つの物体。

三角形(バルディッシュ)の黄色の宝石と紅(レイジングハート)い宝玉。

先の戦いで傷ついた、フェイトとなのはの魔導(デバイス)の杖である。

そして台座の前でコンソールを操作し二つのデバイスの破損を調べているのは、

あの時なのはの許へ駆けつけたユーノ・スクライアだった。

その姿を、いや正確にはデバイスを浮かない表情で見守っているのは、

フェイトの使い魔であるアルフだった。

『・・・・・・ふえぇぇぇぇぇっ!!?』

「・・・・・・・?」

不意に扉の外で、聞き覚えのある奇声がしたかと思うと扉が開いた。

中へと入ってきたのは・・・・・・、

「じゃあ、純騎くんも魔道士なのっ！？」

「だから・・・さっきからそう言ってるじゃんか、あ〜五月蝿い」

「凄い・・・！」

「・・・・・・・・・・」

驚きの余り、大声を出すなのは。

鬱陶しそうに返事をし、指で耳栓をする純騎。

何かに感心しているフェイト、そして余りの五月蝿さに、純騎同様

耳を塞ぐクロノだった。

◆◆

「あ゛〜・・・耳にガンガン響く・・・・・・」

「にゃはは・・・ゴメンね純騎くん」

「私も・・・ちょっとビックリしちゃった」

「キミ達、もうすぐ着くから、くれぐれも粗相の無いように」

クロノに注意を受けながら、純騎・なのは・フェイトの三人は、とある部屋へとやってきていた。

「・・・失礼します」

開いたドアの向こうに立っていたのは、管理局の制服に身を包んだ初老の老人。

落ち着いた雰囲気から、只者ではないと純騎は直感した。

「クロノ・・・久しぶりだな」

「ご無沙汰しています」

（・・・クロノはこの爺さんと面識があるんだな）

テーブルに通され、純騎となのはとフェイトはお茶を貰って席へ座る。

クロノはソファには座らず、立ったままだった。

途中までは興味本位で話を聞いていた純騎だったが、話に関係無いと悟ると、

『グレアム』提督の顔を見たまま、呆けていた。

〈・・・マスター、マスターっ！〉

「（・・・ん、どうしたネロ？）」

突然、胸ポケットに仕舞われていたネロが声をあげた。

ネロ同様、純騎も念話を使い会話に応じる。

〈マスター、あのお爺さんから『アブソーブ・デバイス』の反応が・・・・・・それも２つも・・・！〉

「（・・・・・・！！）」

ネロの発言に、純騎は心の中で驚きを示す。

もし表情として顔に出すならば、目を見開いていたであろう。

（只者じゃねぇとは思ってたが・・・・・・・・・まさかな）

「・・・・・・純騎くん？」

「・・・ん、話は済んだか？」

色々と思考を一廻〈めぐ〉らせようとした純騎だったがなのはに呼びかけられ、

考えるのを一時中断せざるを得なくなった。

「『済んだか？』じゃないだろ、もう行くぞ？」

「ああ・・・分かった」

ポリポリと頭を掻きつつ、純騎はソファから腰を上げた。

なのは達と並んで部屋から出る時、純騎はふと疑問に思うことがあった。

（俺・・・・・何で呼ばれたんだ・・・？）

「・・・A（エグゼキューター）・デバイス使いか・・・少々厄介だな・・・・・・」

純騎達の去った部屋でグレアムが独り、ポツリと呟いた。

◆
◆

「・・・さて、私達アースラスタッフは今回、ロストロギア『闇の書』の捜索、
及び魔道士襲撃事件の捜査を担当することになりました、ただ・・・・・・」

翌日、休憩スペースに集められた、俺やなのはを含めた関係者一同。
アースラの艦長であるリンディさんを囲み、今後についてのブリーフィングをしていた。

「肝心のアースラが暫く使えない都合上、事件発生地の近隣に臨時作戦本部を置く事になります」

（事件発生地の『近隣』って事は、海鳴市の市内か・・・）

両手をポケットに突っ込み、クロノの腰掛けているベンチ近くの壁に寄り掛かって話を聞く。
不真面目さ満天な姿勢だが、只単に座っているのが落ち着かないからだ。

「分割は、観測スタッフのアレックスとランディ」

「「はい！」」

「ギャレットをリーダーとした、捜査スタッフ一同」

『はいっ！』

リンディさんの口から、次々と割り当てが発表されていく。

上の空という訳ではないが『関係無い』ので聞き流し、頭の片隅へと追いやる。

「司令部は、私とクロノ執務官、エイミィ執務官補佐、フェイトさん、以上三組に分かれて駐屯します」

（そう言えば・・・フェイトも一応、一管理局〈ここ〉の所属だったっけ。

・・・・・話せる程度には仲良くなっておくかなぁ。

はぁ・・・・・何であの時気の利いた台詞の一つも言えなかったんだろなぁ・・・・・俺の馬鹿野郎）

昨日の廊下での事を思い出し、自分の不甲斐無さに悪態をついてみる。

それで何がどう変わるかなんて高が知れているのだが、どうしてもそうしたくなる。

・・・これからは積極的にコミュニケーションを取って行こうと、密かに心に誓った。

「因みに司令部は・・・」

と、ここでリンディさんが一旦言葉を切った。

何やらもったいぶった様子だ。

「・・・なのはさんと純騎君の保護を兼ねて、なのはさん達の家の、直ぐ近所になりまーす♪」

「「・・・・・・!!」」

「ほう・・・それは・・・」

その言葉に、なのはとフェイトが顔を見合わせ、歓喜の声を上げた。

予想はしていたが、ご近所さんとはな。

（これなら、フェイトへの償いも出来そうだ）

『償い』は大袈裟にしても、仲良くなる事はできるだろう。

そして、俺も恐らく、その事を『嬉しく』思っているんだろう。

今までした事の無い経験や出会い。

血塗られた俺の生き方が、少しでも良い方向に変わると望ましい。

転送ポートへと向かい、海鳴市へと戻る最中、そんな願いが頭を過ぎった。

◆

「ほぉ・・・・・・確かに近いな」

海鳴へ戻った俺達一同は、そのまま管理局の駐屯先であるマンションを見に来ていた。

いや、『見に来た』と言うよりは引越しの手伝いをしに来たと言った方が良いのかも知れない。

荷物の搬入は業者がやってくれたが、日常の家財云々は全て自分達で置かなきゃならない。

クロノもエイミィに教わりながら、大量の家具に悪戦苦闘している。
意外と言うか何と言うか、クロノは相当の不器用だった。
エイミィの指示無しでは荷物の整理どころか、作業の邪魔になってしょうがない。

「・・・・・・お？」

大体の片付けを済ませてリビングに足を運ぶと、何故か其処には犬とフェレットが。
フェレットの方には心当たりは無かったが、犬の方は耳で察することが出来た。

「お前・・・・・・アルフか！？」

「おっ純騎か～」

「あっ純騎、片付けご苦労さま」

「その声・・・まさか、ユーノ！？」

こんなちっこいフェレットがか！？

「ん～？　ユーノくんとアルフはこっちじゃその姿かぁ」

丁度リビングのモニターをいじっていたエイミィが、二人もとい二匹を見つけて近寄る。

良く見ると、アルフの方は人間態の時の耳と尻尾の名残があった。

・・・・・・ユーノの方は全くと言って良い程見る影も無いが。

「新形態・・・子犬フォームっ！！」

「なのは達の友達と会う時はこっちの姿でないと・・・」

赤毛(アルフ)の子犬とフェレット(ユーノ)が人の様に二本足で器用に立ち、
アルフは自身の姿を見せびらかす様に手を上げ、ユーノは小さな手で頭を掻く。

・・・・・・うん、途轍もなくシュールだ。

「二人とも・・・・・・同情するぜ・・・・！」

「「？？？」」

俺もネロがしくじりさえしなけりゃ・・・元の姿でいられたってのに・・・！！

ギリギリギリギリギリギリギリギリギリ・・・・・・（以下エンドレス）。

〈いだっ！？　イダダダダっ！！？　マスター握り潰さないでください～っ！！？〉

右手に握った待機状態のネロを、自分の握力とネロの頑丈さにモノを言わせて痛めつける。

俺の辛さを思い知れ、いやその身体に刻み付けろ。

俺の心の痛みはこんなモンじゃねぇ～！！！

「え～っと・・・純騎、そのくらいにした方が・・・」

「そうだよ、ネロが痛がってるじゃないか」

「・・・まぁ、ネロに奴当たっててもしかたねぇか」

二人（二匹とも言う）に静止され、頭を冷やしてネロを放してやる。

・・・何だか、凄く虚しい気分になってきた（泣）。

〈ふぅ〜助かりましたぁ〜・・・・・・アルフさんにユーノさん、マスターを止めて頂いてありがとうございますぅ！〉

「いやぁイイってイイって」

「はぁ・・・居た堪れない気分だ・・・」

「あ・・・アルフちっちゃい！」

「ユーノくんもフェレットモード久しぶり〜！」

リビングになのはとフェイトの二人が入ってきて、俺は落ち込み気味の表情をすぐに引き締めた。

だらしない顔・・・と言うか何と言うか、とにかくヘンな顔を見せたくは無かった。

・・・良く見たら、ユーノを抱き抱えたなのはの顔が、ふにゃっとだらしなく弛んでいた。

だらしなさとは違う、見ていて何だか和む、そんな光景だった。

「なっなのはっ・・・・・・ぐっぐるじぃ・・・・・・っ！」

（ユーノ・・・・・・・・・強く生きてくれ）

苦悶の声を上げるユーノを見て、心の中で切に願う俺なのだった。

～To be continued～

第４話　†アブソーブ・デバイス†（前書き）

今回は『アブソーブ・デバイス』の説明回です。

時系列は翠屋でのフェイトへのサプライズの後です。

第4話　†アブソーブ・デバイス†

「・・・まさか一日に二回、此処に寄る事になるとはなぁ・・・」

溜息をつきながらドア横のインターホンを押し、鍵が開くのを待つ。

あの後アリサとすずかがフェイト邸に遊びに来て、そのまま近くの翠屋で

お茶でもしようという事になった。

・・・そう言えばフェイトには、ちょっとしたサプライズがあったな。

そして周囲が女の子で囲まれて居心地が悪かった所にアイツ(クロノ)からメールが届き、

漸く息苦しいあの空間から抜け出せた、と言う訳だ。

・・・・・・まさか引越しの手伝いをさせられたフェイトの家にもう一度呼び出されるなんてな。

しかもクロノが呼び出したって事は、何やら厄介な感じがしてくる。

「――ああ純騎くんかぁ！、ささっクロノくんが待ってるよ！」

そんな俺の一抹の不安を、エイミィさんの明るい声が掻き消してくれた。

「お邪魔しまーす・・・」

俺やフェイト達が翠屋でお茶をしていた間に整理を済ませたらしく、リビングは綺麗に片付けられていた。

・・・恐らく、あの不器用なクロノの部屋はまだ散らかり放題だろうがな。

「・・・今何か、僕に対して失礼な事を考えていただろう」

「んな訳ゃねぇだろ執務官殿、で、ワザワザ俺を呼んで何の用だ？」

慌てて否定した俺に疑いの眼差しを向けるクロノの痛い視線は、気にしない事にした。

「そうだった、キミの持っているデバイスの事なんだが・・・・・・」

〈私・・・ですかぁ？〉

待機状態のネロが胸ポケットから飛び出し、小さな少女の姿をとる。

普段は俺以外の奴の前では余りとらない。

話をする際にはカード形態（待機状態）では失礼だとネロは言うが、

別にいいと思うんだがなぁ・・・まぁいいか、アイツなりの作法だしな。

「君の使っているその・・・ネロって言ったか？」

〈はいっネロと言います、マスターがお世話になっています！〉

「ううんっこちらこそ～！」

ネロが黒い髪を揺らし、ペコリと丁寧にお辞儀をした。

エイミィは少しおちゃらけて礼をし、クロノはかなり面を食らっていた。

愛想が良くて笑顔が可愛いのはネロの、アイツのいいトコだ。

〈で、私に何か御用ですかぁ？〉

「・・・ああ、キミは・・・その・・・ユニゾンデバイス、なのか？」

「クロノくん、顔真っ赤だよ～？」

「うっうるっさい！！」

エイミィにからかわれて、耳まで真っ赤にして全否定するクロノ。

・・・・・・説得力が欠片もないっての。

〈ん～・・・形態的には合ってますけど、機能的には間違いですっ、私はアブソーブ・デバイスと言う分類なんですぅ〉

「アブソーブ・・・・・・デバイス・・・？」

「ん～・・・聞いた事ないね？」

「俺が高町家に転がり込んでくる前、ずっと前から探してた代物だ、それを全て集めるのが、俺の目的だったんだ」

エイミィとクロノが、二人揃って首を傾げる。

まぁ知らないのは無理も無い、それに・・・・・・、

「・・・・・・まぁ、分からないのは当然だ、そんなに数がある訳

でもないし、
両手で数えられる程度だ」

「そんなに少ないのか・・・具体的には幾つあるんだ？」

「全部で九つ、試作（プロト）タイプを含めるなら１０枚だ」

不本意だが、クロノには話しておくべきだな。

・・・あのグレアムとか言う爺さんにも、関係してくるだろうし。

「アブソーブデバイスは、二枚で一区切りに分けられる、火・水・風・雷の４属性、
それと抑止力である闇属性のネロ、光属性を持つプロトタイプ、これで全部だ」

「そうか・・・・・・最後に一つ、いいか？」

「俺に答えられる内容なら、何でも」

「キミは一体、何の為にそれを集めようとしている？」

何時に無く、神妙な面持ちで訊ねてくる。

エイミィの表情も普段とは違い、硬い。

「・・・・・・封印するためだ」

「封・・・印・・・？」

「この前の俺の戦闘を見てたろ、あれでも一応リミッターがついてんだよ、

・・・・・・ここまで言えば、分かるか？」

「・・・！！！」

そうだ。

なのは達でさえ手を焼いた未知の敵をいとも容易く、軽くあしらったあの力。

相手の張った防御魔法を完膚なきまでに粉砕し、

飛行さえまま成らないほどのダメージを与えた、あの力。

「・・・・・使ってる俺が一番良く分かる、使い方を間違えれば世界の一つや二つ、簡単にブチ壊せる、だから俺は、あれを全て探し出して封印しなきゃならない」

「・・・・・・そうか」

「・・・用はそれだけか、じゃあまた今度な」

話が終わったと見えたので、エイミィさんに挨拶をし、ちゃっちゃとフェイト邸をあとにする。

あの二人、割と気にしてたみたいだったな・・・。

「・・・まぁ、あいつ等とも仲良くなるべきだよな」

〈マスターは友達少ないんですから、交友関係は大事にしてくださいね？〉

「分かってる・・・・・・・・・ネロ」

〈何ですかマスター？〉

「・・・・・・あの二人に、フォローのメールでも送っといてくれ」

〈はいっ了解ですっ！〉

なのは達との出逢いが、俺をより『人らしく』させた。

『あの人』の傍にいた時は、こんな事はあまりなかった。

・・・・・・今更ながら、あの頃を思い出すとはな。

「見ててくれよ・・・・・・必ず全部探して、封印すっからな・・・・・・！」

誰に言う訳でもなく。

夕焼けに染まった真っ赤な空に、朧げに浮かぶ三日月をじっと見据え、

そう、呟いた。

◆
◆

海鳴の街がすっかり暗くなり、街灯や街の光で照らされる夜。
とあるビルの屋上の一角に、あの一団が集結していた。

「・・・・・・来たか」
「うん・・・・・・」

一人だけ、あの赤い服のヴィータだけが、少し遅れて遅れてやってきた。

一歩歩く度に、先の戦いでのダメージが抜けきっておらず、痛みに顔を顰める。

「ヴィータ、大丈夫か？」

「ああ一応な、あのヤロウ・・・今度会った時はゼッテーにブッ飛ばすっ！！」

拳を手の平にパンと打ちつけ、怒りを露わにする。

「シャマル、それよりも・・・」

「ええ・・・管理局の動きも本格化してくるだろうから、今までの様にはいかないわね・・・」

「少し遠出をすることになるな・・・なるべく離れた世界での『蒐集』を・・・」

「今、何ページまで来てるっけ・・・？」

ヴィータのその声を聞き、シャマルは手に持った『闇の書』をパラパラと捲りだす。

様々な術式の書かれたページ。

やがて、何も書かれていない白紙のページが出てきた。

「・・・・・・３４０ページ、この間の白い子でかなり稼いだわ」

「おっし、半分は超えたんだな？　ズバッと集めてさっさと完成させよう！！」

拳を夜空に突き上げ、気合を入れるヴィータ。

不意にその顔が、曇った。

「早く完成させて・・・ずっと静かに暮らすんだ・・・はやてと一緒に・・・！」

『・・・・・・・・・・』

その声に、残りの三人も同様に表情を曇らせる。

「・・・行くか、もうあまり時間も無い・・・」

「ああ・・・・・・レヴァンティン！！」

「導いてね・・・・クラール・ヴィント！！！」

「やるよ・・・・グラーフ・アイゼン！！！」

シグナム・シャマル・ヴィータの三人は各々のデバイスを取り出し、

騎士甲冑を身に付ける。

愛する主『八神はやて』に賜った騎士甲冑。

戦わせたくない、戦って欲しくないと、主であるはやては言っていたけれど。

「じゃあ、夜明け時にまたここで」

「ヴィータ、あまり熱くなるなよ？」

「わぁってるよ！！」

何よりも、その主のため。

闇の書の守護騎士（ヴォルケンリッター）達は今宵も異なる世界へ飛び立つ。
魔道士の力の源泉、リンカーコアを『蒐集』するため。
別々に異世界へと、散っていった。

◆◆

「ん～・・・これでよしっと・・・！」

フェイト邸に設えられたモニタールーム。
そこのデスクで何やら作業をしている人影が一つ。

「・・・・・・ん、何だろ？」

不思議に思い、モニター下のパネルを操作し、通信回線と映像回線をオンにする。
目の前のモニターに映ったのは、緑色の髪をした、白衣の女性だった。
新人らしく、自信の無さそうな表情を浮かべていた。
・・・・・・尤も、彼女がそんな表情なのは別の理由があるのだが。

「はいはーい、こちらエイミィだけど？」
「ああエイミィ先輩、本局メンテナンススタッフのマリーです」
「あぁ～・・・何？」

「先輩から預かってるインテリジェントデバイス二機なんですけど・・・

・・・・・・何だかヘンなんです」

「え・・・・!?」

「部品交換と修理は終わったんですけど・・・エラーコードが消えなくって・・・」

「エラー？　何系の？」

「ええ・・・『必要な部品が足りない』って・・・、今データの一覧を送りますねっ！」

程なくしてモニターに新たな欄が現れ、文字の羅列が流れる。

「あっ来た来た・・・・・・えっ!?」

書かれた内容を読み終えた途端、エイミィが驚きの声を上げる。

そこに書かれていたのは・・・・・・。

〈エラーコードＥ２０３、必要な部品が不足しています。
エラー解決の為の部品『ＣＶＫ－７９２』を含むシステムを組み込んでください〉

そして赤文字で、懇願するかのように「Ｐｌｅａｓｅ」と書かれているのがモニターに映り込む。

「お願いします」と。

「足りない部品って・・・これ・・・！？」

「ええ・・・これ、何かの間違いですよね？」

エイミィは、またさっきのエラーコードを頭の中で反芻させる。

そして二機の、『不屈の精神（レイジングハート）』と『閃光の戦斧（バルディッシュ）』の意図を完璧に理

解した。

「二機とも、このメッセージのままコマンドをぜんぜん受け付けないんです。
それで困っちゃって・・・・・・」

（レイジングハート・・・バルディッシュ・・・本気なの・・・！！？）

エラーコードに出ていた部品、『ＣＶＫ－７９２』。

・・・・・・つまり。

「ベルカ式・・・・・・カートリッジシステム・・・・！！！」

今一度、頼み込むように「Ｐｌｅａｓｅ」の赤い文字が、モニターに踊った。

～Ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ～

第5話　†Fの編入／封じられし力†（前書き）

今回は短めです。

第5話　†Fの編入／封じられし力†

「ネロ、セットアップ」

〈Ｓｔａｎｄ　ｂｙ　Ｒｅａｄｙ，Ｓｅｔ　ｕｐ！〉

日の出の見える、午前６時４０分頃。

純騎の掛け声を合図に、海鳴桜台林道が漆黒の光に照らされる。

その傍にはユーノを連れて魔法の練習をしにきていたなのはがいた。

尤も先ほど試した所、魔力球の一つでさえ生み出す事が出来なかったのだが。

「ふぅ・・・バリアジャケットの生成は問題無いな」

漆黒の黒衣を身に纏った純騎がそう呟く。

「次は・・・・・・来い、ムラサメっ！！」

何も無い空間に右手を突き出して名前を叫ぶ、すると。

「えっ・・・・！？」

「ふぇっ！？」

ユーノとなのはが素っ頓狂な声を上げる。

無理も無い、二人が目にした光景が、常軌を逸した光景だったからだ。

刀の持ち手である柄が出てきた。

・・・・・・何も無かったはずの空間から、何処から途もなく。

「はあっ！」

純騎が現れた柄を握って引き抜いた物、それは・・・、

「黒刀・・・村雨」

真っ黒な鞘に収められた、反り返った刃を持った日本刀の様なアームドデバイス。

機械的な部分は多々あれど、漆塗りの黒い鞘は朝日を浴びて燦燦とした輝きを放っていた。

「・・・む・・・・・・・あれ？」

「・・・どうしたの純騎くん？」

鞘から刀を抜こうとした純騎はそのままの姿勢で静止し、

なのはが不思議そうに声をかける。

「んぐっ・・・ぐぬぬぬぬぬぬ・・・っはぁ・・・はぁ・・・抜けねぇ」

鞘から刀が抜けない。

純騎がどんなに万力を込めても、ウンともスンとも言わない。

良く見ると、鍔に空いた二つの穴に鎖が通り、鞘の出っ張りに空いた穴に繋がっていた。

確かにこれなら、どんなに力を込めても抜けないわけだ。

「ったく・・・・・・どうなってんだ？」

〈すっすいませんマスタ〜！！〉

首を傾げた純騎に、今にも泣きそうな声で謝りだすネロ。

〈どうもここの所機能が上手く働かなくて・・・幾つかの機能にリミッターが
誤作動で起動してるみたいで・・・・・・〉

「むむむむ・・・・・・そうか分かった、なるべく早く解除しておいてくれ」

それだけ言うと純騎は、腰のベルトとなったネロを外し、バリアジャケットを解除した。

釈然としない表情を浮かべながら、純騎はなのは・ユーノと共に家へと向かう。

（転移魔法の弊害か？　大方ネロの演算の失敗が響いたモンだとは思うが・・・）

ダメ元で管理局のメカニックの力を借りようかと考えを廻らせる、純騎だった。

◆◆

リーンゴーンガーンゴーン・・・・・・・

今日の朝も平和に聖祥小学校の予鈴の鐘が鳴り響く。

いつも通りの時間にスクールバスに乗り、アリサ達と合流して席に着く。

ただ一つ、違う点があるのなら。

それを知っているのは、俺となのはとアリサにすずか、担任の先生と当の本人、

あとはその他の関係者ぐらいだろう。

「さて皆さん、実は先週急に決まったんですが、今日から新しい友達がこのクラスにやってきます！」

先生が、挨拶も程々に話を切り出し始める。

既にその中身が分かっている俺達、特に窓側の席のアリサは頬杖をついて

眠そうにしていたが、顔がほんの少しにやけていた。

すずかは表情には出していなかったが、やはり何処となく嬉しそうだ。

そして例に漏れず、

「（・・・いよいよ、だな）」

「（うんっ♪）」

なのはも嬉しくて、笑みを零す。

・・・・・・・・・勿論、俺も嬉しい。

管理局で会った時は、あまり気の聞いた言葉を言ってやれなかったし、

こっちに戻ってきてもあまり良く話す機会はなかった。

でも、此処でなら一緒に過ごす機会が多い・・・少なくとも魔法関連以外なら。

「海外からの留学生さんです・・・・・・フェイトさん、どうぞ？」

「しっ失礼します・・・」

遠慮がちで、それでいて恥ずかしげな声。

教室のドアが開いた先に立っていたのは、金髪の長い髪を二つに纏めた女の子。

俺やなのはの良く知る、フェイト・テスタロッサの姿がそこにあった。

今日からフェイトも俺達の同級生、クラスメイトだ。

「・・・・・・あっちは何か大変な事になってないか？」

「にゃはは・・・そうだね」

授業の合間の短い休み時間に、隣の席のなのはに向かってそうぼやく。

席の後ろの方ではフェイトを中心に人だかりが出来、フェイトは皆の質問攻めにあっていた。

俺の時も多少は驚かれたが、フェイト程ではなかった。

・・・尤も、一部の奴らになのはの事で冷やかされはしたが。

「フェイトちゃん・・・人気者だね！」

「んな暢気（のんき）な事言ってる場合かよ、慌て始めたぞフェイトの奴」

俺が指差す先には、

「ねぇ、向こうの学校ってどんな感じ？」

「すげぇ急な転入だよね、何で？」

「日本語上手だね、何処で覚えたの？」

「前に住んでたのってどんなとこ？」

「えっあの・・・その・・・えぇっと・・・」

数えただけでも１０人のクラスメイトに取り囲まれて逃げ場を失い、

周りから矢継ぎ早に繰り出される質問に困り果てたフェイトの姿が。

「はぁ・・・しょうがないなぁ・・・」

溜息を付きつつ、アリサがフェイトの周りの人だかりに近寄ると、

「はいはい、転入初日の転校生を皆でそんなにワヤクチャにしないのっ！！」

手を叩きながら一喝。

そして順番に質問するように指示を下していく。

いつもながら、アリサのこのリーダーシップ的なスキルは半端じゃない。

「・・・あーあ、俺も助けに入ろうと思ったんだがなぁ・・・・・・」

「ん？　純騎くん、何？」

「いや、なんでもない・・・」

・・・思わず口に出ちまった、気をつけなきゃな。

◆

授業も一区切り付いた、昼休みの午後。

フェイトを加えた俺達五人は、屋上のベンチで弁当を広げていた。

「おっ卵焼きだ・・・」

「あっホントだ、美味しそ～！」

早速アリサが俺の弁当を見るなり食いついてきた。

母さん（つまり桃子さん）の作る卵焼きは、良くアリサとすずかにも

おかず交換をする時のネタにされる。

・・・なので。

「フェイト、目ぇ瞑って口開けてみ」

「えっあ・・・」

「ほら」

「んぐっ・・・！」

開けられたフェイトの口に、半分に切った卵焼きを放り込む。
いきなり口の中にモノが入って、最初は驚いた表情をしていたフェイトだが、
中身を租借していくうちに段々と顔が幸せそうに綻ぶ。

「旨いだろ？」

「うん・・・♪」

うん、やっぱり子供は笑顔が一番だな、俺も今や子供だけど。

「あ～っ！　フェイトだけズルイ～！」

「はいはいアリサにもやるから、すずかもいるか？」

「え・・・もっ貰えるなら・・・」

「ん、じゃあ、ほら」

今日は大盤振る舞いだ。

アリサとすずかに一切れ渡し、フェイトにも切ったもう半分を渡した。

そうして気付いた時には。

「・・・・・・・・・・あ」

見事、弁当の卵焼きの入っていた空間だけがポッカリと空いていた。

・・・・・・自分の食べる分が無くなっちまったよ、トホホ。

「純騎くん、はいこれ！」

そう言ってなのはが俺に差し出してきたのはなんと・・・、

「これ・・・なのはの分の卵焼きだろ？」

なのはの箸に掴まれた、黄金に輝く（俺的視点）母さんの卵焼き。

美味しそうだ・・・・・・・・・だけど。

「貰えねぇよ、なのはのだろそれ？」

「遠慮しないで、はいっ」

「んむ　ぅっ！？」

つべこべ言う間も無く、なのはの手によって半ば強引に俺の口に卵焼きが押し込まれる。

「んぐんぐ・・・・・・・・・美味いな～」

やっぱり、母さんの卵焼きは絶品だった。

◆◆

「ん～・・・・・・・・・・・」

放課後、なのは達と別れた俺は独り、フェイトの家（うち）の転送ポートを介して、

管理局本部のデバイスルームに来ていた。

目的は、誤作動を起こして機能を制限されたネロの解析とプロテクトの解除だ。

エイミィに自身の後輩でデバイス技師であるマリエルさんを紹介してもらい、

エイミィも一緒になってネロの解析をしたのだが・・・・・・、

「・・・ごめんね純騎くん、管理局の技術でもこの子を調べるのは無理みたい」

「そうですか・・・・・・」

結果は予想通り。

ネロのプロテクト解除はおろか、解析も出来ないようだ。

やっぱり、自動修復機能で自然に直るのを待つしかないようだ。

「しゃあないか・・・ネロ、行くぞ?」

〈はいですっ〉

調整槽から出て服を着たネロとエイミィを連れ、デバイスルームを後にする。

頻りにペコペコと頭を下げて謝るマリエルに慰めの言葉をかけ、転送ポートへと向かう。

「ネロちゃん、直せなかったね・・・・・・」

「まぁしょうがないですよ、コイツに使われてる技術って何十世代も先の物ですから、期待はしてませんでした」

「なっ何十世代！！？　って事は純騎くんキミってもしかして・・・！？」

「あっ別に『未来からやってきた未来人』とかじゃないですから、ネロやアブソーブデバイスを作った人の技術力が飛び抜けてたってだけですから」

「そっそうなんだ・・・あはは・・・・・・」

そう、アブソーブデバイスには『あの人』の研究の全てが活用されている。

他の二流三流の科学者が束になっても果たせなかった『アルハザードの遺産』の

解析にも成功している。

ただ、そのことが原因で学会を追放され、暗殺された。

そして『あの人』の研究の集大成だったアブソーブデバイスも、

ネロ以外全てのデバイスが次元世界中に散ってしまった。

俺は『あの人』の所で少しばかり世話になり、そして抑止力である

ネロを託された。

恩に報いる為に。

あの人の作った物を悪用させない為に、俺はアブソーブデバイスを

集めている。

・・・・・・今回の件に決着(カタ)が付いたら、あのグレアムとか言う爺

さんから

アブソーブデバイスを取り返さなくちゃな。

（・・・・・・あ、でも今は俺、高町家の家族なんだな）

少なく見積もってもあと6，7年は海鳴(ここ)市を離れる事が出来ない。

『旅に出たい』などと言って、聞き入れてくれるかどうか微妙なところだ。

「純騎くーん、ポートの転送準備終わったよ？」

「あ、はい」

エイミィの声を聞き、さっさとポートの中へと入る。

・・・まぁ、今から考えても仕方が無いか。

今までだって、出たトコ勝負の大博打を打って生きてきた様なモンだ。

『来るモンは来る、来た時どうにかすりゃあいい』

この前読んだ、魔法使いが主人公の小説にも書いてあったっけ。

・・・今まで通り、探せばいい。

邪魔が入ってきたら、原因をどうにかすりゃいい。

壁があるならぶっ壊せ。

敵がいるならぶっ飛ばせ、だ。

～Ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅ～

第6話　Hell or Heaven, Dead or Alive!?

大それた題名ですが、『リリなのA' sサウンドステージ01』の
銭湯回です、展開は違いますけど。
何故『地獄か天国か』『生きるか死ぬか』なのかは、
読んでみてのお楽しみ（タイトル、かなり大袈裟ですね、はい）。

第6話　Hell or Heaven, Dead or Alive!?

「気を付けー、礼！」

『さようならー！』

今日も極々平和に、学校での一日が終わる。

今日の授業も、此処に来る前には学べなかった事が学べて有意義な時間だったな。

・・・夜の空の上で俺やなのは達が事件に巻き込まれてドンパチやってるなんて、

誰も思わないだろうな絶対。

「んっっん～～～～～っ！」

イスに寄り掛かって思いっきり伸びをする。
少々だらけているのかも知れないが、これも今の俺の日常だ。

「んっ・・・ふぁぁ～～～～・・・」

・・・・・・此処にも少々、だらけている奴が一人。
窓際の席に座っていたアリサが大きなあくびを一つ。

「おいアリサ、口押さえろよ？」

「あ～ゴメンゴメン・・・あふぁ」

「アリサちゃん、ウトウトしてたモンね～」

そこにすずかが加わってくる。

「ウトウトっつーか、ぐっすり寝てた気がしてならないんだけど」

「アリサちゃん・・・よだれ」

さらになのはも。

「えっ！！？」

「アリサ・・・・・・はいハンカチ」

そして昨日から編入してきたフェイトも加わり、これで新生仲良しグループの揃い踏みだ。

・・・・・・・・壮観だな、こうやって並んでるのを見ると。

「さぁっ！　早く帰って昨日の映画の続きを見るわよ！」

「うんっ！　なのはちゃん、フェイトちゃん、純騎くん、準備はいい？」

「「うんっ！」」

「ああ、いいぜ？」

こうしてアリサとすずかの誘いに乗って、映画を見たり談笑したりする事もしばしば。

因みに今日は、昨日見ていた西部劇の映画の続きだ。

ささっと身支度を済ませ、皆でアリサの家の車に乗り込む。

・・・・・しかし、流石は富豪の家。

迎えの車がリムジンとか・・・・・計り知れねぇ。

確か・・・・・・キャデラックのリムジンだったっけか。
座席のシートがフッカフカで気持ちイイな～。
ついつい睡魔が・・・・・・・・・・

「あ・・・純騎くん、着いたら起こすから、寝ててもいいよ？」

「ん・・・・・・・すずか、サンキュ」

すずかの言葉に甘え、抱えていた荷物を足元に置くと座席に凭(もた)れ掛かる。
自然と瞼が下へ下がっていくのを感じながら、俺は意識をゆっくりと手放した。

「・・・・・・・くぅ」

純騎が寝息を立てて眠り始めた、その直後。

「うわぁ・・・・・・」

「何だか・・・純騎くん・・・・・・・」

「これは・・・反則だよ・・・・」

「うぅ・・・・・・可愛い・・・・」

純騎の寝顔に、思わず顔を紅潮させるなのは達。

彼女達の見た純騎の寝顔は、天使と呼称しても良い程に無垢な表情だった。

◆

「っしゃあ～っ！！」

「う～っ負けた～っ！！」

コントローラーを手にガッツポーズを取る純騎と対比して、悔しそうに項垂(うなだ)れるアリサ。

西部劇の映画を見終わった後、そのノリでテレビゲームをしようという事になった。

因みにゲーム内での彼ら仲良しグループの序列はこうだ。

一位・なのは

二位・純騎

三位・アリサ

四位・すずか
五位・フェイト

フェイトはゲームをした経験が無いため負け続き。
すずかも元々対戦ゲームは得意でなかった。
アリサは純騎となのはの高町コンビに一歩及ばす。
そして純騎はあと少しの所でなのはに敗北を帰していた。
魔法ではなのはを圧倒する純騎だが、ゲームとなるとそうはいかなかった。

「次は・・・・・・うげ、なのはとか」

「何でそんな嫌そうな声出すの純騎くん！？」

純騎の態度になのはが非難の声を上げるが、無理も無い。

ゲームの時の彼女は、正に『全力全開』。
連続コンボで体力を削り、必殺技で止めを刺す。
一件シンプルだが、なのははそれを実際にやってのける。

「もう時間だから、この一回で終わりだよ？」

「じゅんき～っ！　頑張れ～！！」

「も～っ二人とも～っ！！」

「はぁ・・・しゃあねぇか、んじゃ頑張ってみるか」

「もう・・・じゃあ私も全力全開でっ！！」

こうして、雌雄を（対戦格ゲーで）決する、純騎ＶＳなのはの勝負の火蓋が、切って落とされた。

尤も、純騎が文字通り『全力全開』のなのはにゲームで勝てるはずは無く。

なのはお得意の必殺コンボが炸裂し、純騎のプレイキャラはあえなくノックダウン。

軍配は、なのはに上がったのだが。

◆◆

「ふんっはったぁっ！！」

アリサの家から帰ってきた純騎は、独り道場で素振りをしていた

なのははフェイトの家に行ってしまい、士郎と桃子は翠屋を営業中で忙しく、

恭也と美由紀もまだ大学と高校で帰っておらず、純騎は暇を持て余していた。

「ふぅ・・・・・・これくらいにしておくか」

外をふと見てみると、すっかり日が暮れていた。

かなり長い時間独り稽古に没頭していたのだろう、体中汗でびっしょりだ。

（流石にこの状態をそのまま放置しておくのはなぁ・・・・・・）

実は、純騎は未だに家の風呂を沸かしたことが無かった。

大抵の場合、なのはや桃子がテキパキと用意を済ませてしまうため、習う事も自分で慣れる事も出来ずにいた。

（参ったなぁ・・・・・・服が身体に引っ付いて気持ち悪いから、早めに入りたいけど・・・・・・沸かし方わかんねぇし・・・）

ウンウンと頭を抱えて悩みだす純騎。

と、そこへ、

「・・・・・・ん、電話？」

道場の隅に置いておいた鞄の中から、持っていた携帯の着信音が鳴り響く。

かけてきたのは・・・・・・なのはだった。

「もしもし純騎だけど・・・なのは？」

〈あっ純騎くん、今家にいるよね？〉

「ん、そうだけど・・・どうした、今日はフェイトん家で泊まり？」

〈違うよ、まだお風呂入ってないよね？〉

「・・・？　まぁ・・・まだだけど・・・それがどうかしたか？」

不可思議なことを聞かれ、何事かと首を傾げる。

〈今からフェイトちゃん達と一緒に『スーパー銭湯』って所にお風呂入りに行くことになったんだけど、純騎くんもどう？〉

（・・・！！）

なのはの一言は純騎にとって正に『渡りに船』な一言だった。

「（丁度良いな・・・）行く、んで何か必要な物とかってある？」

〈ん～着替えとかタオル・・・かな？〉

「分かった、フェイトの家の前で待ち合わせな？」

〈うんわかった！　それじゃ～！〉

「・・・・・マジでタイミングが良いな」

早速自分の部屋に戻り、残像が浮かびそうな程の速度で準備を済ませて家を出た。

こんなにタイミングが良いと返って不吉に思うところだが、

今の純騎はそんな事など考えようともしなかった。

それが、純騎に苦い体験をさせる事など、露ほどにも思わなかった。

◆

「何で・・・・・・」

フェイトの家のマンションの前で合流し、俺は新装開店したと言うスーパー銭湯、

『海鳴スパ・ラクーア』に来ていた。

家のチラシを見た限りじゃ、バリエーション豊富な湯が楽しめるそうだ。

だが、問題は其処ではない。

メンバーの中にアリサとすずかがいると言うことも、

なのはが呼んだと思えるから納得がいく。

「ねぇ純騎くーん、いいでしょ～？」

「わっ私は・・・・・なのはがそれで良いなら・・・別に・・・／／／／／／／／」

「私も別にいいよ？」

「純騎だけ独りじゃ寂しいモンね！」

・・・・・・これだ。

俺だけ男湯に独りでは一緒に入りに来た意味が無い、と。

年齢規定には引っ掛かってないから大丈夫だよ、と。

女性陣が俺に、『一緒に女湯に行こう』等とのたまって来たのだ。

しかも、男子は俺独り。

クロノがこの場にいれば、アイツをだしにしてこの状況を乗り切れたのだろうが。

生憎と言うか運が悪いというか、アイツは仕事で管理局本部に言ってしまっている。

・・・一応俺、精神だけは高校生並だぞ？

美由紀姉と精神的には同い年なんだぞ？

エイミィよりも年上なんだぞ！？

「ねぇ純騎くーん、一緒に入ろうよ～？」

「・・・／／／／／／」

・・・・・・これって何か？

死亡フラグって言う奴か？

「・・・・・・来ちまった」

目の前に広がる幾つもの湯船。

立ち昇る湯気で視界は少々ボンヤリしている。

そしてその中には、数え切れないほどのお客（女性のみ）の姿が。

・・・・・・やべ、入る前から頭がクラクラしてきた。

「・・・とりあえず、さっさと体洗っちまうか」

空いているスペースに陣取り、タオルを濡らしてシャンプーを泡立てる。

・・・何か、普段の数倍の速さで体を洗っている気がする。

身体の泡を流さず、続いて頭をガシガシと擦っていく。

ものの5分で、湯船に浸かれる状態へと変わる。

（さぁて・・・どの湯船に浸かろうか）

因みに当然の事ながら、どの湯船も女性もしくは女の子で溢れている。

俺としては、入りにくい事極まりないったらありゃしない。

上がってしまおうかと考えたが、湯船に浸からずに上がるのは何だ

か気持ちが悪い。

（・・・・・・あ、あそこなら）

ふと、露天風呂の存在を思い出す。

あそこは確か、男湯と隣接してるからお客が少ないはず。

思い立ったが直ぐ実行、と言うわけで露天風呂へ。

（そう言えば・・・結局なのは達と一緒だったのは最初だけだったな）

少し寂しく思いながら露天へと繋がる扉を開けた。

「・・・・・・・・・・・・・・・あ」

露天には、先客がいた。

「あ・・・純騎くん！」

なのはと。

「じゅ・・・・・・・純騎・・・・くん・・・・／／／／／／／／／」

フェイトと。

「あっ純騎くん！」

「純騎じゃない！　今まで何処行ってたの？」

すずかとアリサが、先に露天に入っていた。

参った、実に、いやマジで参った。

・・・・・・よし、ここは一つ冷静になって、それで・・・・・・、

「済まん、邪魔したｎ「何やってんのよ、早くこっちに来なさいっ！」のわぁっ！？」

Uターンしようとしたら、突然アリサが腕を引っ掴んで湯船に押し込まれる。

俺の願いとは裏腹に、なのは達は俺と混浴をしたいようだ。

・・・なのは達にとっちゃ願ったり叶ったりなんだろうが、

俺にしてみれば地獄の始まりだ。

俺の精神衛生的に、これはマズイ。

「そう言えば・・・・・・」

俺的には『唯一の常識人』なすずかが口を開く。

・・・でも何故だろう、ちっとも救われそうな気配がしない。

「なのはちゃんと純騎くんって、どっちが上なの？」

「えっ！？　う～んと・・・・・・」

これはまさか・・・・・・もしや・・・・・・・！？

俗に言う『ガールズトーク』とか言う奴か！？

「私的には・・・純騎くんの方が上な気がするんだけど・・・もう恭也さん(お兄ちゃん)がいるから、弟がイイかな？」

「ねぇねぇ純騎、なのはの事『お姉ちゃん』って呼んでみてよ！」

「えぇっ！？」「ふえぇっ！！？」

アリサからのいきなりの要望に、俺もなのはもタジタジだ。

「っていうか同い年なんだから、上も下もないってのに・・・」

「別にいいじゃんっ！　ほらほら純騎！！」

俺の正論は、アリサの急かしによってかき消された。

・・・・・・うん、早くこの空間から出たいから、さっさと言ってしまおう。

主に俺の貞操と精神衛生上の危機が迫りつつあるからな。

「なのは・・・言うぞ？」

「ふぇっ！？　純騎くんっ私まだ心の準備が・・・」

済まないがなのは、今は俺、なのはの事を考えてる余裕がないんだ。

だから・・・・・・覚悟してくれよ！！？

「な・・・・・・」

・・・改めて言い出そうとすると、何だかすっごく照れくさい。

でもここは勢いを借りて一気に・・・！！

「お・・・お・・・ねえ・・・・・・ちゃん」

「はうぅぅぅっ！？！！／／／／／／／／／」

思い切って言ってみたら、なのはの顔がリンゴかトマトみたく赤くなった。

・・・俺も顔が熱くなってきた。

改めて言うと、やっぱりハズイな。

「じゃあじゃあっ今度はなのは！　純騎の事を『お兄ちゃん』って！！」

「えええええええっ！！？？」

「アリサ・・・無茶振りし過ぎだっての」

「流石にちょっと・・・やりすぎたかも」

なのはの真っ赤になった顔を見て、すずかがこの状態にやっと待ったを掛けてくれた。

・・・・・・遅過ぎだってば、見ろよなのはのあの顔。

完っ全に緩み切って・・・・・・ってあれ？

「なのは・・・？　おいなのは？」

「ぶくぶくぶく・・・・・・・・・」

「なっなのは！？」

「なのはちゃん！？」

かなり長い時間入っていたのだろう（若しくはさっきのやり取りの所為で）。

なのはが顔を真っ赤にし、鍋で茹でられた蛸のように逆上（のぼ）せていた。

「ヤバくないか・・・これ」

「そうだね・・・とにかく脱衣所に運ばなくちゃ！」

「私っ美由紀さんとエイミィさん探してくる！！」

「わっ私も探しに行って来る！」

と、アリサとフェイトはタオルを羽織ると中に駆けて行く。

俺もなのはを脱衣所まで運んでやらないと・・・。

・・・とりあえず、腰のタオルを取れないようにしっかり結んで、と。

「すずか、なのはの身体にタオル巻いてくんない？」

「えっでも・・・」

「・・・・・・そのまんまだと、運びにくいから」

「うっうん・・・分かった」

正直なところ、今の状態（かっこう）のなのはをどうこうという訳にはいかない。

・・・・・・主に俺の精神的な意味で。

「・・・はい出来た、純騎くんお願い！」

「おう・・・・・・んしょっと」

ささっとなのはの身体を持ち上げて脱衣所へと向かう。

・・・周囲の視線が背中に突き刺さって、妙な気分にしかならなかった。

因みに。

この騒動が理由で、俺がなのはの事を『お姉ちゃん』と呼ぶことが禁止され、

結局呼び方は『なのは』で統一される事となった。

言われた本人(なのは)曰く、『あれは反則』との事だった。

～Ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ～

第6話　Hell or Heaven, Dead or Alive!?

グダグダ感ＭＡＸだった気がしてならない・・・。
あと全国のなのはファンの皆さん、すんません。

第7話　†仮面と黒衣とアブソーブデバイス†（前書き）

ちょっと短めかもです。

第7話　†仮面と黒衣とアブソーブデバイス†

「じゃあ皆、さようなら！」

『さようなら～！』

今日も恙無(つつがな)く学校での一日が終わる。

さて、これで後は・・・・・・・・・、

「純騎くん！」

「ん、なのは・・・どうした？」

隣の席のなのはが、授業終了のチャイムが鳴ると同時に声をかけてきた。

その後ろには、お馴染みのアリサ・すずか・フェイトの３人が。

「今日はすずかちゃんの家で遊んでくるから、純騎くんは先に帰ってて？」

「ん・・・分かった、じゃあな３人共」

「じゃあね純騎くん！」

「また明日ね～！」

「じゃっじゃあね純騎くんっ」

「おうっまた明日な～」

挨拶も程々に、ぞろぞろと教室を出て行く４人。

良く考えてみたら、昇降口までは一緒なはずなんだが・・・・・・

まいっか。

なのはとフェイトが遊びに出てくれれば、あいつ等の始末も楽になる。

「そうと決まれば・・・っと」

早速俺は携帯で母さんに「今日は友達の家に寄っていきます」とメールを送る。

・・・・・・これで母さん達に心配をかける事は無い。

ぱぱっと荷物を鞄に詰めると、猛ダッシュで町外れの公園へと向かった。

◆

「ここなら・・・邪魔も入らないだろ・・・・・・」

町外れの広い公園へとやってきた純騎。

ただ遊びに来た、と言う訳ではない。

勿論さっき桃子に送ったメールの内容も真っ赤な嘘。

全て、周囲の人間に迷惑や心配をかけないための、純騎なりの措置だ。

「ふぅ・・・・・・・さて」

周囲の気配を確認すると、

「・・・・・・いるんだろ、出て来いよ」

誰もいない筈の背後に向かって、話しかけた。

「・・・っ！」

殺気に気が付き、咄嗟にその場から飛び退くと、さっきまで立っていた場所には

魔力で練られた数本の刃が突き刺さっていた。

相手方が返事の代わりに、魔力刃を飛ばして攻撃を放ってきたのだ。

しかも、魔力の練度が桁外れだ。

（これは・・・アブソーブ・デバイスを使ってるな）

「ネロ、セットアップ！！」

〈Ｓｔａｎｄ　ｂｙ　ｒｅａｄｙ，　Ｓｅｔ　ｕｐ！〉

黒色の魔力球が純騎の身体を覆い、そして弾けた。

漆黒の黒衣（バリアジャケット）と同時に『パイルバンカー』に分類されるドラグナーを右腕に装着すると、本体に膨大な魔力を込めていく。

「（ネロ、奪取（スナッチ）の準備を頼む）」

「（了解ですマスター！）」

それだけネロに伝えると、純騎は姿を見せない敵を捕捉するために神経を研ぎ澄ませる。

（自分と相手は点・・・周囲は真っ白な空間・・・）

研ぎ澄ます。

（使われた使用済みの魔力の、微かに出る場所・・・）

研ぎ澄ます。

（そこが・・・・・・相手のいる本当の位置・・・）

更に研ぎ澄ます。

空気が張り詰め、周囲の雰囲気が途端に重さを増していく。

そして。

「・・・・・・はあっ！！！」

自身の真後ろを振り向き、ドラグナーを装着した右腕を突き出した。

（・・・捉えた！）

右手に何かを殴った、確かな手応えを感じた。

「クラッシュ・・・バースト！！！」

カチッという撃鉄の鳴る音がしたかと思うと。

ドゴォォォォオオン！！！！！

ドラグナーに充填され圧縮された膨大な量の魔力が、大音響で爆発を起こす。

爆風で起きた土煙が晴れた後、立っていたのは、純騎だけだった。

そして純騎の足元には、

「ぐ・・・がはっ・・・」

ドラグナーの直撃と爆発で片腕と腹に深い傷を負った、仮面を付けた長身の男が、

無様に腹を押さえて悶えていた。

「ネロ、奪取（スナッチ）を頼む」

〈りょーかいですっ！〉

その途端、ネロのコアである蒼い宝玉が光を放ち出す。

そしてそれに呼応するかのように、倒れている男の腰のホルダーから淡い光が漏れ出す。

その刹那、ホルダーの蓋を跳ね除けて出てきたのは、藍色の本体に空色の宝玉を携えた、

一枚の金属製のカードだった。

〈所有者書き換え・・・完了ですっ♪〉

その声とほぼ同時に、カードが純騎の手元へと吸い込まれるように収まる。

純騎の手に握られると同時に、宝玉はその輝きを鎮めて沈黙する。

〈属性は水・・・氷のデバイス、識別名称は『ヴォルフ』です！〉

「よし・・・やっと手に入ったな」

彼、純騎の本来の目的である、全てのアブソーブデバイスの収拾。

彼の目的の達成に、一歩近づいた瞬間だった。

だが、達成感と安堵の所為で、

〈っ！？　マスターっ攻撃来ますっ！！！〉

「な・・・がっ！？」

後方から迫る攻撃に一瞬反応が遅れ、純騎の背中に魔力弾が直撃する。

幸いにもジャケットを貫通したのは直撃時の衝撃のみで、

身体に余りダメージが無かった。

純騎は直ぐに攻撃のあった後ろ、返り討ちにした男の方に向き直る。
そこには、

「なっ・・・・・・二人っ！？」

〈同じ顔が・・・二つあるです！？〉

倒れていた男と全く瓜二つな風貌の仮面を付けた男が、倒れていた方に肩を貸していた。
肩を貸した男は片割れが立ち上がるのを確認すると、
直ぐに転移魔法陣を展開し姿を晦(くら)ましてしまった。

「ちっ・・・もう一人もアブソーブデバイスを・・・！」

〈マスターっ大丈夫ですか！？〉

慌てながらも心配そうに声をかけてくるネロに、純騎は大丈夫だと言って

魔力弾の当たった背中を擦(さす)る。

ネロの生成した強固なバリアジャケットの恩恵か、傷はそこまで酷くはなかった。

魔力弾の直撃を受けた背中の一部が内出血で真っ青に変色していたが、

精々風呂に入る時に痛みを伴う程度だと見積もる。

2，3日すれば自然に完治するだろう。

「さてっと・・・用事も済んだし、家に帰るか？」

〈そうですね、家に着く頃までに、ヴォ(この子)ルフの能力を解析しておきますね？〉

「そうしてくれ、それじゃさっさと家に帰るかぁ・・・いててて」

痛む背中を擦りながら、丘立った公園の階段を降り帰路に着く。

何か重い物を背負った者だけが漂わせる、哀愁に似た雰囲気を背に纏いながら・・・・・。

因みに。

「ウギャアアアアアアアアアアアアアアアアア！！！」

本人の予想の斜め上をいく痛みが入浴時に背中を奔り、おまけに、

「ほらほらっ暴れないで・・・よっ！」

「いだだだだだっっっ！！？」

前回のスパでの一件以降、自棄(ヤケ)に純騎と一緒に風呂に入っている

（押し掛けるとも言う）なのはが、痛む背中をタオルでゴシゴシと擦るため、

余りの痛さに悶絶し続ける純騎だった。

～Ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅ～

第8話　†新たなる力と、雹狼《ヴォルフ》の咆哮†（前書き）

今回は早速、新アブソーブデバイス『ヴォルフ』が登場します。

あと、長く更新が滞ってしまいスイマセン。

第8話　†新たなる力と、雹狼《ヴォルフ》の咆哮†

～数日後、時空管理局本局・医療検査室～

『ありがとうございました～！』

数日前とは打って変わり、元気に溢れたお礼の声が通路に木霊する。
ドアが開き、検査を終えて検査担当の医師にお辞儀をするのは、
スッキリとした表情を浮かべた高町なのは。

「なのは～！」

そこに駆け寄ってきたのは仲間であり、友達でもあるユーノ・アルフ・フェイトの三人。

そして、つい最近家族になったばかりの純騎。

「検査結果、どうだった？」

「無事完治！」

腕を挙げて喜びを表しながら、仲間達と喜びを分かち合うなのは。

そして完治したのは、なのはだけではなかった。

「こっちも、完治！」

「バッチリ修理完了だ」

そう言ってフェイトが取り出したのは、自身の相棒である金色（バルディッシュ）の宝石。

そして純騎が取り出したのは、なのはの魔道の杖である真っ赤（レイジングハート）な宝玉。

先の戦いで破損した両機は、完全にその元の輝きを取り戻していた。

「良かったですね、二人とも！」

純騎の胸ポケットから這い出てきたネロが、よしよしと二つのデバイスを撫でる。

微笑ましい光景が、そこにはあった。

「んじゃあ、僕はエイミィさんに連絡を入れるね？」

「分かった、頼むぜユーノ」

そそくさと通信の準備をするユーノをその場に残し、完全復帰したなのはと共に、

純騎達は自販機の近くのベンチに腰を下ろす。

ユーノはまだかと待ち時間を持て余していた、その時。

ビーッ！！　ビーッ！！　ビーッ！！

「ん・・・！」

「な、何！？」

突如として現れたモニターに、真っ赤な『ＣＡＵＴＩＯＮ』の文字が点滅する。

『緊急事態』、つまりは、

「・・・・・・あいつらか」

「「・・・！！」」

そう、先の戦いで交戦し、そして敗戦を帰してしまった、あの相手。

なのはとフェイトの魔道の杖を破損させた、張本人達。

「なのはっ皆！！」

「ユーノ君！！」

血相を変えて走ってくるユーノの方に、座っていた皆の視線が集まる。

「ユーノ、この前のあいつ等か？」

「うん、なのは、フェイト、純騎っ早く転送ポートに！！」

ユーノに急かされるまま、純騎達は急ぎ転送ポートへと向かう。

『不屈の心』を持つ少女は、会って話をするために。

『閃光の戦斧』を携える少女は話を聞き、出来事を解決へと導くために。

『スクライア』の少年は、二人を助けたいがために。

そして、

「さぁて・・・・・・兄妹(なのは)の仇、討たせて貰うか」

『執行者』の少年は、傷つけられた家族の仇討ちのために。
各々の思いを胸に、彼等は海鳴の町へと引き返していった。
其々の思いを、貫くために。

◆

「くぅ・・・・・・っ！」

「ぬ・・・っ！」

海鳴市の上空。

眼下に町が見える空の上で紅い服の少女と筋骨隆々な男が、

十名程の管理局の魔道士に取り囲まれていた。

そんな異常な状況が、この二人がどれだけ危険視された存在かを物語っていた。

「管理局か・・・・・・」

「でもチャラいよこいつ等・・・・・・返り討ちだ！！」

少女が自身の武器である鉄槌を構え、臨戦態勢を取った、その瞬間。

「あ・・・？」

突然、彼女達を包囲していた魔道士達が散り散りに分散していく。

「・・・上だ！！」

ポカンと大口を開けて呆けている少女に、男が注意を促す。

男の見つめるその先から。

「スティンガーブレイド、エクスキューションシフト！！！」

黒いバリアジャケットに身を包んだ魔道士（クロノ）が、無数の水色の魔力刃

を一斉に打ち出す。
視界の全てを埋める程の物量で迫る水色の魔力刃。

「ちぃっ！！」

少女より先に気付いた男が、咄嗟の判断で防御の防壁を張り巡らす。
その刹那に、クロノの放った魔力刃がその防御とぶつかり、鬩(せめ)ぎ合う。
魔力刃が着弾、そして爆発する。

「ハァ・・ハァ・・・少しは・・・通ったか・・・？」

一度に大量の魔力を消費して、肩で息をするクロノ。
爆発の煙が晴れ、そこから二人の人影が姿を現す。

「ザフィーラ！！」

「大丈夫だ、この程度でどうにかなる程・・・柔じゃない！！」

そう言って腕に突き刺さった小さな魔力刃を、腕に力を込めて破壊してみせる。

男が無事なのを確認した少女は、舌打ちをしながら魔力刃を放った魔道士を睨みつける。

「く・・・！！」

自身の攻撃がまるで効いていないのを知り、クロノは顔を顰める。

（アレ以上の魔法は使えない・・・くそっ！）

心の内で毒づきながら、クロノが再び杖を握り直した、その時。

〈武装局員、配置完了！　オッケークロノ君！！〉

エイミィの通信が、割って入ってきた。

「了解っ！」

〈それから今、現場に助っ人を転送したよ！！〉

「え・・・・・・？」

エイミィの思いもしない一言に、クロノは周囲を見渡す。
そして、少々離れたビルの屋上で、助っ人の姿を確認した。

「なのは!!　フェイト!!　それに・・・」

そう、屋上に決意とリベンジの念の篭った表情で立っていたのは、
高町なのはとフェイト・テスタロッサ、そして。

「おいおい・・・俺を忘れんなよクロノ」

「純騎！？」

「やれやれ・・・どうにか間に合ったみたいだな」

結界の中に転移したと思ったらこんな状況だしな。

まぁいいか、これでなのはの仇討ちも出来そうだしな。

「ネロ、『ヴォルフ』の準備はいいか？」

〈はいですっ能力解析完了してます！〉

「おっし、二人も準備はいいな？」

「うんっ！」

「私はいつでも！」

二人は既に待機状態のレイジングハートとバルディッシュを構えている。

完全に臨戦態勢万全だな、一応話し合いに来てるんだが・・・・・・、

でも肉体言語って言葉があるし・・・・・・ん、矛盾してるか・・・
まぁいいか。

「オッケー・・・ネロ！！」

「レイジングハート！！」

「バルディッシュ！！」

真紅の宝玉（レイジングハート）が、金色の宝石（バルディッシュ）が、
そしてネロの真っ青な宝玉が煌めく。

「「セーッアップ！！」」　「セットアップ！！」

その途端になのはとフェイトを光の柱が、そして俺の体を漆黒の魔力球が包み、浮き上がらせる。

俺の身体を、漆黒の黒衣（バリアジャケット）と共に蒼い帯状の魔法陣が包む。

横を見ると、なのはとフェイトにも同じ様なことが起きていた。

「ネロ、これは一体・・・？」

〈えーっとですね・・・私の方は『ヴォルフ』とのシステム同調、なのはさん達の方は『ベルカ式カートリッジシステム』との最終調整ですね〉

ネロがさも当然の如く説明する、

俺の方は分かったけど、なのは達の方は説明がつかない。

『ベルカ式カートリッジシステム』を搭載する話なんて誰も言ってなかったし・・・。

〈・・・・・・あの二人が、自分からお願いしたそうです〉

「え・・・それってつまり・・・・・・レイジングハートとバルディッシュが、か？」

〈はい・・・メンテナンスの時も凄く悔しがってました、『マスターを護れなかった』って・・・〉

デバイスが自ら『強くなること』を望むなんてな・・・俄(にわ)かには信じ難いけど、

今の状況が物語ってるな。

「・・・よし、じゃあ俺も『アイツ等』も護ってやんないとな、・・・・・・二度と壊れないように、な？」

〈はいですっ『ヴォルフ』とのシステム同調、完了しました！〉

「よし・・・ヴォルフ！！」

〈Ｙｅｓ，ｓｉｒ，Ｍｙ　ｍａｓｔａｒ．　Ｓｔａｎｄｂｙ　ｒｅａｄｙ．．．〉

俺の呼びかけに応え、輝きを放ち出すヴォルフ。

『氷』のデバイスであるヴォルフの力・・・見せてやるぜ！

「ヴォルフ、セットアップ！！」

〈Ｓｅｔ　ｕｐ！！〉

一瞬眩く光を放つと同時に、ヴォルフが俺の周りを極寒の冷気で包み込む。

刃の様に冷たいそれは、俺の漆黒の黒衣を瞬く間に氷塊で凍りつかせる。

「っぐ・・・ぉ・・・ぉぉおっ・・・・・・！！」

そして俺の中に、新しい力がヴォルフを通して流れ込んでくる。
俺の中の何かを呼び起こすように、力が体の中を蠢く。
それに伴い、黒衣を氷漬けにしていた氷塊が砕け散った。
氷塊が砕けたその時、俺は黒衣を着てはいなかった。
上は首筋のラインにファーがあしらわれ、胸元を露出したワイルドなベストに。
下は蒼く、それでいて野生的な風貌のダメージジーンズへと変わり。
左腕には青い毛並みの狼の上顎を模った大き目の篭手が。
更に右手には、同じく蒼い狼を模した片手剣が握り締められる。

「ヴゥゥゥ・・・・・・・・・・」

力が、力が湧き上がって来る。

今まで持ったことの無い、新しい力が。

もし黒衣を『理性』に例えるなら、この『ヴォルフ』の力は、正に、

「――ヴゥゥア゛ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛！！！！」

そう、『獣性』だ。

湧き上がる力を解き放ち、星空を仰ぎ、身体を仰け反らせて吼える。

外見はとても野生的且つ猛々しいのに、精神の奥底はとてもクリアで、冷静だった。

～Ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ～

第9話　†小さな願い、大きな力†

「ふぅ・・・・・・よし」

バリアジャケットが、身体に良く馴染む。

手にした剣は、その刀身から視認出来る程の冷たい冷気を放ち。

左腕の盾の狼の面は、今にも雄叫びを上げそうに殺気を起たせている。

「さて・・・話、聞かせてくんねぇか？」

空で様子を見ていた二人の魔道士の内、赤い服の少女の方に聞いてみた。

「・・・私達は貴方達と戦いに来た訳じゃない、まずは話を聞かせて」

「闇の書の完成を目指してる理由を・・・！」

なのはとフェイトも、上を見上げながら同じ様に呼びかける。

なるべく穏便に事を済ませる為に。

「あのさぁ・・・ベルカの諺にこういうのがあんだよ」

徐(おもむろ)に少女が口を開く。

ベルカの諺に、一体何があるってんだ？

「・・・『和平の使者は槍を持たない』」

「「・・・？？」」

それを聞いたなのはとフェイトは、お互いに顔を合わせる。

・・・意味が分かって無いみたいだな。

「・・・話し合いに来てるのに武器を持ってくるんじゃねぇってか？」

「いきなり武器を持って襲い掛かってきた子がそれを言う！？」

お、珍しくなのはが怒鳴ったな。

フェイトも少しムッとしてるし。

「ヴィータ、それは諺ではなく小話のオチだ」

「るっせぇなぁ、いいじゃん細かいことなんか・・・」

男の方から少女に向かって、鋭い突っ込みが飛ぶ。

・・・まぁ、この際意味なんてどうでもいい。

問題は、闘うか闘わないか、だ。

「なぁ、そっちは闘う気満々な訳？」

「当たり前だろ！！」

「つー事は、話し合いする気も更々無いって事でいいんだな？」

「だからそう言ってんだろ！！」

今すぐにでもなのは達をコテンパンにしてやろうとでも言うように、
少女が紅い戦槌の尖った先端を俺に向けてくる。
血気盛んだな、話し合い云々じゃ解決し無さそうだ。
・・・尤も、俺も話し合いで如何(どう)こうする気は一切無いのだが。

「なのは」

「なに純騎くん？」

「・・・あの赤いチビとは俺にやらせてくれないか？」

「えっでもあの子とは私が」「頼む、やらせてくれ」

断られるのは百も承知だ。

アイツはなのはにとって見れば、レイジングハートをぶっ壊した張本人だ。

自分の敵ぐらい、自分で討ちたいだろう。

「・・・・・・うん、いいよ」

「え・・・いいのか？」

「その代わり・・・」

と、ここでなのはが一旦言葉を止める。

何なんだ、一体・・・・・・？

「絶対っゼーッタイに、あの子に勝ってね！」

「・・・へっ上等！！」

それくらいの約束なら、幾らだって守ってやるっての！！

右手の剣を正眼に構え、冷気を纏わせる。

周りは冷気で満たされている筈なのに、体は燃え滾るように熱い。

身体に流れる血液が、今にも沸騰しそうなくらい熱く滾っている。

「さぁ来い赤チビ、俺が勝ったら話を聞かせてもらうぜ？」

「チビって言ってんじゃ・・・ねぇ！！！」

身体的特徴をネタにした挑発にカチンと来た少女は、

手に持った戦槌を振り上げ俺目掛けて突進してくる。

ガキィン！！

振り下ろされた戦槌と、構えた盾とがぶつかり合って火花を散らす。
暫くの鍔迫り合い、先に動いたのは少女の方だった。

「アイゼン！！」

〈Ｅｘｐｌｏｓｉｏｎ！！〉

少女の掛け声を受け、戦槌（デバイス）に組み込まれた弾丸が装填される。
その途端、戦槌が瞬く間に姿を巨大化させていき、
完全に少女の身の丈を越す大きさまで肥大化する。

「ギガント――」

大きく肥大化したハンマーヘッドが、不釣合いに長く細い持ち手に振り回される。

視界の全てを蔽(おお)う程の大質量。

「――シュラーク！！！」

見た目通りの『強大』な一撃が迫る。

並の魔道士なら受ければ即ノックダウン、良くて気絶、悪けりゃ骨が何本か逝くであろう一撃。

相手も本気という訳だ。

俺はそれを、

「ぬんっ！！！」

ガキィィィン！！！！！

「なっ・・・・!!?」

真正面から、小さな盾一つで受け止める。

流石にあの大質量の攻撃を受け止めるには、この盾では小さ過ぎる。

踏み止まっているが少しづつ、下へと押されていく。

（余裕こき過ぎたか・・・ちょっと重いな・・・!!）

その時。

〈Ｆｒｏｚｅｎ　ｅｆｆｅｃｔ，　Ｓｔａｒｔ　ｕｐ!〉

盾から発された音声と共にハンマーヘッドが接触している部分から、

白い液体が吹き出る。

それがハンマーヘッドに触れた途端。

パキッピキピキピキバキッ！！

「そんな！？」

液体が触れた箇所が、みるみる凍りついていく。

そして瞬く間に凍りついたハンマーヘッドが砕け散ってゆく。

「こんのおおおおおっ！！！！！」

自慢の戦槌を破壊された少女が逆上し、ロケットブースターとピックをつけた

戦槌で錐揉み回転しながら突進してくる。

恐らく、ブースターの推力で回転の際の遠心力を増加させ、

鋭いピックの破壊力を最大限に増大させているんだろう。

・・・・・当たったらマジで痛そうだな。

でも、さっきの『フローズン・エフェクト』を使えば・・・。

〈Ｆｌｏｚｅｎ　ｅｆｆｅｃｔ，　Ｓｔａｒｔ　ｕｐ！〉

「はあっ！！」

盾の側面を、回転しながら迫ってくる少女に向け、白い液体を発射する。

すると案の定、

「かっ体が・・・動かねぇ・・・！？」

少女の体は戦槌を振り被った状態で、宙に縫い付けられたように静止する。

少女の四肢と戦槌に氷塊が纏わり付き、身動きが出来なくなっているようだ。

「さてっと・・・俺が勝ったら、話をする約束だったな？」

近くの高いビルの先端に降り立ちながら、少女に問う。

尤も、あれだけ直情的な性格だから真っ当な答えは期待しちゃいないけど。

「誰が話すかっ！！」

「そうか、んじゃあ・・・・・・」

交渉は決裂した。

こうなったら、気絶させてでもクロノのとこに引き摺っていってやる！

「『止(とど)め』といきますか！！」

内なる魔力を、爆発的に上昇させる。

膨れ上がる力、湧き上がる闘志。

「ウォォォォォォォォォン・・・・・・・・」

体中を駆け巡る力を解放するかのように夜の虚空を仰ぎ見、咆哮する。

雄叫びが夜の空に響き、空を覆っていた雲が晴れてゆく。
雲が晴れ、空に金色(こんじき)の光を放つ満月が姿を現す。
それを確認すると高台から空高く跳躍し、眼下の少女を睨む。
・・・そうだ、彼女のさっきの魔法(技)からちょっと動きを貰うとするか。

「・・・行くぜ」

宣言し、右手の剣を連続で振り回す。
切っ先から魔力が飛び、少女の体を痛めつける。
程なく正眼に剣を持ち直し、飛行魔法を解いて身体を回転させながら少女目掛けて落下していく。

「っアイゼン!!!」

〈Ｐａｎｚｅｒｈｉｎｄｅｒｎｉｓ！〉

身の危険を感じ、少女が対物理障壁を展開する。

・・・これじゃアイツを気絶させるくらいのダメージは望めないな。

（まぁいい、ひとまず動けなくすりゃいいか！！）

「狼牙――」

まるで竜巻の如く激しく回転し、金色の剣の刃と獣性で真っ赤に血走った眼が、

金色と赤色の光の尾を描く。

眼前の『獲物』を狩る為に。

「――空裂旋！！！！」

キィィィィィィィン！！！！

ぶつかり合う、剣と障壁。

一時の拮抗、そして。

「沈めえっ！！！！」

バキィィィィィン！！！！

「ぐあっっっっ！！？」

彼女の築いた堅牢な障壁は砕かれ、回転する剣の刃が彼女を斬る。
その刹那に生じた魔力爆発に、少女は飲み込まれた。
・・・・・・尤も、大怪我を負う程度で暫くの間戦闘不能にするだけなんだがな。

「・・・・・・・ぐぅっ！？」

安堵したのもつかの間、頭に激痛が奔る。
頭の中の『理性』が、ガリガリと『何か』に削り取られていくような感覚。
一体何事かと思ったとき、不意に今まで黙っていたネロが声を発する。

〈マスターっ今すぐバリアジャケットを換装してください！！〉

「っぐぅ・・・ネロ、セットアップ・・・・!!」

〈Ｓｔａｎｄｂｙ　ｒｅａｄｙ，　Ｓｅｔ　ｕｐ!〉

ネロに促されるがままに、先のベストから黒衣へと姿を変える。

途端に、頭の痛みがスッと引いていくのを感じた。

〈『ヴォルフ』とのセットアップには活動臨界があって、
それを超えると精神が本能に食べられちゃうんです。
ですから気を付けて下さいね？〉

「・・・そういう大事なことは使う前に言ってくんないか？
危うく心まで獣になっちまうかと思ったぞ」

〈それが・・・どうも他のアブソーブデバイスとマスターがセット
アップしてる
状態だと、会話がしにくいみたいで・・・すいません〉

「また機能不全か・・・・・・自動修復で直るのを待つしかないか」

アブソーブデバイスの開発に携わった研究者達は、今は行方知れずだ。
『あの人』が生きていたらな・・・・・・。

「はぁ・・・はぁ・・・っ！」

やがて煙が晴れると、赤い防護服をすっかりボロボロにした、
満身創痍の少女が姿を現した。
被っていた帽子に付いていた兎の飾りはズタズタになっており、
腕や足には裂傷がありありと刻まれていた。
これならほんの暫くの間は戦闘に参加することはないだろう。
あくまで『暫く』だが。
『魔力で構成された生命体』にとって、外傷の修復はそれほど苦なことではないはずだ。

「はぁ・・・はぁ・・・くそっまだだ、まだ終わってねぇ・・・！」

満身創痍にも拘(かかわ)らず、少女は戦槌を握り締める。

だが少女の体は痛みに震え、どうにか気力を保ち続けているように見受けられる。

「はぁ・・・ったく、死んでも知らねぇぞ」

〈Ｓａｍｍｏｎ，'Ｄｒａｇｏｎｅｒ'〉

右腕に『ドラグナー』を呼び出し、備え付けられたブレードを近接用に伸長させる。

（次の一撃で仕留める・・・！！）

ドラグナーに魔力を充填し始めた、その時。

「――――！！」

少女の様子が、途端に変わった。

何かを聞くような素振り、そして、

「――――おうっ！！」

……何かについての肯定。

その刹那。

〈！！　上空に巨大な魔力の集束を探知！！〉

「今度は何だ！？」

上に目を向けると、どす黒い魔力が空高く昇っていくのが見えた。

何か、得体の知れない『不穏』な力が渦を巻く。

その力が『純粋な破壊』を生むモノだと言うことを、肌で感じた。

〈集束の度合いから砲撃・・・・・・恐らく結界破壊が目的かと！！〉

「結界内の奴等とは戦闘中だぞ、他に誰が・・・・・・っ！？」

いた、一人だけ敵の中で『結界の外』にいる奴が。

即座に周囲を見渡す。

目の前には紅い帽子の少女が一人。

向こうの方でなのはとフェイトが相手をしている女剣士が一人。

アルフと戦っている屈強な男が一人。

その3人の他に、もう一人いたはずだ。

「・・・・・・っ！！」

先の戦いで、なのはのリンカーコアを奪っていったアイツだ。

結界内にはいなかったアイツが、外から結界の破壊をしようとしている。

ズガァァァァアン！！！！！！

轟音を立て、どす黒い魔力球から強層結界目掛け、極太の砲撃が撃ち下ろされた。

如何に外から強化されているとは言え、放たれた砲撃の威力が桁違いだ。

半円状の結界に、亀裂が奔っていく。

「・・・ヴォルケンリッターが一人、鉄槌の騎士『ヴィータ』だ！！」

「・・・・・・あ？」

人が今の状況を打開する方法を模索してる時に、いきなり少女が名乗りを上げだす。

「お前とアイツの名前は何だ！！」

「・・・あっちは『高町なのは』、俺の名前は『高町純騎』だけど？」

「高町なぬ・・・なっぬ・・・あー呼びにくい！！！」

・・・・・・なのはの名前を噛んでやがる。

どんだけ滑舌わりぃんだよったく・・・・・・しかも自分で言って逆切れしてるし。

「ともあれ『高町ナントカ』との勝負は預けた、次は『殺す』って言っとけ！！！」

・・・おまけに略されてるし。

「お前が手に持ってるソレをなのはに突きつけたら、只の魔力の塊にしてやるよ」

「――っ！！」

「ついでに言うなら、今のなのはならヴィータ・・・お前は返り討ちだろうがな」

「・・・くっそーっ！！　覚えてろ！！！」

つい最近見た特撮番組で雑魚幹部が言っていたセリフそのままの言葉を、

捨て台詞で吐いていき、少女の姿は魔法陣に包まれ遥か彼方へ消え去っていく。

〈マスター結界が崩れちゃいますっなのはさん達の所へ早くっ！！〉

「そうだな・・・幾らなのは達でもアレが直撃したらヤバいからな」

ネロに促され、急いでなのは達の許へと飛んで行く。

結界に奔った亀裂から、さっきのどす黒い魔力が降り注ぐ。

ビルに直撃しても何とも無い、どうやら物理的な攻撃力は余り無いようだ。

・・・放出されている魔力の量が膨大だから、防御にはちと骨が折れそうだが。

「待たせた皆、早く障壁を！！」

「分かってるよっ！」

返事と共に、下の道路のユーノが自身を含めた5人を球状のバリアで覆い、

その上からアルフの出した円柱状のバリアが包み込む。

更にそれに加え、俺が全方位に曼荼羅(まんだら)状にラウンドシールドを展開する。

「これで大丈夫だろ・・・とりあえず、全員ショックに備えておいてくれ」

「うん！」「うん」「オッケィ！！」「分かった！！」

各々からの返事が聞こえたその時。

劈(つんざ)くような轟音を響かせて結界が砕け散り、

砲撃の当たった場所を中心に大規模な魔力爆発が発生する。

紫色を帯びた白い光が、障壁を張った俺達諸共町を飲み込んでいった。

◆◆

『状況は！？』

「魔力爆撃・・・物理被害はありません！！」

画面の荒れたモニターの前で、エイミィが必死に機材を操作する。

「でも、ジャミングされてサーチャーとレーダーが・・・！！」

『至急システムの復旧を、なのはさん達の安否確認を急いで！！』

「はいっ！！」

目にも止まらぬ速さで端末のキーボードを操作していくエイミィ。

みるみる砂嵐状態だったモニターに映像が戻っていく。

「こちらエイミィ！　皆聞こえる？！」

『――――こちらユーノです、なのは達は無事です』

『――――こちらクロノ、こっちもなんとか・・・』

「はぁ～・・・良かった～・・・」

通信が回復して仲間と連絡が取れ、安堵の溜息をつきながらイスに凭(もた)れ掛る。

この日の夜の戦いが、やっと終わりを告げたのだった。

(To be continued)

第１０話　†大きな謎、小さな疑問†

～十数分後、フェイト邸兼管理局駐屯地～

「はぁ～・・・つっかれた～」

「あれだけの威力の攻撃を防いだのは初めてでしたからね～・・・」

フカフカのソファに座り込み、明るい光を放つ照明をボーっと見つめながらぼやく。

すぐ傍ではクロノとリンディさんが今後の方針について話し込んでいる。

そしてキッチンの方ではエイミィがなのはとフェイトの二人に、新しい機能を積んだ其々のデバイスについてレクチャーをしている。

アルフに俺、ネロは暇をしてそれぞれの話に耳を向けていた。

「――問題は彼等の目的よね？」

「ええ・・・どうも腑に落ちません」

「ん・・・どうしたんだ？」

ふとクロノ達の会話が気になったので、首を突っ込んでみる。

アルフもこっちに顔を向けてきた。

「彼等がまるで、自分の意思で『闇の書』の完成を目指しているようにも感じますし・・・」

「・・・ん、それって何かおかしいのか？」

クロノの疑問に違和感を感じ、割って入る。

「『主』ってのに命令されてやってんだったら、至極当然な事なんじゃないか？」

そんな俺の疑問に、クロノとリンディさんが順を追って説明し出した。

「・・・第一に、『闇の書』の力は自由な制御が利く物ではないんだ」

「完成前も完成後も、純粋な『破壊』にしか使えない、
・・・少なくともそれ以外に使われたと言う記録は一度も無いわ」

「・・・質問の答えになってないんだが」

「そう急かすな、それからもう一つ・・・あの騎士達『闇の書の守護者』の性質だ」

と、クロノが不意にキッチンの方のなのは達をちらりと見る。

どうやらあっちの話は済んだようで、3人ともこっちの話に耳を傾けていた。

それを確認し、クロノが先を続ける。

「・・・彼等は『人間』でも『使い魔』でもない」

「「「!!!」」」

「魔法技術で造られた『擬似人格』、主の命令を受けて行動するただそれだけの『プログラム』に過ぎない筈なんだ」

「・・・やっぱりか・・・」

やはりあの連中は、魔法によって生み出された存在だったのか。

確かに魔法技術で造り出された人工的な『プログラム』に感情があるのは不自然だ。

クロノの懇切丁寧な説明で、合点がいった。

「あの・・・人間でも使い魔でもない擬似生命って言うと・・・」

と、ここで今まで黙って聞いていたフェイトが口を開く。

皆の視線が、フェイトに集中する。

「もしかして・・・私みたいな？」

「っ違うわ！！」

「・・・？？？」

「フェイトさんは生まれ方が少し違っていただけで、ちゃんと命を受けて産み出された人間でしょ？」

「検査の結果でも、ちゃんとそう出ていただろう？

・・・ヘンな事言うもんじゃない」

フェイトの発言にリンディさんが珍しく声を荒げる。

クロノもフェイトを諭すように叱責する。

・・・・・・一体どういう事だ？

俺以外の他の皆は事情を知っていそうだけど・・・今は聞けるタイミングじゃない。

（フェイトって・・・一体・・・？？）

それとなく、フェイトの方に視線を向ける。

リンディさんとクロノの言葉で、フェイトは顔を少し俯(うつむ)かせていた。

その後もエイミィ達から『闇の書の守護者』や『闇の書』自体についての説明があったけど、

フェイトの事が気になって内容は余り頭の中に入ってこなかった。

・・・その結果、呆けているのをクロノに注意を受ける羽目になったのは言うまでも無い。

～翌日～

「ん・・・・・・もう朝か・・・ねむ」

・・・結局、フェイトの事が気になって殆ど寝付けなかったな・・・。

まだ胸の辺りがモヤモヤする・・・予想や推測は何の役にも立たないしな。

・・・・・よし、こうなったら仕方ない。

「お～い、なのはーちょっと話がー・・・」

隣の部屋でまだ寝ているであろうなのはの部屋のドアの前で、部屋の主を呼ぶ。

昨日は聞きそびれたけど、フェイトと仲の良いなのはなら教えてくれるかも・・・？

『・・・キューっ！！　キューキュー！！』

「・・・ん、何だ？」

中から動物の鳴き声が。

そう言えば確か・・・フェレットモードのユーノがなのはと一緒の部屋で寝てたような・・・。

・・・・・まさか、もしや・・・いや間違い無いだろう。

「ちょっまっキューっ！！　キューっ！！？」

「・・・・・・・・・やっぱりな」

ドアを開けた先で見たのは。

まだ夢の中のなのはにその小さな身体を掴まれ、胴体をハムハムと噛まれているユーノの姿が。

・・・・差し詰め、何かを食べる夢でも見ていることだろう。

だが、それもこれまでだ。

「うりゃ」

「あうっ？！」

なのはの脳天に空手チョップを喰らわせる。

・・・ボコっとイイ音が鳴ったな、今日は８０点ぐらいだな。

「痛いよ純騎くんっ！！」

「それより自分が今握り潰そうとしてる奴を見てやれよ、かなりヤバイぞ？」

「へ？・・・・・・あーっ！！？」

腕をブンブンと振り非難轟々ななのはが、ふと自分の右手に握っている誰かを見る。

そこには目をグルグルと回し、鳴き声を上げながらグロッキーな状態になっているユーノが。

・・・・・・朝から早々、ご愁傷様だなユーノ。

～聖祥小学校・3時間目～

「・・・ん～・・・・・・」

どう聞こうか、フェイトに。

昨日のやりとりでの出来事が、頭にこびり付いて離れない。

気になる、凄く気になる。

・・・・・・けど、何故だろう。

踏み込んでは、知ろうとしてはいけない気がする。

だけど、それでも知りたい・・・フェイトの事を。

（はぁー・・・・・・どうしよ）

窓の外に向けようとした視線を、自然とフェイトに向けてしまう。
真剣に授業を受けているようだが、こっちは当の本人が気になって手に付かない。
手持ち無沙汰に鉛筆を転がしたりしてみるも、効果無し。
都合良くあっちの方から教えてくれる筈は無いし。
昨日のリンディさんの様子から見て、かなり深刻且つ複雑な事情っぽいし・・・。
どうしても、一歩先へと踏み出す『勇気』が無い。

（『戦い』だったら、幾らだってどうにでもなるのに・・・・・・）

・・・今更自分の境遇を呪ったって仕方が無い。
フェイトや他の皆が話すまで待っていよう、うんそうしよう。

「――起立！　礼！」

そうこうしてる間に号令係の声がかかり、慌てて立ち上がって礼をする。

ふと黒板を見ると、今日やっていた勉強の内容が黒々と書かれていた。

・・・・・・対して、俺の机に広げられたノートの中は真っ白け。

・・・写し書きするのが苦になりそうだ。

「・・・何だかいっぱいあるね」

放課後の教室、フェイトが携帯電話のカタログとにらめっこをして

いた。

周りにはいつもの仲良しグループが集まり、フェイトの携帯選びを手伝っていた。

・・・勿論、俺も及ばずながら参加している。

「まぁ最近はどれも同じ様な性能だし・・・見た目で選んで良いんじゃない？」

「でも、やっぱりメール性能の良いヤツが良いよね？」

「カメラが綺麗だと色々楽しいんだよ？」

「うーん・・・・・・」

やっぱりと言うか何と言うか、其々(それぞれ)違う意見が出揃う。

なのは達の意見に、フェイトがウンウンと唸る。

（・・・どれでも同じだと思うんだけど）

とてもじゃないが、意見を言った3人の前でこうは言えない。

「・・・ん、それは？」

「え、どれ？」

「ほら、今開いてるページ」

ふとフェイトの開いているカタログのページを指差すと、

黒い機体にカメラ周りが黄色い塗装の携帯電話の載ったページが、

丁度開かれていた。

色合いとデザインが、セットアップした時のフェイトの姿を何となく彷彿（ほうふつ）とさせる。

「色もフェイトに合ってるし、機能も結構充実してるし」

「そう、だね・・・・・・うん、これにしようかな・・・？」

どうやら、大体の目星をつけたようだ。

とりあえず、後ろでケータイについて論議を白熱させているなのは達3人を鎮めて帰路へつく。

・・・・・・あのままだったら日が暮れるまでケータイ談義に熱中してただろうからな。

～2日後～

「いらっしゃいませ～」

「うわ・・・・・・また種類増えたんじゃないか、これ？」

学校が終わったその帰り、リンディ付き添いの下に携帯を買いに来たフェイトに

くっ付いて来た、いつもの仲良しグループ５人。
店の陳列棚には様々な種類・色・デザインの携帯電話がズラリと並ぶ。
その中の一列の『新作』と書かれた棚を覗きながら純騎が呟く。
それだけ携帯は流行の移り変わりが早いのだ。

「じゃあフェイトさんの携帯を買ってくるまで、待っててもらえないかしら？」
『はーい！！』

そう言ってリンディさんはフェイトを連れて会計カウンターへと向かい、
なのは・アリサ・すずかの三人は新しい携帯の陳列された棚の方へ散っていく。

（さてっと、どれがいいかな・・・？）

一人とり残された純騎はと言うと、携帯につけるアクセサリー類の陳列された
コーナーで両手に商品を持ちながらウンウンと吟味していた。
ただ見ているのは女物のアクセサリー、勿論純騎が付ける物ではない

（父さんは「だったらその子の持つ携帯に合うストラップをプレゼントすればいい」って
言ってたっけ・・・・・どれが良いだろな・・・？）

ビーズで作られた小さな花飾りの付いたストラップ、同じ様にビーズで作られたウサギの
ストラップを手に取りながら、無い知恵を振り絞る。

（う～ん・・・・・・・・・・）

「純騎くん・・・？　どうしたの？」

「いや、フェイトにプレゼントと思って何かないかなぁと探してて」

「えっ・・・いいよそんな、悪いよ」

「そうは言っても・・・この前は気の利いた言葉が言えなかったし、フェイトとはもっと仲良くなりたいから・・・」

「べっ別にいいのに・・・そんな事・・・／／／／／／」

「・・・・・・・・・あれ？」

純騎は、今誰と話しているのか。

気になり後ろを振り向いた純騎の目の前には――――、

「気にしなくて・・・良いのに／／／／／／」

「ふぇっフェイトっ！？」

純騎がプレゼントを渡そうとしている相手、件（くだん）のフェイト本人がいた。

予想もしない事態に手に持っていたストラップを取り落とし、ポカンとした表情の純騎。

そして純騎の真ん前には、頬を紅く染めたフェイトの姿が。

（・・・・・・・・もしかして、今の聞かれてた！！？）

ショックで一瞬働かなくなった純騎の頭が回り始め、今の状況を把握し始める。

そしてそれに応じてか、純騎の顔が羞恥で赤くなってゆく。

そして、不意にフェイトと視線が合うと、

「・・・かっ会計済ませてくるっ！！！／／／／／／」

「あっ・・・・・・・」

気まずくなったのか、それとも照れ臭くなったのか、もしくはその両方か。

即座に立ち上がり、純騎は品物を持って目にも止まらぬ速さでレジへと飛んでいってしまう。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

その様子を、当のフェイトは棒立ちでポカンと見ているしかなかった。

「フェイトさん」

少し経ち、フェイトの携帯の契約が済み、リンディがフェイトに小袋を手渡す。

中にはお目当ての携帯が入った箱の他に、もう一つ紙の包みが。

「？　リンディ提督、この包みは・・・？」

「あぁそれね？　開けてみたら？」

小袋を手渡したリンディは、「あらあらまぁまぁ」と言った具合に笑みを浮かべながら勧める。

「・・・？　はい・・・」

訳が分からぬまま、フェイトが紙袋の封を剥がし、丁寧に中身を取り出す。

「これは・・・・・・ネコ？」

「携帯に付けるストラップね？」

姿を現したのは、可愛らしい白猫のマスコットが付いた携帯ストラップ。

フェイトが選んだ黒い携帯に、良く映える色合いだった。

「・・・！　もしかして・・・？」

誰がこのストラップを買ったのか、自分にくれたのは本当は誰なのか。

思い当たる人物は、一人しか思いつかなかった。

（純騎くん・・・・・・ありがと・・・／／／／／）

彼の自分を思う気持ちに頬を紅色に染めながら、心の内で感謝するフェイトであった。

・・・・・・一方、ストラップを送った張本人はと言うと。

（あ～・・・・・・直接渡せなかった・・・・・・・・・）

己の恥ずかしさから出た照れ隠しの行動を、大いに後悔して悶えていた。

～Ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ～

第１１話　†再びの邂逅†

「はあったあっっ！！！！！」

「ふんっだあっっ！！！」

木刀の打ち合わされる鈍い快音が、道場に響く。

今日は学校も休み、緊急の呼び出しも今の所無し。

という訳で、兄の恭也と姉の美由紀等と共に純騎は稽古に励んでいた。

因みに今の対戦カードは恭也対純騎で、美由紀は審判をしている。

「おらあっっ！！！！」

「うおっっ！！？」

リーチで言うなら恭也の方が上なのだが、小柄な純騎が果敢に懐へ入ろうとしてくるために、

中々渾身の面を入れられないでいる。

そして、

「らあっっ！！！」

スパァァン！！！

「った・・・っつぅ」

「一本、勝負ありっ！！」

恭也が攻めあぐねている隙を絶妙なタイミングで突き、防具を着けた状態でジャンプして
頭に思い切り木刀を振り下ろし、勝負が決した。

「いやぁ・・・まさか弟にこんなにも早く追い抜かされるとは・・・」

「純騎ってば始めた頃から筋が良かったけどね～・・・まさか恭ちゃんに一本入れるなんてね～」

「アハハ・・・・・・ありがと兄さん、姉ちゃん」

防具を外して汗を拭うその姿は、正(まさ)しく剣道少年そのものだった。

「あれ・・・メールか？」

ふと、道場の隅に置いていた黒いケータイのランプが点滅しているのが見えた。

防具を丁寧に外して床に置くと、早速二つ折りのケータイを開いた。

やはりメールだった、送り主は・・・・・・なんとフェイトだった。

（珍しいな・・・フェイトからメールが来るなんて）

件名は・・・・・・『今からこっちに来ませんか』と、銘打たれていた。

（『なのはも一緒です、良かったらどうですか？』か・・・・・・）

丁度稽古が終わった所だったので、返事は勿論イェスだ。

（『稽古が済んだ後だから、シャワーを浴びてからそっちに行きます。
少し遅くなるけど、待っててくれ。』っと・・・・・・送信）

送信ボタンを押しケータイを閉じると、すぐに立ち上がる。

「フェイトの家に行って来る～」

「分かった、気をつけて行けよ！」

「その前にシャワー入って行きなよ？」

「分かってるー」

シャワーの事を美由紀に言われ、返事をしながら道場をあとにする。

パパッと替えの肌着や靴下、衣服を抱えて脱衣所へと入っていった。

ピーンポーン。

「――いらっしゃい、純騎くん」

「ああ、お邪魔しまーす」

フェイトに促され、純騎は約束通りに遊びに来ていた。
早速自分の部屋へと純騎は通されると、そこには、

「よぉなのは」

「やっほー純騎くん！！」

フェイトと仲が良く、そして純騎の兄妹でもある、なのはの姿が。
部屋の隅のベッドに座ったフェイトと、ベッドの傍に座り込むなのはから、
少しだけ離れた位置に純騎があぐらを掻いて座る。
フェイトの部屋を興味深げに見渡す純騎。

（意外と・・・・・・簡素な部屋だなぁ）

なのはの部屋が装飾過多に見えるほどに、フェイトの部屋はシンプルな物だった。

ベッドと机、クローゼット以外は家具が余り無い。

机の上にはバルディッシュのカートリッジが、バルディッシュ本体と一緒に無造作に置かれていたし、

その横には先日買ったフェイトの新しいケータイが充電器に刺さっていた。

「ん・・・早速着けたんだ」

「えっあ・・・・・・うん」

ストラップを通す穴には、昨日純騎が恥ずかしくて直接渡さなかった、

白猫の可愛らしいマスコットの着いたストラップが着いていた。

「そう言えば、リンディさんとクロノは？　エイミィもいないし」
「エイミィはちょっとそこまで買い物に行ってる・・・」
「リンディさんとユーノくんは本局だし・・・クロノくんも出掛けてるよ？」
「そうか・・・まぁいいか」

普段いるはずの人がいないと、少し寂しいモノで。
そんな一抹の寂しさを、純騎は感じていた。
そんな純騎の気分を読んでか、なのはが早速話を振ってくる。

「そうだっこの前アリサちゃんとすずかちゃん、バイオリンの発表会があったんだって」
「へぇ～二人ともバイオリン習ってるんだ」
「そうだったな、何時だったか聞かせて貰ったけど、結構上手かったよな～」

「メールで良くお稽古の話とか教えてくれるんだよ～」

話が適度に弾み出す。

今度は純騎がリンディの部屋の話題を持ち出すと、二人から笑いが起こる。

あのセンスはちょっと変わってる、だとか。

地球の日本の文化に合わせているんだ、だとか。

「あっフェイトちゃん、ちょっとおトイレ借りるね？」

「うん、出て直ぐの所にあるから・・・」

「いってらっしゃーい」

話が一区切りついた所で、なのはがトイレに行くためにドアの向こうへと消えてゆく。

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・」

その途端、フェイトと純騎のいる部屋に沈黙が訪れた。

（わ・・・話題が・・・・・・見当たらない）

（どっどうしよ・・・純騎くん、黙り込んじゃった・・・・・・・）

双方共に、余り話しが得意な方ではない。

フェイトは根がおとなしく、純騎は未だに話下手なのだ。

寧ろ、この状況は至極当然と言えよう。

「・・・・・・そういやぁ、さ」

「っどっどうしたの？」

先に沈黙を破って口を開いたのは、意外にも純騎の方だった。

「そこのコルクボードの写真って・・・？」

「こっこれはねっその・・・なのはと文通してた時に、なのはが送ってきてくれた物なの」

「へぇ～・・・そうなのか」

「うっうん、そうなの・・・・・・」

『・・・・・・・・・・・・・・』

折角の話題は、僅か数秒のやり取りで終わりを告げた。

（・・・話の振り方・・・間違えたか・・・？！）

（うぅ・・・・・・もっと気の利いた事、言えた筈なのに・・・）

再度の沈黙、そして、

「・・・そうだっお茶とかお菓子取って来るねっ」

「え・・・あ・・・分かった」

この空気に耐えかねたフェイトが、堪らず部屋を出て行こうとした。

が。

「・・・うわわっ！？」

「っ危ねっ？！」

転ぶ要素も滑る要素も無い部屋の床で、フェイトがツルリと前屈みに転ぶ。

咄嗟に立ち上がった純騎が、そんなフェイトを素早く引き止めようとするが、

「うおおっっ！？」

セットアップした状態の純騎ならいざ知らず、今は子供の姿。

掴んだフェイトの腕に引っ張られるかのように、自分も巻き添えを

喰う羽目になる。

「っつつつ・・・・・・大丈夫かフェイ・・・・ト・・・・・・」

「うっうん、大丈・・・・・・ぶ・・・・・・っ！！」

・・・・・・・・・・・・近い。

主に体、特に顔が、今にもくっ付きそうな位に、近い。

床とフェイトの間に純騎の体がある、と言うよりも純騎がフェイトを気遣った結果、

純騎がフェイトの体を抱えてくるりと立ち位置を逆にした結果が、

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・／／／／／／／／／／」

フェイトが純騎を押し倒しているようにしか見えない構図。

極端に言えば、フェイトが純騎を襲い、純騎がフェイトを抱きしめている構図の出来上がり。

「あっ・・・あああああああ・・・／／／／／／」

「えぇっと・・・フェイト・・・・・・・？」

純騎が声をかける間にも、フェイトの顔はドンドン赤みを増してゆく。

リンゴ、若しくはトマトの様に、いやそれ以上に真っ赤に染まってゆく。

（あ～・・・もしこの状態でなのはが来たら・・・・・・）

「――お待たせ～フェイトちゃん純騎くーん」

「のわあっっ！！？」

「ひゃあぅ！？！」

嫌な予感ほど、当たるモノは無く。

用を足して戻ってきたなのはに、驚き慌てて離れる二人。

「？・・・・・・どうしたの二人とも？」

「いっイや・・・ナンデモナイゾ、ナンデモ」

「うっうん・・・何でも・・・・・・／／／／／／／／」

「？？？」

純騎は普段の口下手が悪い意味でレベルアップし、片言＋棒読みと

なり。

フェイトの方はついに顔から湯気が出そうなほど顔が真っ赤になる。

なのはが恋愛方面に図太いお陰か、それ以上の詮索はされなかったのだけが救いだった。

ピーンポーン。

非常に微妙な空気が漂う中、そんな部屋の雰囲気を破ってチャイムが鳴る。

「インターホン・・・エイミィさんかな？」

「わっ私出てくるねっ」

「おおっ俺も行くっ」

「あ～待ってよ二人共～！！」

勿論、フェイトと純騎は恥ずかしいやら済まないやらで、まともに

顔を合わせる事は出来なかった。

「――たっだいま～！！」

先ほどの気まずい空気を気持ち良くブチ壊す、エイミィの快活な声が響く。

フェイト、純騎、なのはと、順番にゾロゾロと出迎える。

「おかえりっエイミィ」

「お邪魔してまーすっ」

「右に同じく～」

「さあさあ三人ともっ冷蔵庫に買った物入れるの、手伝ってね～！」

居間に入ると、フェイトの使い魔であるアルフが子犬モードでキッチンの傍に

ゴロリと体を横たえ、昼寝の真っ最中だった。

尤も、さっきのインターホンで目を覚ましたらしく、目をパチクリさせていた。

「はいアルフ～、ビーフジャーキー買って来たよ～！」

「おお～っ！！　ナイスエイミィ～！！」

ジャーキーの匂いで直ぐに精神を覚醒させ、フェイトの手から差し出された肉を、

美味しそうに早速頬張る。

満足げな表情を横目に、純騎達はエイミィの買ってきた物を冷蔵庫へ仕舞って行く。

買い物は主に野菜類に始まり、コーラや携帯できる栄養調整食品の箱等々。

「艦長、もう本局に出かけちゃった？」

「うん、アースラの武装追加が済んだから、試験航行だって・・・アレックス達と」

「『武装』って言うと・・・『アルカンシェル』かぁ・・・あんな物騒な物、最後まで使わずに済むと良いんだけど・・・」

エイミィに大きなカボチャを渡されながら、フェイトが答える。

なのははその後ろで冷蔵庫に物を詰め、純騎もその手伝いをしながら話に耳を向ける。

「クロノ君もいないですし・・・戻るまではエイミィさんが指揮代行だそうですよ？」

「ん～・・・それもまた物騒な・・・・・・」

フェイトの持ったカボチャをペチペチと叩きながら、エイミィがぼやく。

実際、今いるメンバーの中で一番判断能力及び統率能力に秀でているのは、

戦い慣れしている純騎を除けばエイミィただ一人。

「フェイト、それ重いだろ？　俺がやる」

「えっ？　いいよっ大丈夫だから」

と、ここで純騎がフェイトの持つカボチャを代わりに持つべく手を差し伸べる。

フェイトはさっきの照れ臭さが抜け切らず、後ろへ後退りする。

が、それはフェイトにとっては余り良い結果を生む行動でなかった。

後ろへ下がった為、多少カボチャを持つ手の位置が変わった。

そして。

「ヒャっ！！？／／／／／／」

「あっ・・・・・・わりぃ」

純騎の差し出した手とフェイトの手が、偶然にも重なった。

それだけなら、まだ良い。

フェイトが悲鳴を上げたその直後。

ドムッっっ！

「いっだあっっっ！？！？！！」

ビックリした拍子にフェイトの両手に支えられたカボチャが、重力に遵(したが)って落下。

近寄っていた純騎の右足目掛け、割と高い位置から直撃した。

「〜〜〜〜〜〜〜〜〜っっっっ！！！！！」

「ごっごめんなさいそのっだっ大丈夫っ！？」

「？？？」

「おや〜？　おやおやぁ〜？　どうしたの二人とも〜？」

カボチャのクリーンヒットを喰らった右足を押さえ、片足立ちで悶絶する純騎。

その横で落としたカボチャを拾い上げてアタフタと慌てふためくフェイト。

なのはは訳が分からない、と言った具合に頭の上に『？？？』マークを浮かべ、

傍で見ていたエイミィは、何やら何かを察した様子でニヤニヤしていた。

「――――で、『アルカンシェル』って何なんだよ」

氷の入ったビニールを足に当て、やっと痛みが引いた所で純騎が拗ねた様に訊ねる。

その純騎の直ぐ傍には、笑いを堪えながら心配をするという何とも器用な事をやってのけている子犬アルフと、やっと落ち着きを取り戻したフェイトがいる。

勿論、フェイトの隣には冷蔵庫に物を入れ終えたなのはもいる。

「ん～・・・端的に言い表すなら『大魔力砲撃』なんだけど・・・」

エイミィがアースラの新武装『アルカンシェル』についての説明をしようと口を

開きかけた、その時。

Ｂｅｅｅｅ！！！　Ｂｅｅｅｅ！！！　Ｂｅｅｅｅ！！！　Ｂｅｅｅｅ！！！

「なっ・・・・・・・！？」

「警報音・・・・・・って事は・・・・・・」

「まさか・・・・！！」

突如部屋に鳴り響く、けたたましい警報音。

宙に現れたモニターに『Ｅｍｅｒｇｅｎｃｙ』の文字が躍る。

何処かに、『ヴィータ』達が現れた事を、物語っていた。

「文化レベル０・・・人間の住んでいない砂漠の世界だね・・・・・・」

「十中八九『蒐集』目的だろうな・・・」

至急モニタールームへと足を運んだエイミィ達。

目の前のモニターには、髪を後ろで束ねた剣士『シグナム』と犬の耳を持った屈強な男が映し出されている。

「結界を張れる局員の集合まで最速で４５分・・・ん～・・・不味いなぁ～・・・」

「・・・・・・・・・・・・・」

忙(せわ)しなく両手を動かしながら、エイミィが独り言を呟く。

その後ろではフェイトが、モニターに映ったシグナムを凝視している。

フェイトの腕に抱えられたアルフも、筋骨隆々な男をじっと見つめている。

――やがて、フェイトとアルフが目を合わせ、頷き合った。

「エイミィ・・・・・・私が行く」

「――私もだ」

「・・・・・・うんっお願い！！」

少し考え、エイミィがフェイト達にゴーサインを出す。

「フェイト・・・・・・気をつけて行けよ」

「うん・・・ありがと純騎くん／／／」

準備をしに部屋へと戻るフェイトを見送り、純騎は再びモニターに視線を戻す。

（そういやぁフェイトとアルフは・・・あの二人との再戦を望んでたな）

以前の戦いの決着を着けたいのだろう。

静かな闘志を、二人の目の光から伺えた。

「なのはちゃんと純騎くんはバックス、ここで待機してて」

「はいっ」

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・？　純騎くん？」

「・・・え、あぁ・・・分かった」

少し遅れて純騎が返事を返す。

（二人・・・・・・やっぱり足りないな）

以前の戦いの時、連中は４人いたはずだ。

あの真っ赤なチビの『ヴィータ』、紫色の魔力光の女剣士『シグナム』。

でかくてゴツい図体の男に・・・・・・あれもう一人いたよな？、まぁいいか。

それに、モニターの二人のどちらも闇の書を持っていない。

無闇矢鱈（むやみやたら）と姿を現せば、管理局に察知される危険性も高まる筈。

若しくは、そのリスクを犯してでも実行すべき何かがあるという事になる。

（・・・っ・・・・・・そういう事か）

◇
◇

ヴオオオオオオオオ・・・・・・・

「・・・・・・ヴィータが手こずる訳だな・・・！」

目をギラつかせ、外皮と甲殻の間から体液を洩らす赤龍。

肩で息をしながらも、赤龍に剣を構えるシグナムの姿がそこにあった。

硬い甲殻に刃を阻まれ、標的にダメージが通らずにいた。

（ある程度弱らせなければ『蒐集』を行う事が出来ない・・・！！）

先ほど使用したカートリッジをレヴァンティンから排出。

ガシュッと音を立て、赤い色をした使用済みの薬莢が砂漠の黄色に吸い込まれるように落下していく。

「厄介な相手だな・・・」

空いている左手には、手持ちの残りのカートリッジ二個が握られている。

だが、相手はカートリッジの装填させる暇を与えてはくれない様だ。

グオオオオオオッッッ！！！！

「っなっっ！！？」

突如砂を巻き上げ、シグナムの背後から赤龍の巨大な尾が現れる。尾の先端近くの鉤爪の様な突起を持った触手がシグナムを捕らえ、矢継ぎ早に現れた何本もの触手がシグナムの身体を雁字搦めに拘束し、ギリギリと締め上げてゆく。

「がっぐぅあっっ！！！」

徐々に締め上げられ、シグナムの身体が不自然な方向へと曲がりだ

す。

ミシミシと四肢の関節が悲鳴を上げ、激痛でシグナムの表情が苦悶なモノへと変わり出す。

このまま、胴体の中央から捻じ切られるのか。

〈――Ｔｈｕｎｄｅｒ　ｂｌａｄｅ！！〉

と、いきなりの眩い光とスパーク音で、目が眩む。

真っ青な空を切り裂くように、数本の雷が赤龍の長い胴に突き刺さる。

否、雷ではなく、魔力で練られた雷を纏った刃だ。

「――ブレイクっ！！」

凛とした、強い意志を宿した少女の声。

彼女の合図と共に、突き刺さった魔力刃が苛烈な音を立ててスパークする。

魔力刃から発せられた雷電が、赤龍の胴体を輪切りに裁断した。

理性を持たない獣独特の奇声と轟音を響かせ、切断された胴の数々と首が砂漠の砂の上に落下していく。

もう二度と、この赤龍が鎌首を擡げて襲ってくることは無くなった――――。

《――なぁにやってるのフェイトちゃん！！》

先ほどサンダーブレイドで赤龍を成敗したフェイトに、どう言う訳かエイミィからの怒号が炸裂する。

《助けてどーすんのーっ！　捕まえるんだよ～っ！！》

「あっ・・・その・・・・・・ゴメンなさいっつい・・・」

《ん～まぁ・・・いいんじゃないか？　もし喰われでもしたら事情聴取が出来なくなるし》

《うぅっ・・・・・・それもそうだね》

と、エイミィの傍にいるであろう純騎が、ここぞとばかりに助け舟を出す。

もっともらしいが信憑性がある分、エイミィも渋々納得してくれたようだった。

「・・・・・・・・・礼は言わんぞ、テスタロッサ」

さっきまで赤龍に絞め殺されかけていたシグナムが、まだ身体に残る痛みに
顔を顰めながらフェイトに話しかけてくる。

「・・・お邪魔でしたか？」

「・・・・・・蒐集対象を潰されてしまったからな」

鋭い眼光をフェイトに向けつつ、残り二発のカートリッジを自身の刀剣型デバイスに装填するシグナム。

――――相手も只では捕まってくれはしない、そういう事だ。

「まぁ・・・悪い人の邪魔が私の任務ですし・・・」

「・・・そうだな・・・・・・悪人だったな、私は・・・・・・」

そう言って自身を卑下する彼女の手にはカートリッジを装填され、
廃熱を完了して蒸気を噴出す一振りの剣が握られる。
シグナムの鋭い眼光がまた一層と鋭くなり、フェイトを見据える。

程なく金色と紫紺の光がぶつかり合い、戦いの火蓋が落とされた。

～Ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅ～

第１２話　†激突†

「うはぁ・・・・・・フェイトもあの剣士も速ぇな」

モニターに映る二人の、目にも止まらぬ闘いを眺める純騎。
隣の座椅子とその傍には、呆気に取られた表情を浮かべるなのはとエイミィの姿が。
それもそのはず、今の二人にはモニターの中を動き回るフェイト達の姿は、
恐らく残像が幽かにチラついて見える程度であろう。

Biiiii!!!　Biiiii!!

「なっ・・・・・・もう一箇所!?」

「やっぱりか・・・・・・」

耳に喧しく響く、二度目の警報音。

真っ赤な警告画面と共に映し出されたのは、純騎が先の戦いで相対した赤衣の少女――ヴィータ。

モニターに映る彼女の小脇には、自身の得物と共に、剣十字を冠した厚い魔道書――闇の書が抱えられていた。

「本命はこっち・・・!?　なのはちゃん!!」

「はいっ！！」

「・・・俺は待機でいいのか？」

「うん、念のために此処で待機しててね」

「そうか・・・・・・なのは」

出動準備の為にモニタールームを出て行こうとするなのはを呼び止める。

「・・・・・・気をつけてけよ」

「・・・うんっ！！」

その言葉に、自然と頬が綻び、さっきまで感じていた緊張が空気に溶けてゆく。

「頑張れよ」と激を飛ばすでもなく、「絶対に勝てよ」と言われるでもなく、

ただ自身の身をを案じてかけられた、短い一言。

――ただそれだけの言葉なのに、他のどんな言葉よりも暖かく感じるのは、何故だろう。

ふとした疑問を頭から振り払い、ヴィータの蒐集を制止すべく、なのはは件の世界へと跳んでいった。

「・・・・・・行った、か」

転移魔法陣の光の向こうへなのはの姿が消えたのを見届けると、フッと純騎は呟く。

彼自身も、ヴィータとの最初の邂逅で敗北を帰したなのはが心配だったのだろうが、
先ほど彼女が見せた笑顔で、その心配は杞憂のモノであるという確信に変わった。

「なのはちゃんの事、心配してたの？」

「そりゃあ当然だろ、あいつ最初はボロッボロに負けて意気消沈してたし・・・それに」

「それに？」

深呼吸とまではいかないまでも、一呼吸置いて、それから純騎が訳を話す。

「それに・・・その・・・あいつ、辛いとかそーゆうのを全部背負(しょ)い込んでる
感じがするから・・・何時か怪我して帰ってくるんじゃねぇかって」

「・・・ふ～ん♪」

『なーんか分かっちゃった～♪』的な表情でニヤニヤし始めるエイミィに、

言い得ぬ怖さを感じた純騎。

身震いしながら、後ずさる。

こういった話にエイミィが人並み以上に興味を示すというのは、さっきの

台所でのフェイトとの一悶着でよ～く理解できた純騎なワケで。

（・・・この手の話題をエイミィに振るのは、墓穴掘ってんのと同じだな・・・）

割と切迫した状況の中、『真の敵は本能寺（身内）に在り』と心の片隅に刻み込む、純騎であった。

◆
◆

ガスッ！！　ガシャアッ！！！

「っぐ・・・・！！」

「っ・・・・く！！」

拳の交わる鈍い音が、曇天の宙に低く響く。

アルフとザフィーラ、使い魔と守護獣という似通った立場の両者の戦いは、

完全なる膠着状態が続いていた。

速さで勝るアルフと、パワーでは優位に立っているザフィーラ。
アルフの主であるフェイトと、同じく守護騎士の一員であるシグナム。
全くの対極同士の闘いともなれば、当然の事だ。

「アンタも使い魔・・・守護獣ならさぁっ！！」

互いに動きを止め、相手の出方を伺う合間に、アルフが激しい憤りを感じさせる悲痛な声を上げる。

――自分も嘗て、同じ様な立場だった。
――自らの親の為に間違いを犯し、危うく全てを失いかけた主がいた。
――そんな主を、止められなかった。
――叱咤されて傷を負った彼女を、私はその時守れなかった。

「――ご主人様の間違いを正そうとしなくて良いのかよ！！」

だからこそ、似た境遇のコイツには、同じ過ちをして欲しくない。

敵同士でありながらも、そんな感情を込めて激昂する。

――だが。

「・・・闇の書の蒐集は我等の意思、・・・我等の主は我等の蒐集については何もご存じない」

「何だって・・・！！　そりゃあ一体・・・！？」

『一連の蒐集は主の命ではなく、自分達の意思で行っている』

アルフの眼前に浮遊する、この屈強な男は、確かにそう言った。

――――無表情のまま、自身の右手にギリギリと拳を握りながら。

「主の為であれば血に染まる事も厭わず・・・我と同じ守護の獣よ、お前もまたそうではないのか・・・！！」

「っ！！」

『これ以上の言葉は不要』と言わんとばかりに、ザフィーラは両の拳を構える。

確かに、本質的な事を挙げれば『使い魔』も『守護獣』もそう大差は無い。

目の前のザフィーラの言う事も、間違っているとは言えない。

そうなのだが・・・。

「そうだよ・・・私もフェイトの為なら何だってする・・・事実、してきたさ・・・」

「・・・・・・・・・・」

「けど・・・だけどさぁっ！！」

自嘲染みた調子から一転、再び悲痛な訴えへと変わる。

だが、自分も同じ境遇。

故に、これ以上の言葉は出てこない。

出したくても、出せない。

・・・・・だったら、だとするなら。

己の拳で、分からせるしかない。

「・・・っく・・・！！」

喉の所まで出かかった言葉を呑み込み、拳を構える。

最早意見の食い違いは愚か、物理的な衝突さえも避けられないモノへと、変わっていた。

「・・・・・・ん、あれ？」

「・・・ん、どうした・・・？」

なのはとフェイト、それにアルフ。

三人の闘いをモニターで確認していたエイミィが、突如訝しげに眉を顰(ひそ)めた。

うつらうつらと転寝(うたた)に興じていた純騎が顔を上げると。

「・・・ん？　なんじゃこら？」

ついさっきまで（時間的には割と長い時間が経っているのだが、純騎は寝ていた）、

三人とヴォルケンリッター達が戦っている様子が映し出されていたはずのモニターに、

いつの間にか砂嵐が映り込んで戦闘が見えなくなっていた。

更になのは達とヴォルケン達の現在位置を示すレーダーも、謎のシステムダウンに陥っていた。

「これは・・・管理局システムへのクラッキング！？
そんな・・・セキュリティの突破されたのにすら気付かないなんて・・・！？」

エイミィにとっても始めての経験らしく、珍しく慌て始める。

〈・・・・・・！！　アブソーブデバイスの反応を感知しました！！
しかも・・・なのはさんのいる世界と同じところです！！〉

「・・・・・・・・・・」

ネロからの知らせに、純騎は今一度頭を廻らす。

アブソーブデバイスの回収が、彼が自身に課した使命。

・・・だが、今この瞬間にも、なのは達が危険な目にあっているかも知れない。

以前の彼なら、アブソーブデバイスを優先したであろう。

が、今は違う。

「・・・フェイトの方はアルフが行ってくれる事を願おう、俺はなのはのトコに行く」

〈はいっマスターの仰せのままにっ！！〉

人型形態からデバイス形態へと変化したネロが、頼もしく返事を返す。

「でも・・・転送装置も使えないんじゃ・・・」

〈Aデバイスのある地点までなら、私が責任を持って転送しますっ！〉

「・・・頼むから、最初の時みたいなのは勘弁な・・・、
・・・エイミィはリンディさんと通信が出来るか試してくれ、もし出来たら救援を頼む」

自信満々とでも言うように純騎の周りを旋回するネロに、やや不安気に注意を促す。

そしてエイミィには「出来ることを探してそれをやれ」とハッパをかける。

程無くして、ネロの描いた魔法陣の光に包まれ、なのはの救援とAデバイスの回収の為、

異世界へと飛び出していった。

「ディバイィィィン――――」

澄み渡った空に、生い茂る木々。

そんな異世界で、なのははヴィータにレイジングハートの照準を合わせる。

リンカーコアを介して生まれた魔力が環状魔法陣の中央へと集約され、

レイジングハートの照準（サイト）は、その中央にしっかりとヴィータの姿を捉えている。

そして。

「――――バスタアアアァァアアアア！！！！」

臨界までチャージされた桃色の魔力が、一筋の奔流となって標的へ押し寄せる。

高町なのはが得意とする、超長距離（ロングレンジ）砲撃。

それが爆音を響かせ、目標であったヴィータへ吸い込まれるようにヒットする。

〈Ｉｔ' ｓ　ａ　ｄｉｒｅｃｔ　ｈｉｔ〉（直撃ですね）

「・・・ちょっとやり過ぎたかな？」

〈Ｄｏｎ' ｔ　ｗｏｒｒｙ〉（いいんじゃないでしょうか）

少し心配そうに濛々とヴィータのいた方に広がる黒煙を見やるなのはに、

砲撃で生じた熱を排出しながらレイジングハートが、どこか素っ気

無く応答する。

・・・・・・それも当然だろう。

レイジングハートを大破させたのは他ならないヴィータなのだから。

「・・・・・・・！？」

ヴィータの浮かんでいた方の煙が晴れ、向こう側が微かに見えてくる。

そこには背の高い影ともう一つ。

大きな帽子を被った少女のシルエットが、一つ。

砲撃がきっちりヒットしていれば、確実に沈んでいたであろう姿が、浮かんでいた。

良く見ると、仮面を被った無傷の男がヴィータの手前に立ち、防御

魔法を張っている。

どうやらなのはの砲撃は、男の魔法で呆気なく防がれていたようだ。

――そしてヴィータは悠々と転移魔法陣を展開、直ぐにこの世界から離脱してしまった。

「っディバイィィィィン――――」

男を狙い、レイジングハートを構えて再び砲撃体勢を取る、が。

――不意に、男が懐から一枚のカードを取り出し、手を翳した。

〈Ｍａｓｔｅｒ！！！〉

「っバインド！？」

突如としてなのはの周りに出現する、数凡（およ）そ数十個にも及ぶ魔力弾。

さらになのはの身体に、三重にも亘って捲かれるループバインド。

バインドから逃れようと身を捩り、バインド破壊の魔法を行使するも、どうしても解けない。

「（やられるっ！？）」

全ての魔力弾の弾頭がなのはを捕捉し、その一点に殺到する。

恐怖で身を強張らせ、目を瞑るなのは。

だが。

「（・・・・・・・・・？）」

なのはの危惧していた痛みや、着弾時の衝撃といったモノが一切しない。

ただ、心なしか周囲の空気が冷たい。

目を開いてみると、自分の着ていたバリアジャケットが――――凍り付いていた。

そして目の前には、見た事のある後姿があった。

「うはぁ・・・・・・やっぱまだ上手く制御すんのは無理だったか・・・」

〈でも、Aデバイスで生成された魔力弾を最小限の力で防御するんでしたら、
これ以外はあまり方法がないですよ？〉

「なのはを巻き添えにしてる時点で、『守る』って行為からは遠退いてるっての」

胸元を露わにしたベストに、ダメージジーンズの井出立ち。

身体に纏う冷たい冷気と、放たれる冷徹な視線。

それはなのは自身が実際に目にして、驚愕した姿。

「純騎くん・・・！！」

「ようなのは、助太刀しに来たぜ・・・・・・ってあのおチビがいねぇな」

極々ナチュラルに声をかけてくる純騎だが、胸中は怒りで滾っていた。

――――なのはを怯えさせぬ為に、敢えて表情には出していないが。

〈Aデバイスの反応も、この世界からは消えていますね・・・反応の追跡はしてますけど〉

「よし・・・・・・俺はAデバイスを追うから、なのははエイミィとリンディさんを待ってくれ」

「え、でもどうして・・・？」

「ちょっとした緊急事態なんだが・・・まぁ後で話すわ、じゃあまた後でな」

終始怒りを顔に出さず、それだけ言ってネロに転移魔法陣を展開させる。

「・・・あ、あのチビには勝てたか？」

「え？　・・・あ・・・うん、一応・・・」

今し方思い出したような問いかけに、なのはが曖昧な返事を返す。

「そうか・・・なのは」

「へ・・・・・・うにゃ！？」

突然頭に手の感触を感じて妙な悲鳴をあげる。

バリアジャケットを纏った状態の純騎は、子供へと変わる前の青年

の姿へと戻る。

その純騎の、小学４年生には大きく感じる手がなのはの頭をワシャワシャと撫でたのだ。

「さてっと・・・そんじゃあアイツを――――」

なのはの頭から手を除けると、足元に広がった魔法陣が眩く光りだす。

Ａデバイスを所持した敵の許への転送準備が、整ったようだ。

「――打チのめしに行きますかぁっ！！！！」

有らん限りの怒気を最後の一言に込め、光の中へと姿が消えてゆく。

その場には、ちょっと残念そうな顔をして宙に浮かぶ、なのはの姿だけが残った。

◇◇

「・・・・・・邪魔が入ったようだが、まぁいい」

先ほどいた世界から遥かに離れた異世界の宙に、白地に青の服を着た仮面の男はいた。

表情や顔付きこそ見えないものの、声色からほくそ笑んでいるのが良く分かる。

上手く追っ手を捲いた様で、あとは自分も転移魔法陣で戻れば無事に課せられた
役目を遂行したと言えよう。

本当にこれで終わりならば、だが。

「――――やっと追いついたぜ」

「！！？」

不意に目の前の足元に魔法陣が現れ、若い声が鼓膜に響く。

男が飛び退いてカード――Aデバイス――を構えると、魔法陣の表面を突き破って

一人の人影が姿を現す。

それは男がつい最近相対し、片割れの持っていたAデバイスを奪取した相手。

「Aデバイス（エグゼキューター）使役者・・・・・・・」

「？　何じゃそれ、俺の事？」

「・・・お前のAデバイス、渡して貰う」

「ハッ、誰がお面男にコイツをやるかよ・・・それに――――」

右手に握った剣を払い、仮面の男に怒りの篭った一瞥を投げかける。
左腕の篭手の狼の顔が、殺気に滾った真っ赤な目をギラつかせる。
彼の――純騎の持つ物全てが、目の前の男に敵意と殺意を向けている。

「――――それは、『あの人』の作ったモンだ！！！！」

怒号と共に仮面の男へと肉薄し、激しい剣戟を男に浴びせにかかる。
男の方も必死に防御魔法を手の平に展開して苛烈な攻撃を防ぐが、
速く且つ重い一撃を受ける毎に展開された障壁の全体に皹（ひび）が奔る。

「ぐぅっっ！！？」

「オオオオッッ！！」

「があっっ！？」

音を立てて砕けた障壁を見て驚愕する男に、純騎の剣が容赦無く牙を剥く。

柄頭で殴り、刃で切り裂き、圧倒する。

男が再び障壁を張る暇など、刹那の程にも与えられない。

〈Ｆｒｅｅｚｉｎｇ　ｅｆｆｅｃｔ！！〉

「オラァっ！！」

「なっがっっ！？？」

篭手から噴出した白い霧が男を包み、テレビの静止画を見ているかの様な、

片腕を前に突き出した姿勢で身体が凍りつく。

「ハアアアア・・・・・・・・・・！！」

男を遥か下に見下ろす高さまで身体を上昇させ、純騎は剣を胸の所で構える。

『冷たい』等と言う言葉では形容出来ないほどに冷徹な冷気が刀身から広がり、

両腕と両足がシャープな鎧を纏った様に厚い氷に覆われる。

「オオオオオオオオっ！！！」

飛行魔法の恩恵を失った純騎の身体が、前方向に回転しながら落下してゆく。

彼の仲間――――なのはに仇を為した、男を目掛けて。

バキィィィイン！！！！！

「ガァァァアアアッッッ！！！！？」

肩から腰にかけての、回転の際の遠心力の合わさった袈裟斬り。

光の尾を引きながら、凍り付けとなっていた男の体を、易々と撫で斬る。

「ぁぐあっ・・・・・・っまだだっ・・・・・・」

最早浮遊状態を維持するのにも、多量の精神力を投じなければならなくなる

程に男は消耗し切っている。

それでも自身のＡデバイスに手を翳(かざ)し、男は自らの手にあるＡデバ

イスを

目の前の純騎に渡そうとはしない。

――だが、その強硬姿勢を砕かんと、純騎は男に対し、最後の攻撃を仕掛ける。

「・・・っっ!!!」

純騎の握る剣と、左腕の篭手。

狼の顔を模したそれらの紅い眼が輝きを増すと、途端に男の背筋に恐ろしい程の悪寒が奔る。

だがそれは、決してその光る眼に怖気づいたと言う証ではなかった。

寧ろそれは、物理的に受けている感覚を感じ取っている証拠であっ

た。

「っなっがっぁ・・・・・・」

よく見ると、男の体が切り裂かれた部分から、全身を氷漬けにせんと瞬く間に氷が浸蝕していき、仕舞いに男がもがいた状態で氷柱の中へと閉ざされた。

もし仮面がなければ恐らく、恐怖で彩られ目を見開いた男の表情が見て取れただろう。

それに一瞥をくれてやり、

「――――砕け散れ、氷の彫像！！」

〈Ｂｉｔｉｎｇ　Ｅｎｄ！！！〉

背を向け、パチンと指を鳴らす。

ガシャァァァアン！！！

その合図を待っていたかの様に亀裂が奔り、氷柱が四散して男共々下へ落ちてゆく。

その跡には、山吹色の光を放ちながら宙に浮かぶ一枚のカードが。

〈Ｒｅｃａｐｔｕｒｅ．〉

純騎がカードに左手を翳すと、ネロの音声と共に魔法陣が展開。

カードは忽ち（たちま）純騎の方へ吸い寄せられ、魔法陣の中へと消えていった。

「これでやっと二枚目か・・・・・・」

ついさっきまで魔法陣を展開させていた左手を閉じたり開いたしながら、

ヴォルフのバリアジャケットを解除し、元来の黒衣へと戻る。

これで残りはあと7枚・・・・・・先はまだまだ長く続いていそうだ。

ふと眼下に目を向けると、男の姿が見えない。

目を凝らすと、相方であるもう一方の男に肩を支えられ、

魔法陣の光の中へ消えてゆく姿を見つけることが出来た。

〈追わなくていいんですか？〉

「Aデバイスも奪って、あれだけギッタギタにしてやったんだ・・・暫くは

出てこないだろ」

『アブソーブデバイスを持たない者は、自分にとって脅威の対象にはなり得ない』

彼の言葉の裏には、絶対の自信と自負の両方が滲み出ていた。

その後、エイミィから『フェイトがリンカーコアを吸収された』との連絡を受け、

純騎は手早く転送ポートへと撤収していった。

～Ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ～

第13話　†Injured the Lightning†（前書き）

仮面ライダーオーズにお熱です、黒衣ですｗｗ
格好良いですよね～タジャドルとプトティラ！！
これを読んでる方に仮面ライダー好きな同志がいるのを密かに期待しつつ、
今回のお話です。
ちょっと短いですけど、どうぞ！！

第13話　†Injured the Lightning†

「――フェイトの様子はどうだ？」

新装備を引っ提げた艦船『アースラ』への転送が済み、純騎はリンディの方を見据える。

かなり急いでいたのか、バリアジャケットさえ解除せずにリンディに詰め寄る。

「大丈夫、リンカーコアにダメージは受けているけど、休みを取れば直ぐに治るわ」

「そうか・・・・・・良かった」

リンディに座るよう促され、安堵の溜息をつきながら手近な椅子に

腰掛ける。
長いテーブルの周りには、気を失っているフェイトを除いた主要のメンバーが
神妙な面持ちで勢揃いしていた。

（・・・・・？　あれは誰だ??）

そんな中、一度も顔を見たことの無い、猫の耳が頭頂部から飛び出している
女性がいることに、純騎は気付いた。
だが、リンディの表情がいつもの『仕事時の表情』へと変わったので、
その女性に関しての考察を取り止めざるを得なかった。

「私の時と同じ様に・・・闇の書に吸収されちゃったんですね・・・」

なのはの呟きに、猫の耳を持つ女性を含む皆が頷く。

なのはの時と同じなら、暫くは魔法の類は一切使えない事になる。

そしてそれは、また一歩闇の書が完成へと近づいたという事でもある。

「アースラが稼働中で良かった、なのはの時以上に救援が早かったから・・・」

「だね・・・」

「そうだな」と純騎も同意する。

それと同時に、管理局システムがダウンしなかったらもっと早く助けに行けたんじゃないかと思い、心の内で歯噛みする。

「（そういやネロ、さっき奪取（スナッチ）したAデバイスだけど・・・）」

エイミィが自身のバックアップの不行き届きを詫びる声と、アルフが砂漠世界に
フェイトの救援をしに行った時の状況説明に口を出しながら、念話でネロを呼ぶ。

「（既に解析は完了してます、名前は『アポロン』・・・『火』属性のデバイスですね）」

「（手に入れたのは3つ、残るはあと7つか・・・まだまだ先は長いな）」

だが、幸先の良さも同時に感じていた。
今まではネロだけだったのが、ここへ来て一気に2つのデバイスを回収出来ている。

独りで探していた頃に比べれば、目標へと近づく速度が段違いに早い。

（・・・フェイトの所に、見舞いに行こう）

「――――では予定より少し早いですが、これより司令部をアースラに戻します、
各員は所定の位置に！！」

フェイトへの見舞いの事や、アルフとエイミィの話に対する考察等を纏めている内に、

リンディからの細かい話は済んだようだ。

ぞろぞろと局の制服を着た連中が、アースラ内の自分の持ち場へと散っていく。

早速、リンディに見舞いの話を持ちかけてみる事にした。

「フェイトさんのお見舞い？　気持ちは嬉しいけど・・・もう時間も遅いし・・・」

「少しだけでいい、アルフとなのは、あとクロノを借りていって構いませんか？」

「何で僕もなんだ？　これから忙し」

「お前はフェイトのお兄ちゃんだろ？」

「なっなななっ！！？」

『お兄ちゃん』の部分だけを強調して言われ、途端に顔を真っ赤にして慌てだす。

純騎は以前、片付けの手伝いをしに行った時に偶々遭遇してしまったのだ。

・・・クロノがフェイトに『お兄ちゃん』と言われて何時になく取り乱していた時の事を。

「オラオラ早くしねぇと時間なくなるぞ～」

「ちょっオイ引っ張るなっ！？」

「アルフ、なのは、行こうぜ～」

クロノの首根っこを掴んで、ずるずると地面を引き摺る。
セットアップした今の状態の純騎だから出来るのであって、普段ならまず無理だ。
そのあとに苦笑しながらアルフ達が続き、一同はフェイトの病室へと足を運んだ。

◇◇

俺等の心配は何処へやら、という感じだった。
病室に誂えられたベッドでは、フェイトが穏やかな寝顔で横になっていた。
リンディさんの言っていた通り、リンカーコアにダメージを負っているが大事には
至っておらず、あと数時間もすれば目を覚ますそうだ。

――当然、コアが完治するまで一切の魔法を使えないという点は、なのはの時と同じなのだが。

「ったく・・・気持ち良さそうな寝顔しやがって・・・」

バリアジャケットを解除して子供の姿へ戻り、
寝ているフェイトの髪を、ちょっとだけ弄んでみる。
照明の光を受けてキラキラと輝く金髪が、目に眩しい。
サラサラと手触りの良いフェイトの髪を、少しの間だけ弄っていた。

「・・・さてと、アルフ、俺達はもう行くわ、おやすみ」

「ああ、おやすみ～」

「また明日ね～」

使い魔であるアルフにフェイトを任せ、フェレットモードのユーノを連れ、
なのはと一緒に帰路へ着く・・・・・・すっかり遅くなっちまったな。

「・・・・・・そういやぁ、さっきの会議ん時に、見慣れない顔の奴がいたんだけど・・・誰だ？」

「え、どの人の事？」

「いや・・・猫の耳をした、女の人」

「リーゼロッテさんだよ、姉妹でグレアム提督の使い魔なんだって」

「ふーん・・・・・・（姉妹って事は・・・二人・・・・・・か）」

二人。

そういや確か、俺達を襲ってきたあの仮面の男達も二人だったな・・・・・・。

「・・・・・・まさかな・・・思い過ごしだろ」

「？　どうしたの純騎？」

「ん・・・何でもねぇユーノ」

怪訝そうな顔で訊ねてくるユーノと、頭に『？』マークを浮かべていそうな表情のなのはに、

『さっさと帰ろうぜ』と声をかけ、先頭を切って歩き出す。

（・・・・・・明日、クロノ辺りにでも相談してみっか、お堅い奴だけど頭回る方だしな）

～翌日～

「・・・あ、おはようなのは、純騎くん」

「おはよ～フェイトちゃんっ！」

「はよ～」

後日。

もう登校出来るほどに回復したのか、様子を見に立ち寄った俺達二人を、

マンションの前でフェイトが待っていた。

「・・・・・身体はもう平気なのか？」

学校指定のコートをしっかり着込み、三人並んでスクールバスの停留所
へ向かう道中で、気遣わしげに声をかける。
なのはも『そうそう、大丈夫フェイトちゃん？』と声をかける。

「うん、魔法が使えないのはちょっと不安だけど、身体の方はもうすっかり」
「そうか・・・つー事は、なのはん時と同じか・・・・・っとと」

話を続けようとしたが、既にバス停に到着してしまったので、
慌てて念話に切り替えて話を続ける。

「（当面私達は呼び出しがあるまで、こっちで静かに暮らしててって）」
「（出動待ち・・・みたいな感じかな）」

「（だろうな・・・俺達が出られない分とかはどうなるんだろな）」

嘱託魔道士二人に加え、未知数の力を持った純騎の抜けた穴を埋めるのは、容易ではない筈。

フェイトのしてくれた話では武装局員を増援して、ヴィータ一味や仮面の男達の

追跡調査をメインにしていく、という事で事なきを得たらしい。

「（あそうだフェイト、クロノにメールを送っといてくれるか、放課後に局に寄るって）」

「（良いけど・・・・・・どうしたの突然？）」

「（ん～ちょっとな、アイツの方が話を分かってくれそうだから）」

「（珍しいね～、純騎くんからクロノ君に『話』なんて）」

「（そうか？）」

「（そうだよ～）」

純騎一同、他の人からは無言で目配せしてるだけに見えるが、
その実念話でペチャクチャと話に興じているとは誰にも見えないだろう・・・。

◇◇

「・・・・・・お見舞い？」

机に鞄をドサッと放り、中から教科書だとかを準備していると、
『今度はやてちゃんの所にお見舞いに行かない？』と、アリサとすずかに誘われた。
無論、なのはとフェイトも一緒に、だ。

「誰なんだ？　その『はやてちゃん』ってのは」
「私が図書館で会った女の子なんだけど・・・」
と、普段はアリサが説明を買って出る雰囲気の中、意外にもすずかがその『はやてちゃん』とやらの説明をし出した。
・・・まぁ確かにすずかならまだしも、アリサに『図書館』は似合わないよな～。

「・・・純騎、アンタ私に失礼なこと考えてたでしょ？（ギロリ」
「（ゾクゥっ！！）いや、何も考えてないけど？」
「そう、ならいいんだけど・・・って言うか、すずかの話聞いてた？」
「当然、入院してるその『はやてちゃん』の所にお見舞いに行こうって話だろ？」
「うん、よろしい♪」

『ちゃんと話を聞いているようで感心』といった感じの表情のアリサ。

・・・・・・最近どうもアリサの勘繰りが鋭くなってきてんだよな・・・。

・・・近い内に『魔法』の事とか露見したりしないよな・・・？

「これと言って用事もないし、二人の頼みだし、何より断るような理由も無し」

「それじゃあ・・・！」

「何時行くかはもう決めてんのか？」

「一応・・・今日の放課後に行く予定なんだけど・・・」

（・・・・・・・・・・え？）

あれ、クロノん所行く予定と丸被りじゃねぇか・・・いや、待てよ・・・？

「（フェイト、クロノに『待ち合わせの時間より遅くなるかも』って打っといてくれ）」

「（うん、分かった）」

これなら『はやてちゃん』とやらの見舞いとクロノん所に行く予定は被らない。

万事オッケー、オールオッケーだ。

「あ、じゃあこれ持って写メ撮るから、こっちこっち」

「えっマジで？　ってアリサ引っ張んな自分で行くから！！」

アリサに首根っこを掴まれ、教室の後ろの方へ移動させられる。

・・・・・・似たような事をクロノにやったよな、俺。

クラスメイトの一人にカメラを頼み、『早く良くなって』と書かれた横断幕を手に、

とっとと写真を撮ってしまうこととなった・・・ぶっちゃけ授業前だしな。

・・・・・・俺が『運命』を呪ったのは、数年後なのはの身に降り

掛かる

事故と合わせても、その二回だけだ。

すずかの友達『八神はやて』との出逢いが、今の状況を複雑且つ混迷化していくのを、

俺はこの時知らなかったんだ。

～Ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ～

特報 “ＳｔｒｉｋｅｒＳ，ＳＡＧＡ” 予告（前書き）

映画で言う予告編みたいな物です。
軽～い気持ちで御覧頂ければ幸いです、これで決まっている訳ではないのでｗｗ

特報 “StrikerS，SAGA” 予告

本当は、ずっと前から分かっていた。

『俺』と『あいつ等』の運命は、交わるモノでは無いという事を。

「よぉ、久しぶりだなのはっ！！」

「もしかして・・・・・・純騎くん！？」

「純騎くん・・・・・・なの？」

嘗ての仲間達との再会。

「筋は良いけど、脇が甘いな」

「っくぅ・・・ぉぉおおおお！！！」

小さな『原石』達との出会い。

「――デュアル・セットアップ！！」

〈Ｃｈａｎｇｅ，ＡＬＰＨＡ　Ｆｏｒｍ！！〉

解放された、真の力。

「さぁ御覧あれ・・・虚(ホロウ)デバイスの力をっ！！！！」

「博士の研究を盗みやがって・・・・・・許さねぇぞスカリエッティ！！！」

渦巻く闇、立ち塞がる陰。

止め処ない気持ち、擦れ違う思い。

「私・・・・・・純騎の事が・・・っ！！」

「――すまない、お前の気持ちに・・・応えてやれないんだよ、俺は・・・・・・！！」

十のＡデバイスが集い、取り戻された『究極』の力。

〈駄目ですマスターっ！！　この力を使えば彼方は・・・！！〉

代償なんて関係無い。

「ガキん頃の・・・リィンフォースの言葉の意味が、やっと分かった・・・」

俺は『そうある事』を望んだ、自分の意思で、覚悟を以って選んだんだ。

だから、俺は・・・・・・・・・・。

「・・・オールデバイス・セットアップ」

〈Ｃｈａｎｇｅ，ΩＭＥＧＡ　Ｆｏｒｍ！！！〉

ただ、戦う。

愛する人の、良き未来を築く為に。

「嫌だよ・・・純騎の事忘れたくなんかないよ・・・っ！！」

魔法少女リリカルなのは　†ＴＨＥ　ＥＸＥＣＵＴＥＲ'ｓ　ＳＡＧＡ†　“ＳｔｒｉｋｅｒＳ，ＳＡＧＡ”

・・・・・・俺の『宿命』は、此処で完結する。

第１４話　†『はやて』†

『お邪魔しまーす』

「あっ皆いらっしゃーい！！」

病室のドアをくぐると、目の前にベッドから半身を起こした状態の女の子が、

にこやかに出迎えてくれた。

すずかの話ではかなり重い病気を患っており、下半身が麻痺して動かないだとか。

その辺り、彼女はとてもそんな事など感じさせないくらいに明るい様子。

「えっと・・・なのはちゃんにアリサちゃん、それと純騎くん！」

「そうだよ～っ！」

「よろしくねはやてっ！」

順々に握手を交わす。

そして、俺に順番が回ってきた。

とりあえず、いきなり『はやて』だとか『はやてさん』では馴れ馴れしいと思い、

無難な呼び方で。

「ん・・・よろしくな『八神』さん」

「『はやて』でええよ～純騎くん！！」

「・・・そか、よろしくなはやて」

砕けた呼ばれ方の方が良かったらしく、直ぐに訂正されてしまった。

この子、かなり気さくな子のようだ。

はにかみながら、握手を交わす。

――キィィィィン・・・・・・・！

「・・・！？」

はやての手を握った瞬間、脳裏に何かが灯った様な感覚を覚える。

詳しい事はよく知らない、が、言える事が一つだけあった。

（この子・・・・・・・・・魔力持ちだ）

「ん？　どしたん純騎くん？」

「・・・んや、何でもない何でもない」

握っていたはやての手を慌てて離し、後ずさる。

どうもその動作が怪しまれたのか、なのはが念話で耳打ちをしてくる。

「（どうしたの純騎くん？）」

「（う・・・いやその・・・・・・何でもねぇ）」

「（？？？）」

今、なのはフェイトや『はやてが魔力持ちである事』を告げるべき

か、正直躊躇(ためら)われる。

・・・これは、この後クロノにでも相談しないといけないな。

テキトーに雑談をして、いざ帰路に着こうと椅子から腰を上げようとした、その時。

（・・・・・・・・・？　誰かいる・・・？）

喋るのに集中していたから気付くのが遅れたが、ドアの近くに誰かが立っている。

そしてあまつさえ、俺たちのいる病室の中の様子を見ている――――監視している。

空いたドアの隙間から、それらしき人影も見受けられる。

・・・・・・不思議なことに『悪意』や『意図した監視』といった、疑念を抱かせるに足るような雰囲気は感じなかったが。

「（まぁいいか・・・）んじゃはやて、俺はちょっと用事があるからこの辺で」

「そうなん？　またお話しよな～」

「ああ、じゃあまたな～」

皆より早々と席を立ち、病室を後にする。

・・・先ほど感じた視線の主は、既にいなくなっていたようだ。

「――――つー訳なんだが」

「ふむ・・・・・・」

はやての所から一旦帰宅し、夕食を食べてからフェイトの家へと向かった俺は、

偶然居合わせたクロノを誰もいないモニタールームへと引っ張り込み、
昼間にあった出来事を話した。

「その少女・・・『八神はやて』が魔力持ちだったんだな？」
「ああ、何故だか分からないが・・・一応調べといてくれ。
それから視線の件なんだが、またはやての所に寄る機会があるから、追々調べていくわ」
「ああ、よろしく頼む」
「それから、この前のあの仮面の男達なんだが・・・」
「ん？　達？」

件の男の事を複数形で呼んだ事に、クロノが怪訝そうな表情を浮かべた。
流石はクロノ、ここら辺は察しがいい。

「そう、あいつ等は二人組だ。Ａデバイスをめぐって戦った事がある」

「そうか・・・・・・それなら手の打ち様がありそうだ」

顎に手を据え、考えを廻らす様子のクロノ。

・・・・・・大体考えてることが、読めてきた気がする。

「あいつ等が来た時に、俺をぶつけるのか？」

「それもあるが・・・・・・僕も男達については調べてみる」

「分かった、よろしく頼むわ」

クロノにも、何処か思う所があるらしい様子だ。

モニタールームに半ば強引に引っ張り込んだ事を詫び、フェイトの家を後にする。

・・・まぁ、男達に関してはクロノに任せるとして、だ。

（こっちは『はやて』の方をどうにかしないとな・・・）

はやての病室にいた時に感じた、あの異質な視線についても調べていかなきゃならない。

あの視線は、こっちの様子を伺っているようにも感じたが・・・・・・。

「・・・・・・っ！」

・・・・・・そういう事か。

確かにはやてがそうであるなら、連中が俺やなのは達を見張るのは至極当然の事。

『管理局の魔道士』二人と、Ａデバイスと言う得体の知れない力を秘めた『俺』。

両者を自身の『主』に近づけさせる事に、過敏にならないはずはない。

（・・・色々と、混迷化してきたな）

まだ、そうだと分かった訳ではない。

・・・・・・だが、ある程度は覚悟しておく必要がありそうだ。

「・・・今度、アポ無しで乗り込んでみっか」

俺やなのは達が、『八神はやて』という少女に『管理局』という立場で対峙し、

その結果として、あのヴィータ達と再び火花を散らす、という事を。

「――ええ、一応大丈夫だったけど・・・」

とある家の、とあるリビング。

レモン色の髪をした女性が、何やら指輪に向かって話しかけている。

・・・否、彼女が持っているこの指輪は、単なるアクセサリーでは

ない。
そしてそれを持っている女性も、話し相手も、普通ではない。

「連れの一人・・・男の子が、こっちに気付いてるみたいなの・・・」

〈・・・それは大丈夫とは言わないぞ、シャマル〉

「うぅ・・・完璧な変装だったのに・・・でも、あの子は管理局とは関係なさそうだったから、一応大丈夫よ？」

自身の『主』の病室に、不意に現れた訪問者。
『管理局の魔道士』二人に、主に仕える者等『ヴォルケンリッター』達は困惑していた。
突然助けに割って入った、あの仮面の男達の事も気になるが、少なくとも敵ではない。
問題は、主の周りにまで寄ってきた管理局の魔道士達。
自分達にとっては『敵』でもあり、自分達の悲願を達成するのに邪

魔な『障害』の事である。

「それと・・・闇の書がはやてちゃんを浸食する速さが、段々上がってきてるの・・・」

〈・・・・・・・！！〉

「持って一月・・・ううん、多分もっと短いかも・・・」

〈・・・・・・分かった、ヴィータ達にも伝えておこう〉

「うん、お願いねシグナム」

「もう少し『蒐集』したら戻る」と言い残し、通信が切れる。

フウっと溜息をつき、ソファに腰を下ろす。

気苦労は尽きず、『障害』はまだ取り除かれてはいない。

それに、他にも気になる事は多々ある。

――――管理局側に付いている、多数のカード型デバイスを繰る青年の事だ。

（あの人は一体・・・？）

最初は管理局の魔道士二人と一緒に『主』を見舞いに来た、黒髪の少年を疑っていた。

が、彼からは魔力反応を欠片も感じなかった。

シロと考えるには判断材料が足りないが、魔力がないなら問題外だ。

（これからも見張っておかなくちゃ・・・！！）

主を死なせぬ為、幸せな日々を取り戻す為、今一度気を引き締める。

大事な主の命は、持って数週間。

それまでにコアを『蒐集』し、『闇の書』を完成させなければ――

――、

――――主は物言わぬ屍となる。

「（違うんだ・・・・・何かが違うんだ・・・！！）」

見渡す限りの大海原、灰色の雲に覆われ淀んだ色をした空の上に、『鉄槌の騎士』ヴィータは浮かぶ。

心身共に限界が近いのは、ボロボロになった騎士甲冑そのものが体現していた。

だが、手には自身の相棒（デバイス）がしっかりと握られ、闘争心も潰えていない。

にも関わらず、そんなヴィータは独り、異様な蟠（わだかま）りを胸の内に秘めていた。

「（こんなはずじゃないって・・・私の記憶が訴えかけてる・・・！！）」

こんなはずじゃない。

『コアの魔力を集め、闇の書のページを埋めれば、主の病を治せる』

治したい、主と――八神はやてと共に、平和な日々を送りたい。

そのために闘っている筈なのに、どうしても考えてしまう。

自分達がやっている事は、その逆なんじゃないか、と。

だが考える時間も、その蟠りの答えを探す時間も、まして手段を模索する時間さえも惜しい。

「はやてが笑わなくなったり・・・死んじゃったりしたら・・・嫌だもんなぁっ！！！」

〈Ｊａ．〉

鋼鉄の伯爵『グラーフアイゼン』が呼応する。

不意に海面から何か巨大な影が浮上してくる――――異様な面構えをした、蛸のようだ。

案の定、この蛸も魔力を――リンカーコアを有する魔法生物だ。

「・・・行くよ、アイゼンっっ！！！」

〈Ｅｘｐｌｏｓｉｏｎ！！〉

掲げられたグラーフアイゼンが『ガシュッ』という音を響かせる。

それと共に槌の部分が組み変わり、二周り以上巨大な鉄塊に置き換わる。

その巨大さと重量で敵を押し潰す『ギガントフォルム』。

「ギガントォ――――」

身の丈にあり余る程の槌を振り被り、蛸の眉間目掛け突っ込んでゆく。

憤りも、迷いも、全て胸の奥に押し込めて。
目の前の標的から魔力を奪う為。
そして願わくば、主の命を救う為。

「――――シュラァァァク！！！！」

その名の意味する『巨人の一撃』の如き、『思い』の込められた重い一撃。

もはや守護騎士達に、自分達の犯した過ちの重さに気付く暇など、与えられていなかった。

～To be continued～

第15話　†クリスマスイヴ†（前書き）

どうも～、後半部分になると文字数がどうしても偏る作者です（爆
執筆の為にアニメを見直してるんですが・・・お面男マジ自重しろ
（。Д。＃）
あと、アクセスポイントの不具合で一旦データ消えた・・・（涙）

第15話　†クリスマスイヴ†

「ええ・・・・・・ここまでは上手くいってるわ」

夕暮れ時、自身の指輪(デバイス)に連絡が入り、シャマルが洗物を一旦中断する。

連絡を寄越してきた相手は、別世界で仲間と共に『蒐集』作業に精を出している、

烈火の騎士こと『シグナム』だ。

「ああ・・・そっちに戻らなかった分、管理局もこちらを追い切れていないようだ、

・・・・・・主はやては、寂しがってはいないか？」

「私には一言も・・・・・・」

主が今、独りで病院のベッドに伏している原因は自分達『守護騎士』の大元となっている、

剣十字が描かれた『闇の書』の所為だ。

主の命を救う為とは言え、肝心の主を悲しませてしまっては、本末転倒だ。

『蒐集』作業で会いに行けない分、寂しがらせているのも、また事実だ。

「――――でもお友達は良く来てくれてるみたいなの・・・すずかちゃん達・・・」

「そうか・・・・・・」

そこでシャマルが表情を暗くし、声の調子を落とす。

その『お友達』『すずかちゃん達』の中には、管理局の魔道士であるあの二人も含まれている。

余りにも皮肉だ、目的を達するのに邪魔な『障害』が、よりによって自身の主の『友』だとは。

「――だが心配させてもいけない、数日中に一度戻る」

「うん・・・気をつけて」

「ああ・・・」

通信が切れると同時に、シャマルはまだ手を付けていない使用済みの食器に手をかける。

スポンジを泡立てて洗物を再開するも、彼女の思考はもっと別の所へシフトしていた。

（何かが・・・・・・何かがおかしい・・・）

それは、パズルのピースがピッタリ嵌っているにも関わらず、
描かれた絵柄が周りのそれと繋がらないのと同じ。
『主を救うのに、最も正しい方法をやっている』はずなのに、
寧ろ逆に主を苦しませているような気がしてならない。

――――が、彼女等に立ち止まる時間も、猶予も残されていない。
そんな変えようのない事実が、彼女等の思考能力を麻痺させる。

（・・・そんな筈無いっ！！）

一時の迷いだと、自分自身を諭す。

――闇の書が完成し、その真の本性を晒すまで、あと『６０ページ』と『二日』。

◇◇

「はいどうぞ～」

「おぉっ旨そうだな～」

「わぁ～・・・今日も美味しそうだな♪」

桃子(母)さんが最後の料理を食卓に置くなり、士郎(父)さんと俺は声を上げる。

少々子供っぽい感じもするが、こればっかりは父さんと同じ感想だ。

それ程までに、母さんの料理の腕はピカイチなのだ。

皆も口々に「美味しそ～♪」等と料理を賞賛しながら、頂きますの挨拶をした。

丸パンを一口大に千切って、メインのホワイトシチューを浸して口へ運ぶ。

仄かな甘みと旨味が口一杯に広がり、自然と頬が綻んだ。

「フェイトちゃんも、沢山食べていってね？」

「はいっありがとうございます！」

そして今日は珍しい事に、フェイトも一緒になって食卓を囲んでいる。

リンディさんやクロノといった『いつもの面々』が殆ど所用で出払ってしまった為、

リンディさんが気を利かせてくれたそうだ。

「～♪」

勿論、使い魔であるアルフも一緒だが、こっちは人間態ではなく子犬フォームだ。

件のアルフは、母さんから骨付きの大きな肉を貰ってご満悦のようだ。

美由希(姉)さんが食卓の下で満足そうに肉を咥えたアルフを見て、
微笑ましいと言わんばかりの笑みを浮かべていた。

「フェイトちゃんは、今年のクリスマスイヴはご家族とご一緒なのかい？」

「はい、えと・・・・・・一応は」

家族の中ではかなり社交的な父さんの問いに、フェイトが申し訳無さそうに肩を竦(すく)めてみせる。

『家族』とは言ったものの、実際はまだリンディさんが『保護責任者』という立場で

フェイトはその庇護下にいるだけで、厳密には本当の『家族』とは言えない。

――――それに、何故フェイトがそういう曖昧な立場になったのか、俺はその理由を知らない。

『人の内面や過去に、土足で踏み込むのはご法度』

高町家で暮らし始めて、管理局と関係が出来て、俺が自然と悟った暗黙の了解だ。

フェイトの過去はアイツだけの物であり、プライバシーの範疇にある。

そういう話は、アイツから直接聞いて始めて、価値あるものになるというものだ。

「――うちは今年も、イヴは地獄の忙しさだな」

「私今夜の内に、値札とポップ作っておくから！！」

「お願いね、私達は今夜しっかり寝とかなきゃっ！」

「・・・？」

フェイトが訳も分からずに、頭に疑問符を浮かべる。

俺も話は聞いているが、精々『イヴはケーキ作りで忙しくなる』といった程度だ。

が、なのは達の言葉と普段の翠屋の様子を思い出すと、自然と答えは見つかった。

「・・・翠屋のケーキか」

「そうそう、翠屋(うち)のクリスマスケーキ人気商品だから、
イヴの日はお客さんいっぱいなの」

俺の考える通りだったらしく、なのはと姉さんが補足を入れてフェイトに説明し始める。

毎年この時期になると、普段も人気な翠屋のケーキが輪をかけて売れるとの事。

そして、その時期に訪れる恋人達や友達同士の為に、深夜まで営業しているようだ。

「恭ちゃんはいいよね～、店の中で忍さんとずっと一緒だし♪」

「・・・・・・それは別に関係ないだろ」

姉ちゃんが兄さんを茶化し、鬱陶しいのか小恥ずかしいのかは分からないが、

兄さんが顔を背ける。

・・・・・・姉さんからエイミィと同じ空気を感じたのは、気のせいじゃない筈だ、うん。

「あ～美味しかった～」

「うん・・・美味しかった♪」

「（～♪）」

「送ってあげなさい」と父さんに言われ、アルフのリード片手にフ

ェイトの隣を歩く。

母さんは渋っていたが、俺は快くフェイトの『護衛』を引き受け、今に至る。

アルフは先ほど食べていた肉の味を思い出したのか、また涎を垂らしていた。

「・・・ん、メールか、・・・・！？」

「あれ・・・こっちも・・・え、これって・・・・！？」

「（？　二人共どうしたんだ？）」

と、突然俺とフェイトの持つ携帯が、同時にメールの着信を告げる。

互いに顔を見合わせながらメールの件名をチェックするなり、目を丸くする。

メールはクロノから送られており、件名は――――『闇の書について』と銘打ってある。

本文を確認すべく、ボタンを押した。

『これはユーノが、無限書庫を調べ上げて探し出したモノだ。
まず、〈闇の書〉とは真の名前ではなく、正式名称は――――』

「『夜天の魔道書』・・・・・・・」

「そうだったんだ・・・・」

本文はまだまだ続く。

まず『夜天の魔道書』が、現在の様な呼び方をされるようになった経緯について。

魔道書に組み込まれていた『旅をする機能』『自動修復機能』が歴代の所持者の

内の何者かの手によって改変が施され、其々が『転生機能』『無限再生機能』へ

と歪められた、との事だ。

そして、単なる資料本がプログラムの改変を受けた結果、内包する６６６ページを

リンカーコアの魔力で満たす事で、持ち主は莫大な魔力であらゆる

魔法を行使

出来るようになってしまったようだ。

だが、それはあくまで『過去に知られていた事』だ。

ある段落に記された記述の内容に、俺とフェイトは目を疑った。

『６６６ページ全てが埋まっても、持ち主は自由にその力を行使できない。

捻じ曲げられたプログラムにより、蒐集された莫大な量の魔力は、全て〈破壊〉という用途にしか使われず、持ち主も魔道書に取り込まれてしまう』

『・・・・・・・・・・・』

俺も、フェイトも、傍で見ていたアルフも、言葉を失った。

その後、フェイトの家に着くまで誰一人として、口を開かなかった。

「・・・・・・じゃあ、また明日」

「うん・・・おやすみなさい」

「・・・また、な」

言葉少なめに挨拶を交わし、フェイト達の姿がドアの向こうへと消えていった。

重い空気が、まだ辺りを漂っている。

・・・母さんのシチューを食べたのが、遥か遠い昔に感じられる。

シチューの代わりに、何か重い物が胃の中に沈み込んでいる、そんな感じがした。

「・・・？　メール・・・またクロノからか・・・？」

フェイトの家であるマンションから離れて5分と経たない内に、また新着メールが届く。

メールの件名には、『君には伝えておこうと思う』と一言。

俺にだけというのは、一体どういう事なのか。

疑問の答えを知るべく、メールボックスを開いた。

『君にだけ伝えようと思ったのは、君がなのは達と違って、
この事実を冷静に受け止められると思ったからだ』

「あいつ等には荷が重過ぎるって事なのか・・・？」

そっちの疑問はさて置き、目線をメール本文の下へと移す。

「・・・・・・っ！！」

文面の頭を見た時、俺は心臓の脈を一拍素っ飛ばした様な錯覚に襲われた。

そして、胸から何かが込み上げてくるのを感じた。

『〈夜天の魔道書〉の持ち主は、八神はやてという少女だ』

それは、俺が以前感じ取った『違和感』の正体でもあり。
そしてそれは、俺やなのは達にとっては『哀しい』真実だった。

「・・・・・・くそっ」

毒づき、家に向けていた足を丘の上の公園へと向ける。
母さんと父さんに「夜風に当たってくる」と短いメールを送り、公園へと駆け出す。
そうする事で、俺の胸の内から込み上げてきた物の正体を知る事が出来た。

――――憤りだ。この巡り合わせに対しての。

あいつ等は――――ヴィータやシグナム達は、あの事を知らないだろう。

自分達のしてきた事が、寧ろ主を――はやての首を絞める事になっているという事を。

「こんなのって・・・・・理不尽だろ・・・・・っ！！」

連中の心意気は、賞賛に値する物だ。

けどその『忠義』や『親愛』といった感情が、今の状況を生み出している。

その事が、また更に悔やまれる。

そして間の悪い事に、五つ程前のすずかとアリサとのメールのやり取りで、約束してしまったのだ。

『クリスマスイヴの明日、終業式帰りにはやての病室へサプライズに行く』、と。

『サプライズ』、つまり約束無しではやての所へ行き、驚かせようという魂胆だ。

この前感じた視線が『連中』の内の誰か一人なら、今まで俺達と鉢合わせなかったのは、

間違いなくそいつが見舞いの時間をずらしていたから。

多分明日は・・・今度こそ奴等と鉢合わせしてしまうだろう。

予測し得る最悪のシチュエーション――――はやての病室の中で。

「覚悟は・・・・・・出来てる・・・・よな？」

雲の出てきた星空を見上げ、自問する。

動揺と困惑、憤りとで乱れた心拍も、既に元に戻っていた。

それどころか、心臓が止まってるんじゃないかと錯覚する程、落ち着いていた。

「・・・・・・よし」

踵を返し、再び家への帰路を辿る。

（何が何でも・・・あいつ等を止めてやる・・・！！！）

◇◇

「はやて・・・ごめんね、あんまり会いに来れなくて・・・」

「ううん・・・元気やったか？」

日も落ちかけた、夕暮れ時のクリスマスイヴ当日。

申し訳無さそうに謝るヴィータを、はやては穏やかな笑顔で迎える。

「うん、メチャメチャ元気！！」

愛おしそうに頭を撫でられ、沈んでいた顔がパアッと笑顔へと変わる。

そんな様子を窓際で、シグナムとシャマルが同じく穏やかな表情で見つめている。

幸福ではないが、決して冷たくはない穏やかな空気が、病室を包んでいた。

――――ドアのノックされる音が、聞こえるまでは。

「「ん・・・？」」

『・・・こんにちは～』

「「！？」」

ノック音の後に聞こえてきたのは、主である八神はやての数少ない友人、

『月村すずか』の、少し遠慮がちな声。
問題はその子ではなく、その子の連れ――『友達』の方だった。

「あれ、すずかちゃんや？　はいっどうぞ～！」
『こんにちは～』

はやてが招き入れると、数人の小さな人影がゾロゾロとドアをくぐって来る。
その中に招かれざる客の姿が――――なのは・フェイトの姿が。
そして一番最後に入ってきたのは、今までなのは達と同じ管理局の魔道士だと
疑っていた唯一の少年――――純騎だった。
（・・・・・・想像通り、か）
諦めとも取れない、淡々とした無表情で純騎は思った。

無関係なはやてやすずか達に気取られぬ様、至極普段通りに声をかける。

「よぉはやて、周りの人達は親戚か？」

「うんそうやっ！　皆もご挨拶しいや？」

『・・・・・・・・・・』

やはりというか、当然と言うべきか。

シグナムとヴィータは警戒心を、シャマルは心配そうな表情を向ける。

事情を認知している者以外には感じ取りにくい、重く微妙な雰囲気が漂う。

程なくして、目配せをしていたシグナムとシャマルが、少しもたついて名前を名乗った。

「・・・シグナムです、よろしく」

「シャマルです・・・はやてちゃんがお世話になってます・・・」

「・・・高町純騎です、こちらこそよろしくお願いします」

純騎はポカンとした様子のなのは達に目配せをすると、二人に自己紹介をした。

こうなってしまった以上、無関係なアリサ達に怪しまれるのは好ましくない。

表面上は笑顔を保ちつつ、はやてのお見舞いをするのが先決だ。

「所で今日は皆どないしたん？」

「あぁそうだった、実は・・・アリサ、すずか」

「分かってるって！」

「うんっ！」

「・・・？」

二人に目配せでＧｏサインを出すと、二人がコートを抱えた腕をはやての方へ突き出す。

何だろう、とはやてが疑問符を浮かべると――。

『せぇーのっサプライズプレゼント～！！』

アリサ達が腕に抱えたコートを取り払うと、そこにはリボンで装飾された、

二つの正方形の箱が現われた。

即ち、クリスマスプレゼントだ。

最初はキョトンとしていたはやてだったが、忽ちその顔が嬉しそうな笑顔へと変わる。

「今日はイヴだから、はやてちゃんにクリスマスプレゼント♪」

「はぁ～ホンマか～！！　ありがとうな～♪」
「皆で選んできたんだよ？」
「後で開けて見てね～？」

屈託のない笑顔でプレゼントを受け取るはやて。
そんな微笑ましい様子を、俺達は棒立ちで眺めていた。
来て良かったと思う反面、居心地の悪さも同時に感じている。
それは、なのはとフェイトも当然同じだ。

「皆、コート預かるわ・・・」
「あ、どうも」
『はーい！』

遠慮がちに声を上げたシャマルに、一礼してから自分のコートを手渡す。

純騎がアリサとすずかの分を受け取り、それをまたシャマルの手へ渡す。

その間に念話でフェイト達と今後について話そうとした、が。

「（おい二人共、これからどうする？）」

「・・・え、うっうん・・・」

「？　念話で話さねぇと丸聞こえだぞ・・・？」

仕方無しに二人の耳元に寄って小声で話しかける。

・・・確かに部屋に入った辺りから、微かに違和感を感じるが。

「・・・念話が通じない・・・」

「えっ・・・・・・通信妨害か」

少し考え、直ぐに結論を導き出す。

連中の一人――――シャマルは、数回あった戦闘でも肉弾戦は愚か、前に出てきた所を見た事がない。

後衛に特化した能力なら、念話妨害くらいならやってのけるだろう。

「・・・シャマルはバックアップのエキスパートだ、この距離なら造作もない」

そこには絶対の自信があるらしく、語気からは揺ぎ無い意志を感じ取ることが出来る。

――――そしてさっきから、背中の方から浴びせられる視線が、痛い。

「えと・・・そんなに睨まないで・・・」

「睨んでねぇです、こーゆう目つきなんです」

敵意剥き出しなヴィータが、俺となのはに獣性を露わにして睨みつけてくる。

彼女の激昂に燃える青い目が、一際鋭く俺達に向かって注がれる。

物凄い気迫に気圧(けお)され、なのはは申し訳無さそうに表情を暗くする。

「ヴィータ、嘘はあかん！　嘘つく子はこうやで～？」

「んっんんぅ～っん～っ！！」

ヴィータがはやてに、お仕置きと言わんばかりに鼻を摘まれる。

ヴィータの気がはやての方へ逸れてくれたお陰で、あの殺気に満ちた視線は止んでくれた。

依然としてなのはは浮かない顔をしているが、しょうがない事だ。

「・・・ケーキ、食べないか？」

全員分のコートを掛け終えたシャマルに、ワンホール分が丸々入った箱を差し出す。

父さんに今日のサプライズの事を話したら、ちょっと都合してくれた物だ。

病室で食べるなら、と、束になった紙皿とフォークも一緒に入れられている。

「折角のイヴにケーキがないのは・・・淋しいだろ？」

「・・・っええ、頂きますね」

硬い表情なまま箱を受け取り、皿を皆に配分してケーキを１ピースづつ配る。

はやてとのちょっとした雑談が終わるまで、空気は何処となく険悪なままだった。

その後、アリサ達と別れ、俺達はシグナム等と面と向かって相対することとなった。

「・・・・・・はやてが『闇の書』の主で、間違い無いんだな？」

はやての入院している病院から、遠く離れたビルの屋上。

昨日のユーノのレポートの内容の真偽を確認すべく、核心へ触れる。

シグナムは黙って頷くだけだったが、それで十分だった。

「悲願は後僅かで叶う・・・・！！」

「邪魔をするなら・・・はやてちゃんのお友達でも・・・・！！」

「待って、ちょっと待って！！　話を聞いてください！！」

シャマルの言葉を遮り、なのはが声をあげる。

「駄目なんです！！　『闇の書』が完成したら、はやてちゃんは――――」

と、そこで言葉を途切れさせざるを得なくなる。

「――――ハアッ！！！」

「っ危な！！？」

不意を突いて飛来したヴィータが、自身のデバイスでなのは目掛け、強襲をかける。

なのは達二人よりも早くそれを察知した純騎が、なのはとヴィータの間へ割込む。

〈Ｐｒｏｔｅｃｔｉｏｎ．〉

「くおおおおっ！！」

バリアジャケットの装着――及び青年の姿への変身――をしなかった所為か。

吹っ飛ばされない様にと踏ん張る純騎の身体が、打ち振られた鉄槌を受けて、

徐々にコンクリートの床を滑る。

「だぁりゃあああああっっ！！！！」

「ぐっくうっっ！！？」

額に汗をかきながら踏み止まる純騎に、ヴィータがダメ押しの一撃を叩き込む。

衝撃で数メートル床を滑り、摩擦で起きた熱で、履いていたシューズの靴底から

僅かに白煙が上がる。

幸い壁や近くのなのは達に激突して、二次的な被害は出なかったものの、

不意打ちを防ぎきった純騎はその場で片膝をついてしまう。

「純騎くんっ！！」

「大丈夫だ！！　それより・・・！」

駆け寄ろうと一歩踏み出しかけたフェイトを制止させ、再び立ち上

がる。

「もう邪魔すんなよ・・・もうあとちょっとで助けられるんだよ・・・っ！！」

紅い魔力を纏ったかと思うと、以前から見慣れた騎士甲冑に身を包んだヴィータが、

俺に鋭い眼差しを向け、鉄槌を振り被る体勢をとる。

「――――だから・・・・・・っっ！！」

連中の――ヴィータ達の言葉の節々から、あいつらの気持ちが零れてくる。

でも、『言葉』は通じても『話』は通じない。

何故なら、立ち位置が違うから。

曲げられない目的が、そいつらにはあるから。

――口で駄目なら身体で、行動で自分の意思を示すしかない。

――拳に、そして剣に、自分の思いを乗せて激突するしかない。

否が応でも、戦いは避けられない。

――いや、今回ばかりは『避ける』んでなく、『向き合う』んだ。

死力を尽くして、手加減無しで――――。

「――っ邪魔すんなあああああああっっ！！！！」

「純騎くんっ！！？」

振り下ろされた鉄槌が爆炎を吹き、屋上の一角が炎熱地獄と化す。
燃え盛る焔に呑まれた純騎の影が、熱でゆらゆらと揺れる。

「ハアッ・・・ハアッ・・・・！！」

普段滅多に使わない量の魔力を使った所為か、息を切らして佇むヴィータ。
彼女の頬に、一筋の涙が伝う。

「――――来い、ムラサメ」

「・・・！！」

カツカツと、ブーツがコンクリの床を叩く音。

炎に揺れる影が次第に濃く、その姿を鮮明にしていく。

そしてその影の手には一本の、鎖に捲かれた鞘に収まった刀が握られていた。

「・・・ぐううっ！！」

呻き声を上げ、影が刀を鞘から引き抜こうと柄を引く。

刀と鞘を縛っていた重苦しい鎖が、ギチギチと鈍い音を立てて軋む――。

ガキッ　バキッ　ガキンッ！！

幾重にも捲かれた縛鎖が、彼の腕力に負けて弾け始める。

――――そして。

「――ハアッ！！！」

取り巻く炎の壁を刀で真一文字に払い飛ばし、影が――――純騎が再び姿を現した。

メラメラと揺らめく炎を背にし、右手に握った刀――ムラサメの切っ先を、勢い良く払う。

「・・・・・・悪魔め・・・・！！」

「悪魔、か・・・・・・別にいいか」

ヴィータの物言いを自嘲気味にスルーすると、腰に着けられた

ベルト――――ネロの宝玉が光を放ち、純騎の身体を黒色の衣が包み込む。

燻(くすぶ)る炎の照り返しと熱気で、黒衣がはためき、赤く彩られる。

「悪魔らしい・・・若干強引なやり方で――――」

払った切っ先をヴィータ達へと突きつけ、語気を荒げて一喝。

「――――話を、聞いてもらう！！！！」

(To be continued)

第１６話　†イヴの夜を穢す者†←執筆中

「おおおおっっ！！！」

「ぐっっ！！？」

振り下ろされたムラサメの鋭い刃が、寸での所でヴィータの張ったシールドに阻まれる。

が、只の斬戟だけで終わる筈はなく、拮抗した状態から再び攻撃態勢をとる。

「（一点重撃、『我流一刀・御神流』――――）」

シールドで弾かれた刀の柄頭を魔力で補強しつつ、反動を利用して突き降ろす！！

「――――富嶽割りっ！！」

ドゴオオオオオン！！！！

「っあがっぐ・・・！！！！」

勢い良く突き降ろされた柄頭とシールドの表面とが激突し合い、再び火花を散らす。

だが、先ほどの剣戟とは、重さも威力も半端ではない。

『斬る』のではなく、『突く』という動作。

『線』の剣戟と、『点』の打突という攻撃系統。

一点に集約された力が、ヴィータの掌（てのひら）から張られた堅固な障壁に、目に視える亀裂を奔らせ、硬い床に膝をつかせる。

「――はあっ！！」

「っちいっ！！」

あと少しでシールドが砕ける、といった所で横からシグナムが乱入し、

白い鞘から抜かれた剣の刃が、純騎の左肩へと迫る。

舌打ちをしながら力を抜くと、一旦刀を左腰の鞘に収め――――、

「おらあああっっ！！！」

「なっくぅっ・・・！！」

その場で身体を回転させたかと思うと、勢いのついた鞘が剣閃をギリギリで弾き、

回転の勢いそのままに、シグナムの脇腹目掛けて刀を抜刀する！！

後退して何とか避けたシグナムだが、纏っていたジャケットに一文字の切れ込みが入る。

「はあああああ！！！」

「く・・・っおおおおお！！！」

純騎は右手と左手にそれぞれムラサメとその鞘、シグナムは炎の魔剣（レヴァンテ）を両手で持ち、互いに肉薄する。

純騎の刀と鞘の構えは、宛（さなが）ら江戸時代の剣豪――宮本武蔵が源流の剣術『二天一流』の型を踏襲したような形。

迫ってくる刃を払い、己の得物を目の前の敵に突き立てるべく、剣を、刀を振り回す。

が、刀と鞘で小太刀二刀を再現している純騎が、シグナムの一刀より手数で優っている。

『御神流・虎乱』と呼ばれるその連撃で、純騎はシグナムを圧していく。

ビキッ　バキッ　ガキィッ！！

「ぐっく・・・・！！」

防戦一方のシグナムの手にあるレヴァンティンが、純騎の苛烈なまでの剣戟に耐え切れず、

幅広なその刀身に亀裂を生じさせる。

「――ラケーテン・ハンマアアアア！！！」

「うおっと！？」

と、今度はダウンから復帰したヴィータの戦槌の一撃が迫る。

間一髪でそれを避けると、空を切ったハンマーの先端（スパイク）部分が硬い床を抉り取る。

そこになのはの『アクセルシューター』が飛来し、ヴィータが防御を余儀なくされる。

――――俺に攻撃が集中している。

ヴィータとシグナムの攻撃を受け切り、ふと思考してみる。

――――俺の中のリンカーコアが狙いってか。

ユーノの資料には確か、一度コアを吸収された魔導士からは二度は『蒐集』する事は出来ないとあった。

つまり今回の獲物（ターゲット）は、まだ『蒐集』されていないこの俺、という事が容易に想像がついた。

以前の戦いで力量の差を見せつけているのに、それでも尚向かってくるその気概には、

敵ながら敬意を称するものがある・・・・・が。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9833o/

魔法少女リリカルなのは　†THE EXECUTER's SAGA†

2011年11月15日19時50分発行